
ウルトラマンコスモスサーガ

ハナト・バーニングブレイブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンコスモスサーガ

【Nコード】

N5423X

【作者名】

ハナト・バーニングブレイブ

【あらすじ】

ギガエンドラを破壊し、ムサシと共に宇宙へと旅立ったウルトラマンコスモス。

一度ムサシと別れたコスモスは、突然謎のブラックホールに吸い込まれてしまう。

その先で記憶を失ったコスモスは、ミッドチルダへと辿りついていった。

果たして彼は記憶を取り戻せるのか？

ブラックホールを出したのは誰なのか？

ウルトラマンコスモスの新たな戦いが始まる！

感想制限を外してみました。

プロローグ（前書き）

始めましての方、そうでもない方、どうも、ハナト・バーニングブレイブです。

この度はウルトラマンコスモスStrikersをお読み頂きありがとうございます。

今回はプロローグですが、次回より本編がスタート致します。どうぞ気長にお待ち下さい。
では、本編をどうぞ。

プロローグ

ギガエンドラを破壊し、ムサシと共に宇宙へ旅立ったコスモスは、一度ムサシ達と別れ宇宙を旅していた。

しばらく宇宙を飛行していたコスモスだったが、突如その眼前に歪んだ穴が発生する。

『何だ……？ これは……』

狙ったかのように発生したそれを回避しようとしたコスモスだが、抵抗も空しくブラックホールの中に吸い込まれていく。

（ムサシ……！）

大切な親友の名を心の中で呟き、コスモスはブラックホールの中に消えていった。

——第0管理世界・ミッドチルダ

17歳になり、駆け出しの執務官として実力をつけ始めていた女性が居た。

美しい金髪に真紅の両眼の女性、『フェイト・T・ハラOWN』
テストロッサ

その夜から24時間の休暇を貰ったフェイトは、一人帰路を歩んでいた。夜景に煌く金髪とその美貌に、すれ違う男性皆が振り向くそれに気付かないまま、フェイトは自身の暮らすマンションに向かう。

その途中、ビルの陰から不自然に伸びた人の脚の様な物が見えた。慌ててそこに駆け寄り、フェイトは脚の先を見る。

そこには、意識を失った様に倒れている小さな少年の姿があった。

「君、大丈夫!？」

フェイトはすぐに少年を揺する。

すると少年の指が一瞬動き、ゆっくりと目を覚ます。

「……ここは……?」

「ここはクラナガンだよ。君のお名前は? あ、私はフェイト・T・ハラOWNだよ」

フェイトは少年を怖がらせないよう、優しく話す。

少年は一瞬苦しそうな表情をした後、フェイトの顔を見る。

「僕は……」

そこで少年は目を瞬かせる。

「……誰？」

「えっ……？」

少年の言葉に、フェイトの思考回路は一瞬凍結した。

プロローグ（後書き）

次回はキャラ紹介は第1話を更新します。
気長にお待ち下さい。

第1話 小さな宇宙（前書き）

今回も短いです……。

第1話 小さな宇宙

「う……ん……？」

真っ白いベッドの上、少年は目を覚ました。といっても、突き刺さる様な眩しい電灯に再び強く目を閉じてしまう。目の奥が赤くなり痛みを感じるが、それが引いてきた所でゆっくりと瞼を上げる。すると目の前に、金髪に赤い両眼の女性が顔を覗き込んでいた。

「あ……」

「気が付いた？」

少年が小さく声を漏らすと、女性は優しく微笑んだ。
女神という言葉が浮かんだ少年は、優しく微笑む女性の白く美しい顔に見惚れていた。

「えっと……？」

「フェイト・T・ハラOWN。よろしくね。で、君は……？」
デスタロッサ

「……ごめんなさい、なんにも分からないんです……」

何か言わなきゃと思って口を開く少年に、フェイトが二度目の自

己紹介をする。だが話を振られたとき、少年は目を逸らして俯いてしまう。

そんな少年に一瞬慌てるフェイトだが、すぐに表情を元に戻し、少年の手を優しく握る。

「ゆっくりでいいよ？ 私が傍にいるから……ねっ？」

フェイトの握る手が暖かく、頭を撫でられて少年は何かを感じる。

「……ムサシ……」

「えっ？」

少年の発した単語に、フェイトが思わず目を見開く。

「ムサシ……それが君の名前？」

「分かりません……。ただ、凄く優しくて、強い名前だった気がします……」

「じゃあ、今日からあなたはムサシ・ハラウン。で、いいかな？」

少年は『ムサシ』という単語に、並々ならぬ愛着と優しさ、強さ、そして勇気を感じていた。それを聞いたフェイトは、自身のもらっ

た性を合わせムサシ・ハラオウンと目の前の少年を命名する。
少年はしばらく考えた後、頭を勢い良く振って頷く。

「うん！ よろしくね、ムサシ」

再びその微笑を見て、ムサシも釣られて笑みを漏らした。

ウルトラマンコスモスStrikers

第1話 小さな宇宙

しばらくして、ムサシはフェイトに手を引かれてどこかの廊下を歩いていた。はたから見ると兄弟、もしくは親子に見えるその光景に、すれ違った誰もが驚き振り向く。一部の男性局員はムンクの叫びの様な顔になっていた。

周囲をキョロキョロと見渡しながら、ムサシはフェイトを見上げる。

「あの……、僕はどこに行くんですか……？」

「ん？ ちょっとお友達を紹介しにね」

それを聞いて期待と不安を半分ずつ抱きながら、ムサシはフェイトと共にどこかの部屋に入った。

「エリオ！ お友達連れてきたよ！」

フェイトがそう言うと、赤毛の少年がこちらに振り向いた。だがムサシを見た途端、表情が険しくなる。それに怯えたムサシは、フェイトの後ろに隠れる。

「こらエリオ、ダメだよ人を睨んじゃ」

「……誰？ そいつ……」

フェイトが優しく注意するが、エリオは凄い目でムサシを睨み続ける。その拳からは、青い電撃が迸っている。

フェイトは一瞬困った顔をするが、ムサシはおずおずとエリオに近付いていく。

「えっと……ムサシ・ハラウンです……。よろしくお願いします」

ムサシはエリオを見ながら、自己紹介をしてペコリと頭を下げる。フェイトもエリオも驚いていたが、エリオもフェイトの手前、あまり何かを仕掛ける気は無いのか電気を収める。

「エリオ……。エリオ・モンディアル……」

ぶつきら棒に自己紹介するエリオ。フェイトは二人に微笑みながら、不意に呼ばれて部屋から出て行った。
その背中を見送るムサシを良い事に、エリオは右の拳に電気を纏わせてムサシの喉元に突きつける。

「お前……一体何者だ？」

「何って……ムサシ・ハラウン……」

「そんな事聞いてない！ お前の中から……良く分かんないものを感じる……」

睨みを利かせながらムサシを警戒するエリオに、ムサシはなぜか何をするべきか分かっていた。

ポケットから青い石を取り出し、それに付いた紐を握って回す。

その音色に電気を収めるエリオだが、頭を振って再びムサシの首を掴む。

そこから電流が流れ、ムサシが呻き声をもらす。

「お前……やっぱり変だ！」

首を握る力を強めるエリオの手を、ムサシは石を握った右手で触れる。

すると彼の頭に、走馬灯の様な勢いで何かが入り込んできた。

突然家族と引き離され、自分が自分で無い事を知り、誰も信用しなくなつた。ただ一人、フェイトを除いて……。

「今の……？」

ムサシは目の前の少年を見る。その頬を伝う、一筋の雫を。

ムサシは渾身の力でエリオの腕を首からどけ、その頭に手を置く。そして優しくその赤毛越しに頭を撫でる。

「なっ……！？」

驚き、すぐに抵抗しようとしたエリオだが、なぜか体が言う事を聞かない。ムサシはただ微笑みながら、エリオに優しく言葉をかける。

「怖いよね、辛いよね。自分が誰か分からなくて、誰を信じていいのか分からないのって……。」

でもね？ それでも人の心から、優しさって言うのは消えないんだよ……？

自分が苦しくて泣きそうなとき、きっと誰かが手を伸ばしてくれ。だから僕も、君が苦しくて泣いてるから手を伸ばす」

ムサシには記憶など存在しない。だが、なぜか彼の口からは淡々と言葉が漏れる。

それは彼の本質によるものだろうか……。

エリオは完全にムサシに敵意は見せず、ただ小さく呟く。

「なんで……？」

「僕と君、友達なんですよ？」

それを聞いた途端、エリオの感情を抑えていた何かが弾けた。自分でも何がか分らないくらい、彼は泣き叫んだ。

傍にいてという意味を伝えるかのように、ムサシはエリオの頭を撫で続けてそつとその背中を優しく叩く。その時、彼の持っていた青い石が一瞬煌いた。

数分後、戻ってきたフェイトは一瞬驚いたが、すぐにくすりと笑った。

ソファーに座り、互いの頭をくっ付けながら眠る少年二人に、フ
イトはそつと毛布をかけた。

その頃、ミッドチルダに人知れず何かが飛来した。
虹色の美しい光を放つウィルス、『カオスヘッダー』が……。

第1話 小さな宇宙（後書き）

次回予告

フェイト

「あれは……？」

ムサシ

「怪獣だったら、どんな子でも傷付けていいの？」

エリオ

「あの子、泣いてるみたい……」

リドリアス

『ケエー……』

ムサシ

「待つてで。今僕が、助けてあげるから……」

次回、ウルトラマンコスモス！

【慈しみの月】

その時、青き月の戦士が異世界に舞い降りる！

第2話 慈しみの月（前書き）

とりあえず、私のコスモス好きを分かっ
て頂ければ幸いです。

第2話 慈しみの月

すっかりエリオと打ち解けたムサシは、ほのぼのとした日々を送っていた。

「エリオのそれ……デバイス、だっけ……？」

ムサシはエリオの右腕に付いた腕時計を指す。
それを聞いたエリオは、嬉しそうに腕時計を見せる。

「うん！ フェイトさんがくれた僕の相棒、ストラーダだよ！」

《どうも》

「しゃべったっ！？」

エリオの言葉に反応するかのように、ストラーダが点滅し声が聞こえる。それに興奮したムサシは、目をキラキラと輝かせてフェイトの下に駆け寄る。

「フェイトさんフェイトさん！ 僕もっ！ 僕もデバイス欲しいですう！」

座っているフェイトに顔を近づけ、そのキラキラとした視線を正面からぶつける。

そのキュンと来る様な小動物的な可愛らしさに、フェイトは思わず抱きしめたくなくなってしまいが寸前で踏み止まる。

そしてムサシの頭に手を乗せ、聖母の様な笑みを浮かべる。

「うん。じゃあちよっとお出かけしてこよっか」

「わあゝい！」

嬉しそうにピョンピョン跳ね回るムサシ。そして強引にエリオの手を引っ掴み、フェイトの後を追いかけた。

――管理局地上本部

デバイスルームと呼ばれる薄暗い部屋に着いたムサシ達一行。奥へ進むと、丸い眼鏡をかけた女性と遭遇した。

「こんにちは、マリーさん」

「フェイトちゃん！ いらっしゃゝい……ってもう二人も子供を！

「？」

「いえ、あの……」

激しい誤解をしたマリーに状況を説明し、5分経ってようやく本題に入る事ができた。

「実はかくかくしかじか……」

「ふむふむ……つまりはこの子のデバイスを作って欲しいって訳ね？」

（（通じた！？））

フェイトの説明になっていない言葉に理解した様子のマリー。
エリオとムサシは心の中で同時にツツコミを入れるが、あえて口にしない当たりこの子達は大人であろう。

「ふむ……。で、ムサシ君はミッド式でいいの？」

「みつどしき？」

マリーの言った言葉の意味が分からず、首を傾げるムサシ。するとフェイトは自分の右手に金色の丸い魔法陣を展開する。

「この丸いのがミッド式ね。で……」

「僕みたいに三角形なのがベルカ式だよ」

エリオも同様に右手に赤い三角形の魔法陣を展開する。

二つを交互に見ながら、ムサシも見よう見真似で右手に意識を集中させる。

「はあああああ……」

すると右手に、青い円状の魔法陣が展開される。

「わあ！ フェイトさんとおそろいだっ！」

フェイトの右手に出現しているミッド式魔法陣と自分の魔法陣を見比べ、嬉しそうに飛び跳ねるムサシ。

ムサシとフェイトが楽しそうに見比べあっているのを見ながら、エリオは羨ましそうにそれを見る。

「こほん」

楽しいな空気に水を差すように、マリーが一つ咳払いをする。

「じゃあムサシ君？ デバイスはどんな形状がいいかな？」

「あ、ちなみにストラダーは槍だよ！」

軽くて首を捻り、青い槍を見せるエリオ。
男子なら誰もが憧れるようなその形状に、ムサシも目を輝かせる。

「んゝ……何がいつかなあゝ……？」

顎に手を当てて楽しそうに考えるムサシ。

「エリオはベルカ式で接近戦中心に、でも手足の短さをカバー出来る様に槍にしたけど……」

フェイトも首を捻って考える。

そもそもムサシが誰かと武器を交える姿さえ想像できない為、余計に悩んでいた。確かに少し成長すれば、友人と公園で小さな模擬戦をする事も出てくるだろう。それでもムサシは誰かに手を上げる事を極端に嫌う。なぜだかフェイトにはそんな気がしていた。

「決めた！ 盾でお願いしますっ！」

「「盾？」」

満面の笑みで形状を言うムサシに、フェイトとマリーは揃って聞きかえす。

てつきり子供が懂れる剣やバズーカ等と言ったかと思っていたため、かなり意外な選択であった。

「はい！」

誰も傷付けず、誰かを守る。相手の攻撃を受け流し、受け止める。その上で、相手のスタミナ切れを待つ」

ムサシなりの考えを説明する。それを聞くと、ある意味彼らしい選択でもあるように思えてきた。

大分後ろ向きな戦闘スタイルになるが、誰かを傷付ける事を極端に嫌うムサシには合っていた。

そしてマリーに設計を頼み、ムサシ達は戻っていった。

エリオの槍とムサシの盾。
ストラダー

それは偶然にも、二本の有名な古文、『矛盾』を模しているようだった。

同じ頃、ミッドチルダに突如出現したカオスヘッダー。

それらはゆっくりと、しかし確実に活動を開始していた……。

ウルトラマンコスモスStrikers

第2話 慈しみの月

――数日後

マリーの報告を受け、ムサシ達は素早くデバイスルームに向かった。

「はい。ムサシ君のデバイス」

そう言って渡されたのは、金色の三日月を模したペンダントだった。それを大事そうに受け取り、ムサシは首からかける。

「ムサシ、その子に名前付けてあげて」

「はいっ！ 昨日お布団の中でずっと考えてました！」

嬉しそうにペンダントを撫でるムサシに、フェイトが言う。ムサシは元気良く答え、その足元に青いミッド式魔方陣が展開される。

「新規登録……使用者^{マスター}、ムサシ・ハラオウン……」

フェイトに教わったとおりの言葉を呟くムサシ。
首にかけていたデバイスは少し浮かび上がり、下から風が巻き起こっているかのようにムサシの髪もかすかに浮く。

《使用者^{マスター}、ムサシ・ハラオウン。認識》

「名称登録……、青い宇宙……、ブループラネット。愛称^{ニックネーム}、ルット
！」

《新名称、ブループラネット。及び愛称^{ニックネーム}、ルット。認識》

すると魔法陣が消え、ふわりとルットがムサシの首に戻る。

《おはようございます。そして初めまして、マスタームサシ》

ルットから、ムサシより少し年上の少女の様な声がする。それに少し驚きつつも、笑顔を見せるムサシ。

「うん、おはようルット。調子はどう？」

《今の所、何も問題はありません。快調そのものです》

「良かった」

そうやり取りをしていると、突然デバイスルームが揺れる。そして部屋が赤い光に包まれ、緊急事態を知らせるアラートが鳴り響く。

「なに！？」

《危険物を確認。地上本部から143メートル先に巨大生物出現。コンディションレベルオレンジを要請》

フェイトの言葉に、ルットが冷静に答える。フェイトが外に出るよりも早く、ムサシが外に向かって駆け出した。

「ムサシっ！」

それを追ってエリオも出て行ってしまった為、フェイトも慌ててそれを追いかけた。

ムサシは走りながら、青い石を取り出し、握り締めた。

地上本部の外に出たムサシは、苦しみもがいている様にも見える翼を持った怪獣を視界に捕らえる。

「リドリアス……」

ムサシはなぜだか分からないが、怪獣の名前を呟いていた。そして無意識の内に、青い石を優しく振り回していた。すると心地良く、優しい音色が響き渡った。

『クウ………』

リドリアスは落ち着きを取り戻したのか、ムサシを見下ろすと動きを止める。そこにフェイトとエリオが駆け付けるが、状況が把握できずキョトンとしている。

ムサシが微笑み、リドリアスに歩み寄る。だがその瞬間、無数の魔力弾がリドリアスに直撃した。

『キエアッ！？』

それを食らい、再びリドリアスはもがき始める。

ムサシが上を向くと、武装した管理局員達が、リドリアスに向かってデバイスを向けていた。

「止めてよ！ 何で、何でこんな酷い事するんだよっ！ あの子が苦しんでるのが見えないの！？」

ムサシは地上から必死に訴えるが、武装局員達は聞く耳を持たない。

やがてリドリアスの姿が豹変し、温和な表情から鋭くおぞましい顔つきに変わる、両手の爪も長く鋭利になり、武装局員達に襲い掛かる。

「フェイトさん！ あの人達を止めてよっ！」

「でも……あんなに暴れてる怪獣を、このままにしておく訳にはい

オオオス!!」

自身の本来の名を叫び、ムサシの体は淡い光に包まれる。
光の中で巨大化していき、青く美しい巨人に変わる。

「あれは……?」

慈しみの月の巨人、『ウルトラマンコスモス』が降臨した。

『イヤアッ!』

コスモスは両手を開いて構える。リドリアスに向かっていこうとしたが、その前に放たれた武装局員の攻撃を叩き落とす。
そして静かに局員達に首を振った後、改めてリドリアスに向き直る。

『ファッ!』

リドリアスの猛攻を受け流し、その胴体に平手打ちを入れる。
口から放たれた青白い熱線を腕と肘で弾き、両目から『ルナスル
ーアイ』という光を放ち、リドリアスの首にカオスヘッダーを確認する。

コスモスは両手を開いて光を集め、胸の前まで腕を上げる。そし

て左手に乗せた光を、右手で押し出す様にして放つ。

淡く優しい光、『ルナエキストラクト』がリドリアスを包み込む。リドリアスからカオスヘッダーが切り離され、リドリアスは元の穏やかな姿に戻る。

『……ムンっ！』

コスモスの足元に青い四角形の魔法陣が展開され、リドリアスの足元にも同様のものが現れる。

リドリアスはそれに吸い込まれていき、忽然と姿を消した。

「今のは……、召喚魔法陣……？」

フェイトがそう呟くと、コスモスは光に包まれムサシの姿に戻る。荒い呼吸を繰り返し、駆け寄ってきたエリオを見た後、フェイトに告げる。

「フェイトさん……。僕、管理局に入ります。管理局に入って……、今みたいな無意味に怪獣を傷付けないようにしたいんです……」

「……そっか」

強い意志を見せる瞳を見つめ、フェイトは小さく頷く。

この宣言から、月日は2年ほど流れる……。

完 第1章 2年前

第2話 慈しみの月（後書き）

次回予告

ムサシ

「ムサシ・ハラオウンですっ！」

エリオ

「危ないっ！」

？

「へっ？ ……きゃあっ！」

ムサシ

「えっと……？」

レン

「レン……。レン・モロボシだ」

次回、【集合！機動六課】

新たな仲間と共に、ムサシの戦いが始まるっ！

第3話 集合！機動六課（前書き）

今回はほとんど顔見せの回です。

第3話 集合！機動六課

——ミッドチルダ・サードアベニュー

赤いツンツン頭の少年と、その少年より本人曰く1センチ小さい少年が並んで歩いている。実際は3センチほど低いのだが。

「ねえエリオ、ホントにここで良いの？」

「ムサシ、そんなに僕を信用してないの？ もう6回目だよそれ…

…」

背の低い方の少年が、赤毛の少年に唇を尖らせてそう尋ねる。赤毛の少年エリオは、背の低い少年ムサシの言葉に呆れた様なため息をつく。

ムサシはぶーぶー文句を言いながら、エリオの後ろにくっついて歩く。するとエスカレーターが上がって、ピンクの長いポニーテールの女性が姿を見せた。

「あ、あの人じゃない？ フェイトさんの言ってた迎えの人……？」

「えつと確か……、フェイトさんより背が高くて、髪がピンクのポニーテールで、フェイトさんより胸が大きくて……。うん、あの人だね！」

フェイトが言っていた特徴を口にし、目の前の女性が迎えの女性だと確信するムサシ。

エリオ共々駆け寄り、その女性に敬礼する。

「む……？」

「初めまして！ エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「同じく、ムサシ・ハラオウン三等陸士です！」

エリオは普通の敬礼だが、ムサシは指を2本だけ立てて額に当てる、独特の敬礼をしていた。

それに気付いた女性も、ムサシ達に敬礼を返す。

「そうか……。シグナム二等空尉だ。よろしく頼む」

「「はいつ……！」」

女性はシグナムと名乗り、敬礼していた手を下げる。その微笑む姿は、フェイトの様な優しさより先に凛々しい強さを感じさせた。

（優しさと強さか……。っ！？）

『優しさ』と『強さ』という単語が頭に浮かんだ瞬間、ムサシの頭に一瞬だけ激痛が走る。

頭を軽く振ってそれを払うと、もう一人合流する筈の少女がまだ来ていないらしい。

「僕らが行ってきます！ ムサシはそっちお願い！」

「了解！」

エリオとムサシは軽く目を合わせ、二人同時に逆方向に走っていた。その背中を見ながら、シグナムは闘争心が芽生えるのを感じていた。

エリオは人ごみを掻き分けながら、少女の名前を叫んで走っていた。

「ルシエさん！ 機動六課所属のキャロ・ル・ルシエさん！ いたら返事をして下さい！！」

するとエスカレーターの上から、可愛い声がした。

エリオが見上げると、フードを深く被ったどこかの民族衣装の様な物に身を包み、重たそうにケースを引き摺る少女が見えた。が、バランスを崩した様に前のめりになる。

「危ないっ!」

エリオはストラダを一度見ると、ストラダは応える様に煌く。

《s o n i c m o v e》

エリオは閃光の様に走り出し、エスカレーターの壁にぶつかりながら直線的に進んでいく。

そして少女の前まで来たとき、ブレーキに失敗したのか少女ごと転がっていく。

「うわあああああ!?!」

「きゃあっ!」

しばらく転がった後、エリオは後頭部に走る痛みに耐えながら少女を見る。

「いてて……。すみません、失敗しました……」

「いえ……こちらこそすみません……」

「……っ！」

互いに謝り合うと、エリオは自分の両手にかすかな柔らかい感触が当たっているのに気付く。

見ると、それは確かに少女のあるのか無いのか分からないほどの胸を揉んでいた。真面目な彼が、それに固まらない訳も無かった。

そこに、エリオにとっては今最も聞きたくなかった声が聞こえる。

「おいエリオ〜！ そつちには……居……た？」

ムサシが駆け寄ると、その光景を見て硬直した。

硬直すること10秒、ムサシはペンダントを見下ろす。

「ルット、写真は？」

《既に保存し、バルディツシュお義兄様に送りました》

「なにやってんのおおおおおお！？」

ムサシはルットに写真の有無を確認し、ルットはそれに明るく答える。ルットが写真を送信した事にムサシは笑顔を見せる。

その時、エリオの絶叫が駅一帯に響き渡った……。

ウルトラマンコスモスStrikers
第3話 集合！機動六課

——機動六課・隊社

先程の事件があつた翌日、ムサシ、エリオ、キャロの3人は機動六課のロビーに集められていた。既に多くの局員がおり、数分経つて部隊長である『八神はやて』の挨拶が始まる。

その横に並び立つ隊長陣を見ながら、あの時出会つたシグナムや、フェイトの親友という事で度々会つていた女性『高町なのは』を見る。

さらに自分よりも小さな少女、そして人形サイズの少女を見て、

ムサシは目を輝かせる。

（エリオ！ 僕よりも小さい子がたくさんいるよっ！）

（ム、ムサシ！ 今部隊長の挨拶中なんだからしつかり聞かなきゃ……。っていうか、皆女の子じゃん）

（むう……。ま、まあいつもフェイトさんのおっぱいばかり見てるエリオには、この気持ち分かんないよね〜）

（なっ！？ あ、あああの時は僕のせいじゃなくて……！）

（ふっふんゝ まあそう照れない照れない〜）

（ム〜サ〜シ〜！）

ムサシの念話に、エリオは呆れながら注意する。その反応に納得いかなかったのか、ムサシはエリオをからかう作戦に出る。ムサシの言った言葉に顔を真っ赤にするエリオだが、ムサシの挑発は収まらない。エリオは怒りを露にしたとき、上から声がする。

「これこれそこ〜、いくら念話でも、部隊長のお話中やで〜？」

「「ごめんなさいっ！」「」

はやてが腰に手を当てて軽く注意すると、2人は揃って頭を下げ

た。

「ついでに言うと、あたしはおめーらより年上だ」

ムサシの眼前に、赤に近い橙色の髪を二つおさげにした少女、『グイータ』がやって来る。その鋭い視線に、ムサシは冷や汗を垂らしながら頭を下げた。

——同・廊下

はやての挨拶を聞き終えたムサシ、エリオ、キャロの3人は、揃って廊下を歩いていった。すると後ろの方から、騒がしい声がある。

「あ、ティア！ レン！ あの子達じゃない？」

張りのある少女の声が聞こえ、ムサシ達は後ろに振り向く。すると青い短髪の少女と、橙色のツインテールの少女、そして短い茶髪の青年が近付いてきた。

「ねえねえ、君達？ フォワード所属の子って！」

「はい！ ライトニング分隊所属、ムサシ・ハラオウンですっ！
ちなみにこっちはリドリアス」

ムサシは少女に元気良く敬礼し、右肩に小さな怪物『リドリアス』
を乗せる。リドリアスも頭を下げ、エリオ達も敬礼する。

「同じく、エリオ・モンディアルです！」

「お、同じく、キャロ・ル・ルシエですっ！ こっちはフリード」

『くきゅ〜！』

頭の上に浮遊する小さな龍、『フリードリヒ』が甲高い声を上げて挨拶する。その後リドリアスとフリードがじゃれあつ中、少女達も挨拶を始めた。

「あたしはスバル！ スバル・ナカジマだよ！ よろしくねっ！
エリオ、キャロ、ムサシ！」

「ティアナ・ランスターよ。よろしく」

ムサシ以上に元気良くスバルが挨拶し、それにティアナが続く。
そして少し間を空けて、茶髪の青年が口を開く。

「レン……。モロボシ・レンだ」

その鋭い眼光に、エリオとキャロは一瞬身を竦ませる。だがムサシは、レンの瞳に何かを感じていた。まるで、自分と同じ様な気配を……。

その時、レンの左腕につけたブレスレットが輝いた様な気がした。

——その夜・どこかの森

長い紫の髪の少女と、同じく紫の肩まである髪 of 少年が並んで立っている。

「…………お兄ちゃん…………ゼストとアギトは？」

「ゼストは見回り……。アギトはまたフラフラしてるんじゃない？
…………お前はもう寝ろ、ルーテシア」

木陰に寝袋とテントを用意し、少女『ルーテシア・アルピーノ』を寝かしつける少年。

ルーテシアが寝息をたてるのを見て、少年は夜空を見上げる。

「……嫌な空だ……。明日は満月か……」

その少年、『マホロバ・アルピーノ』はそう呟いた。

第3話 集合！機動六課（後書き）

次回予告

エリオ

「出る！ ムサシ最大の魔法が……っ！」

ムサシ

「ゴルメデ！？」

レン

「どけ！ 邪魔すんな！」

ムサシ

「あなたも、ウルトラマンなんですか……？」

レン

「ウルトラマン？ はっ！ そんな名前、何万年も前に捨てたよ！」

ゼロ

『デアッ！』

次回、ウルトラマンコスモス！

【甲冑の戦士】

その戦士は、ウルトラマンの名を捨てた……。

第4話 甲冑の戦士

ウルトラマンコスモスStrikerS！ 前回までのおさらい！
今までの記憶を失った、いわゆる記憶喪失の僕、『ムサシ』は、
『フェイト・T・ハラOWN』さんに拾われ、『ムサシ・ハラOWN』
を名乗る事になる！

その施設で出会った『エリオ・モンディアル』と共につい先日！
機動六課という部隊に所属する事になりました！ わっはっ♪
道中、『シグナム』さんと出会ったり、エリオは『キャロ・ル・
ルシエ』ちゃんの胸を揉んだりし、僕等は無事機動六課に着きました！
た！

僕より小さな上司、『ヴィータ』さんや、『リインフォース？』
曹長、フェイトさんの親友『高町なのは』さんと、同じく親友で部
隊長の『八神はやて』さんとも会いました。

そして僕等と同じフォワードメンバーの3人。『スバル・ナカジ
マ』さんと、『ティアナ・ランスター』さん。それと『レン・モロ
ボシ』さんとも出会い、僕等の機動六課部隊員としての生活が始ま
りました！

隊員としても、『ウルトラマンコスモス』としても、頑張ろうね、
『リドリ阿斯』！ 『ブループラネット』！

『きゅー！』

《心得ております》

うん。それじゃ、今日の特訓スタートだあ！

――機動六課・演習場

宙に浮遊しているなのは、ローラーブーツを履いたスバルが、機械的な道具を右腕に装着して殴りかかる。

「おおおりやあああああああああ！！！」

その拳が、なのはの桜色のバリアに阻まれる。
その最中、両サイドから小さな刃を2本持ったレンと、ストライダ銃を構えたエリオが突進する。

「でええええあああああああああああ！！！」

「だあああああああああああああ！！！」

2人の攻撃が直撃する瞬間、なのはがさっと身を引き、スバルを含めた3人の攻撃が相殺される。

その土煙の中、橙色の弾丸がなのはに無数に襲い掛かる。

「アクセルシューター」

なのははそれを自身の弾丸で相殺し、発射した本人を探す。そしてビルの屋上にティアナとキャロを発見し、弾丸を3発発射する。が、それはティアナ達に届く事無く消滅する。するとなのはの横に、青い円形の盾を左腕につけたムサシが現れる。

「ルット！」

なのははそれを見るや否や、ムサシに向かって弾丸を数発、囲む様に放つ。

ムサシはルットに命令し、自身の体を覆う様にして半円状のバリアを出現させる。

「名付けて、ゴールデンライトバリア！」

「へえ、変わった戦い方だね」

前線で敵に突っ込む、『フロントアタッカー
センターガード
SG』というポジションのスバルとレン。
中央で指揮をする『SG』というポジションのティアナ。

フィールドを動き回り、後方を守ったり前線で突っ込んだりと忙しい『GW』というポジションのエリオ。
ガードウイング

後方で支援や回復をする『フルバック F B』というポジションのキャラ。
そしてフィールド全体を動き回り、完全に防御に徹する『フルガード F G』
というのが、ムサシのポジションである。

ガードしている隙に、仲間が相手に攻撃する。

「「「でええええええええりやあああああああああ！！」」」
「」」

スバル、レン、エリオがなのはに猛スピードで突進する。

だが、なのはは全員に向かって魔力弾を放つ。ムサシがそれを打ち落とすが、前に現れたムサシのせいで減速し、4人は衝突して落下する。

「いてててて……」

「つつ……」

「つてーな！」

「ええ！？ ぼ、僕のせいなんですか！？」

そんなやり取りをしてる隙に、なのはは魔力弾の数を増やしていく。埒が明かないと判断したムサシは、ルットに指示を出す。

「ルット！ あれ行ってみよう！」

《了解しました》

そう言つと、ルットが盾から小さなハープの形に変わる。
ムサシは詠唱を始め、ハープルットを口に当てる。

「風よ、何者も抗えない、傷付ける事ない癒しの力を与えよ……」

「っ！ 出る……ムサシ最大の魔法が！」

エリオが言うのと同時に、ムサシはハープを吹く。
心地良い音色と、さわやかな風が周囲を包み込む。目を瞑っているムサシはともかく、他の6人の目がだんだんトロンとしてくる。そして全員瞼を閉じ、その場で眠ってしまった。
ゆっくりと落下してきたのはに、ムサシは吹くのを止める。

「やった！ やりましたよ皆さん！」

嬉しそうな表情で振り向くと、皆各々の姿勢で眠り転がっていた。
とても良い表情で。

「あちゃ……、やりすぎちゃったかな……」

《大丈夫です。黙ってりゃばれません》

「いやばれるでしょ。フェイトさん達あっちで見てるんだし」

《……てへっ》

「……」

《ああ！　ら、らめえマスター！　そ、そんな無理に曲げたら……
はあゝんっ》

ムサシが強引にルットを曲げようとすると、ルットが変な声を出す。これもマリーがプログラミングしたようだ。

「で、本当は？」

《いえ、何も感じません》

結局、6人が目を覚ましたのはそれから2時間後の事であった。まあ、全員疲れが取れた様だった。

ウルトラマンコスモスStrikers
第4話 甲冑の戦士

——機動六課・隊社

「ん〜！ 良く寝たあ〜！」

デスクワークをしていると、スバルが気持ち良さそうに伸びをする。ムサシは「あはは〜」と頬を掻きながら苦笑いしている。

6人はデスクワークをしながら、どこかスッキリとした表情でパネルを叩いていた。

「ホントね〜。さっきのは何だったの？」

「あ、僕の一番魔力消費の激しい魔法です。ハープの音色と風の心地良さで、周囲の生物を気持ち良い眠りに誘うんです。敵も味方も疲れが取れるんですよ！」

ティアナの質問に、どこか誇らしげに話すムサシ。エリオは苦い思い出があるのか、口元を引き攣らせて乾いた笑いを漏らしていたが。

そんな風にデスクワークをしていると、不意にアラートが鳴り響く。

「なに!？」

《緊急警報。 隊社付近に、カオスヘッダーに取り付かれたと思われる怪獣を補足。 コンディションレベル、レッドを要請》

「っ！ ゴルメデ……」

ルットの言葉に、ムサシは一目散に走り出す。それを追う様に、レンも走り出した。

——機動六課・隊社裏

人気の無い所に着いたムサシは、青い石を取り出す。それを掲げようとすると、そこにレンが通りかかる。

「レ、レンさん!？」

「おっ、やっぱりお前もか」

レンはそう言うと、左腕に着いた青い三角形が幾つも連なったブレスレットから、角ばった眼鏡を取り出す。

「あなたも、ウルトラマンなんですか？」

「ウルトラマン？ はっ！ そんな名前、何万年も前に捨てたよ！」

レンの言葉の意図が分からず首をかしげるムサシ。だが、目の前で暴れている怪獣、『ゴルメデ』の咆哮を聞き表情を変える。

「行きましよう!！」

「ああ!！」

そう軽く言葉を交わし、ムサシは青い石を掲げ、レンは眼鏡を両目に装着する。

「コスモオオオオオス!！」

「デュワッ!！」

周囲が眩しい青色の光に包まれ、ムサシは青い巨人、『ウルトラマンコスモス』に。レンは青と赤の巨人、『テクターギア・ゼロ』へと変身した。

『レンさん、その鎧は……？』

『……っせえ。行くぞ！』

ゼロは『テクターギア』と呼ばれる動きをセーブする鎧を付けており、恐らく本来の力は出し切れない。にも拘らず、ゼロは赤く刺々しい頭部になってしまった『カオスゴルメデ』に突進していく。

『デエエアリヤッ！』

鋭い回し蹴りをゴルメデに叩き込み、ゴルメデの巨体がその場に倒れる。ゼロは容赦なくその懷に蹴りを入れ、宙に上げた所で猛スピードで拳を叩き込む。

『オラララララララララララララララララララララララア！！』

ゴルメデはそのまま吹き飛び、大地を揺らして落下する。ゼロは荒い呼吸を繰り返し、コスモスに言う。

『今だ……はあ……ムサシ!』

『はいッ!』

ゼロの言葉に元氣良く返事し、コスモスは両手を広げ、光を集めた右手を前に突き出す。

そこから放たれた淡い光がゴルメデを包み込み、カオスヘッダーから分離させる。カオスヘッダーは宙を舞い、どこかに消え去った。コスモスはゴルメデの足元に魔法陣を展開し、その中にゴルメデは吸収された。

『やりましたよ! レンさん』

コスモスはゼロの方を向くと、ゼロは突然コスモスの顔を殴り飛ばした。

『なぜあいつを殺さなかった!』

『……えっ?』

一瞬ゼロに言われた言葉が分からず、頭が真っ白になるコスモス。

『怪獣なんか全部殺しやあ良いんだよ！　できねーならすっこんでろ！』

そう言い残し、ゼロはレンの姿に戻って隊社に消えた。

コスモスはムサシの姿に戻り、呆然とその場に膝を突いた。

「……そんなの……そんなの間違ってるよ……」

そう呟き、ムサシはゆっくりと立ち上がった。

第4話 甲冑の戦士（後書き）

次回予告

なのは

「そろそろ新デバイスに切り替えかな？」

はやて

「機動六課フォワード部隊、出動！」

ムサシ

「あれは……ヘルズキング!？」

レン

「何でも良い! ぶっ潰すだけだ！」

コスモス

『うおおおおおおお!!』

次回、ウルトラマンコスモス!

【強き太陽】

そしてムサシは、一歩強くなる!

第5話 強き太陽（前書き）

ちなみにルットのハーブモードは、ムサシがムードンの回で『ハーメルンの笛吹き大作戦』というのをやった事に由来します。

第5話 強き太陽

先日の事件から数日が経った。

その後レンとムサシは衝突する事も無く、少し距離の遠い同僚、という形で関係を保っている。

そんなある日の教導で……。

「はい、皆お疲れ様！」

「……お疲れ様でした！」

ゆっくり降下してくるなのはに、フォワード6人は同時に返事をする。なのはとティアナが軽く話をしていると、エリオとムサシはふと変な臭いを感じる。

「この臭い……？」

「何か……、焦げ臭いですよ……？」

「あっ！ スバル！ あんたのローラー！」

「へっ？ …… ああっ！」

エリオとムサシの言葉に、ティアナがふと足元を見る。するとスバルのローラーブーツから煙が噴出していた。異臭の元はそれである。

スバルはそれを脱ぎ、目の前で様子を見る。

「あちゃ〜……。無茶させすぎちゃったなあ〜……」

「ん〜……。そろそろ皆も実践用の新デバイスに切り替えかなあ〜……？」

スバルがあちゃ〜、という顔をしていると、なのはは顎に手を当ててそんな事を呟いた。

フォワード陣がキョトンとする中、なのはは6人を連れてデバイスルームに向かった。

ウルトラマンコスモスStrikers
第5話 強き太陽

——デバイスルーム

フォワード陣6人の他に、眼鏡をかけた『シャリオ・フィリーノ』こと『シャーリー』と、『リインフォース？』こと『リイン』がデバイスルームに来ていた。

シャーリーとリインの説明を聞きながら、ムサシはエリオに念話を飛ばす。

（ねえエリオ、ルットってマリーさんが作ってくれたし、フェイトさんも設計に携わってるでしょ？ だったらこれ以上改良する所無いんじゃない？）

（うーん……、まあそこは専門家じゃないと分からない事なんじゃないかなあ……？ っていうか、ムサシは人の話集中して聞けなきやダメだよ？）

（むう……。エリオは真面目だなあ……。だからラブレターも一通しか貰えないんだよ？）

（なっ！？ なんて知ってるの！？ ちゃ、ちゃんと隠したのにい

！)

(はっはっはゝ！ ルナスルーアイを舐めちゃいけないよ？)

(能力の無駄遣いだあゝ！！)

「そこ！ 真面目に聞いてるですかっ！？」

ムサシの意外とまともな疑問に、エリオも曖昧に返す。そしてムサシを注意すると、ムサシは再びエリオの古傷を抉る。

それに顔を真っ赤にしたエリオは、心の中で涙目になってムサシに尋ねる。対するムサシは笑いながらウルトラマンの力を使った事を説明する。

エリオがツツコミを入れると、ラインがぶんすかという擬音をつけてムサシとエリオを注意する。

「「ご、ごめんなさい……」」

「全くもゝ！ またムサシがちよっかい出したですかゝ！？」

エリオとムサシが揃って頭を下げると、ラインが腕を組んでムサシをジト目で見る。

ムサシが冷や汗を垂らしていると、ムサシはラインに呼ばれてお説教ルームとやらに連れ込まれていった。

——お説教ルーム

「がみがみがみがみ……ムサシ！　ちゃんと聞いてるですか！？」

「あふ……あ……。あ、ふあい。聞いてますよ……？」

「あくびしながら言うんじゃない！！」

リンがお説教を続けていると、突然赤い光と共に警報が鳴り響く。

ムサシとリンは表情を変え、デバイスルームに戻る。

はやて曰く、

『列車をガジェットが占拠。それを止めてコントロールを解除する事』

が今回の任務らしい。

調整の終わったルットを受け取ったムサシは、エリオの横に並び立つ。

『機動六課フォワード部隊、出動！』

「「「「「了解っ！！」「」「」「」

フォワード陣6人はそう応え、屋上にあるへりに乗り込んだ。

――へり内部

フォワード陣6人が左から順にキャロ、ムサシ、エリオ、レン、ティアナ、スバルと座っている。

その正面になのはとリインがいる。

「私はもう空に上がるけど……、普段通りで大丈夫だからね。いざとなったら私もフェイト隊長も助けにいける場所にいるし。素早く考えて、素早く動く」

そこまで言い終えると、なのははふとキャロが微かに震えている事に気付く。

そちらになのはが行くよりも早く、ムサシがハープ状態にしたルツトに口を近付け、奏でる。

先日の技とはまた違う、静かな音色ではなく少し軽快な音色が響く。聞き入っているのか、スバルやティアナは目を閉じている。

少ししてムサシは吹くのをやめ、隣で自分の顔を見ているキャラに微笑む。

「どう？ 結構元気出たかな？」

「えっ……？」

その言葉に、キャラは自分の震えが止まっているのに気づく。それを見て微笑んだのは、開かれたハッチから飛び降りる。一瞬眩しい光がしたかと思うと、セトアップしたのが少し先の空へ飛んでいった。

しばらくして現場に到着し、操縦士である『ヴァイス・グランセニック』が叫ぶ。

「まずはスターズだ！ へますんなよ！」

「「はいっ！」「」

その言葉にスバルとティアナが返事をし、レンは軽く頷く。そして真っ直ぐ前を見つめ、風を受けながら叫ぶ。

「スターズ3、スバル・ナカジマ！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「スターズ5う！ レン・モロボシ！」

「『行きます！』」

コールナンバーを叫ぶと同時に、3人がハッチから飛び出す。
そして各々のデバイスを取り出し、目の前で握り締める。

「行くよ、マツハキヤリバー！」

「お願いね、クロスミラージュ」

「頼むぜ、ゼロスラッガー！」

スバルは空色の宝石、ティアナは橙色のマークがついた白いカード、レンは左腕のブレスレットに言う。

「『セット・アップ！』」

《stand by ready?》

スバル達が一瞬強い光に包まれ、次の瞬間には元も空色、橙色、緑色の服に白いジャケットを羽織った姿にセットアップし、列車に着地した。

「次！ ライトニング！ チビ共、気いつけてな！」

ヴァイスの言葉に、キャロを挟む様にしてムサシとエリオが立つ。その高さを見て身を振るわせるキャロ。それを見たエリオは、キャロに右手を差し出す。

「一緒に、降りようか……？」

キャロは顔を上げてエリオを見た後、反対側のムサシを見る。するとムサシも左手を出して微笑んでいた。

キャロはその手を取り、コールナンバーを叫ぶ。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「ライトニング5！ ムサシ・ハラウンと、今はいないけどドリリアスとゴルメデ！」

3人は言い終わると、互いの顔を見合わせて再び叫ぶ。

「「「行きますっ……！」」」

言い聞かせる様に叫び、ハッチから勢い良く飛び出す。

急降下する事で強烈な風を体を感じながら、3人は各々のデバイスを見つめ、声をかける。

「ストラーダ！」

「ケリユケイオン！」

「ブループラネット！」

エリオの右腕についた腕時計、キャラの左腕に着いたブレスレット、ムサシの首にかけたペンダントが、それぞれ輝く。

《stand by ready?》

その言葉に、ムサシ達はありったけの元気を込めて答える。

「セットアップ！」

初々しくそう叫び、3人の体が光に包まれる。

エリオは赤いシャツに、白く長いコートを羽織った様な姿に。

キャラは白い民族衣装とコートを足して二で割った様な姿に。

ムサシは青い長袖長ズボンに、白い十字架と、厚手のブーツと手

袋。それに白いマントを付けた姿にそれぞれ変わった。

ムサシは左手につけたルツトを取り外してそれに乗り、列車の上に着地する。

「これって……」

「皆の衣装は、それぞれの隊長さん達のバリアジャケットをモチーフにデザインされてるですよー！」

スバルの呟きに、セットアップしたリインが元気良く答える。

そしてスターズとライティングに別れ、それぞれ列車の停止とガジェットの殲滅に向かった。

エリオが突っ込み、キャロが支援。そしてガジェットの反撃を全てムサシが打ち払う。

そんな陣形でライティング分隊が突き進んでいると、列車の外に青いロボットが出現する。ロボットは列車を見下ろす様に崖の上に立ち、レーザーを放って列車を攻撃してくる。

「うあっ！？」

「きゃっー！」

「っ……！ あれは……ヘルズキング!?」

ふらつくキャラをエリオが抑え、ムサシは青い輝石を取り出してエリオと顔を見合わせる。

「エリオ！ 僕行ってくる！」

「分かった。気をつけてね！」

「えっ？ ムサシ君……？」

キャラが不思議そうにすると、ムサシはキャラにウィンクで返す。すると輝石が光を放ち、まるで秋桜^{コスモス}のつぼみの様な道具、『コスモブラック』に変化する。

ムサシはルットを外し、エリオに預ける。

「ルット！ 二人のガードよろしくね！」

《お任せ下さい、マスター》

ムサシはその場でコスモブラックを掲げ、自身の本来の名を叫ぶ。

「コスモース！」

コスモブラックが、花開く様を開き、発光する。

その光は列車の外に向かい、ヘルズキングの前で実体化する。姿を現したコスモスの横に、テクターギア・ゼロが並び立つ。

『あいつはロボットだ。容赦なくぶっ潰すけど良いよな？』

『ええ。なぜだか僕もあいつとは通じ合える気がしますので』

コスモスはそう言うと、右手を高く掲げる。手の平から赤い光が降り注ぎ、コスモスは両手をゆっくりまわして下ろす。

すると左右非対称に流れる様な赤い模様になり、所々銀や青いラインが入る。頭部の形状も変わり、赤いクリスタルがついている。

『ウルトラマンコスモス・コロナモード』である。

『デュオッ！』

コスモスは右の拳を握って突き出し、左手を開いて頭の横に構える。

ヘルズキングが動き出すより先に、コスモスとゼロが走り出す。

大地を揺らし、嵐の様に拳と蹴りを連続で叩き込む。

青い装甲から火花を散らすヘルズキング。コスモスとゼロは懷に潜り込み、その胴体を決る様にアッパーカットを入れる。

宙に浮かび上がったヘルズキングの胴体部分に、拘束されていないゼロの鋭い蹴りが炸裂する。

『ムサシ!』

『はいッ!』

ゼロの言葉にコスモスが返事し、コスモスはカラータイマーの下に両手を翳す。そして両手を水平に伸ばし、目の前に巨大な太陽の様な火球が現れる。それを両手でヘルズキング目掛けて打ち出す。

『デアッ!』

コスモスの必殺技、『プロミネンスボール』がヘルズキングに炸裂し、ヘルズキングは機能を停止して大爆発を起こした。

コスモスとゼロがムサシとレンに戻る頃には、既に一件は終了していた様だった。

——お説教ルーム

「で、任務中に2人はいつたいてどこで何をしていたのかなあ……」

？」

とても良い笑顔を浮かべるなのは足元で、ムサシとレンが正座している。

フェイトは事情を知っている為ムサシをお説教から外そうとしたが、なのはそれを許さず問い詰めている。

「え〜つとだなあ……」

「へ、ヘルズキングと戦ってましたあ！」

誤魔化しの言葉を考えるレンと、素直に打ち明けるムサシ。なのはは少し考える素振りを見せた後、2人に判決を下す。

「2人とも、明日っからみい〜……っちりしごいてア・ゲ・ル♪」

「「ひい〜……」」

なのはの言葉と笑顔に、2人は身が竦むのを感じた……。

第5話 強き太陽（後書き）

次回予告

ムサシ

「地球？」

レン

「マジかよ……」

なのは

「どうかした？」

ムサシ

「あなたは……？」

？

「僕は、レット……。東烈斗だよ」

次回、ウルトラマンコスモス！

【機動六課よ地球へ！】

光は、絆だ……！

第6話 機動六課よ地球へ！（前書き）

このタイトルって、なんかウルトラマンらしくないですか？

第6話 機動六課よ地球へ！

— side ムサシ

突然ですが、僕は今地球に來ています。

周りには人っ子一人居ません。完全に僕一人です。あ、ルットは居ますけどね。

「ねえルット」

《なんでしょうマスター？》

「……ここどこ？」

《第97管理外世界、現地名称『地球』。土地は日本の海鳴市ですね》

「ごめん、そこは分かってるんだ」

ルットに聞いても、ここまでしか分からないようです。

どう言う訳か念話も届かないですし……、とりあえず、まだ日は高いので歩いて探してみる事にします。

さすがにリドリアスを出すわけにはいきませんしね。

ではその間に、なぜ僕がこの様な事態に陥ったのかを説明しておきますか……。

—side ムサシ end

ウルトラマンコスモスStrikers
第6話 機動六課よ地球へ！

—数時間前・機動六課

部長長室に、スターズとライティングの全員、つまり六課の主力メンバーのほとんどが集められていた。
そんな中、はやてが重々しく口を開く。

「今日皆に集まってもろうたんはこれや……」

はやては端末を開き、大きなモニターにスライムの様なロストロギアが映し出される。

「これが管理外世界で発見されたということで、私達遺失物管理部、機動六課に白羽の矢が立つたいうこっちゃ」

「それで……、その管理外世界って……？」

未だに緊張した面持ちで言葉を続けるはやて。そのはやてに、なのはが首を傾げながら尋ねる。

するとはやては、目元を前髪で隠しながら肩で笑う。

「第97管理外世界……。現地名称、地球や！」

「「えっ!？」」

顔を上げてはやてが言った言葉に、なのはとフェイトが驚きに声を漏らす。それだけでなく、シグナムやヴィータもどこか嬉しそうな表情をしていた。

「地球って……？」

「なのはさんとはやてさんの故郷で、フェイトさんも一時期そこに住んでいたそうです」

ティアナの呟きに、エリオが説明する。

スバルも先祖が地球出身だとかで盛り上がっている中、レンは微妙な表情をしていた。

「マジかよ……」

その呟きは、騒がしく話しているフォワード陣の声にかき消された……。

その後転送ポートへ向かう機動六課前線メンバーに、シャマル、リイン、はやてを加えた一行。

転送ポートに乗ったその時、事件が起きた。

「座標設定……日本の……海鳴市！」

はやてが座標をセットすると、全員を乗せた円盤状の転送ポートが輝く。そして景色が変わり、地球に間も無く着こうと言うその時、ムサシは不意に何かに引っ張られた。

「うあっ！」

「ムサシ!？」

「ムサシ君!」

近くに居たエリオとキャロが手を伸ばすが、それより早くムサシは光の中に引きずられていった。

眩しい白い光に包まれた空間の中、ムサシは一人立っていた。

「ここは……?」

するとムサシの前に、初老の男性が現れる。

「あなたは……?」

「私は……、モロボシ・ダン。レンの父親だ」

全然似てねえ!

そんな事を心の中で思いつつ、ムサシは質問をぶつける。

「で……その、レンさんのお父さんが僕にいったい何の用でしょうか……？」

「……あいつを……ゼロを頼む」

その言葉の意味が分からず、首を大きく傾けるムサシ。
するとダンは、そんなムサシの様子を知ってか知らずか補足する。

「あいつは自分を追い詰めすぎている。自分の力を証明する事。それが自分の生きる意味だと思いこんでしまっている……」

「どうしてそんな……」

「……あいつは早くに母親を亡くした。それを自分のせいだと思い込み、あいつは罪を犯した。その結果故郷を追放され、あの強固な甲冑を着け、心と体を鍛える修行に出された」

ダンの口から重々しく語られるレンの過去。

ムサシはそれを聞きながら、強く奥歯を噛み締める。

母親を失った事。どうやらそれが彼を苦しめ、結果的にあんな荒っぽい気性に変えてしまった様だ。その結果罪を犯し、彼は追放された。

「だが、あいつは修行先から勝手に抜け出した。罪を認めず、己の行いを認めさせる為に……」

「……なんで僕に……？」

「……君の、その優しさで……、あいつを、ゼロを真の勇者にしてやって欲しい」

「真の、勇者……？」

ダンが発した真の勇者という単語を聞いたとき、ムサシの脳裏に一瞬何かが浮かび上がる。

——僕は……、本当に勇者になりたいんだ！

——僕が……、真の勇者になれたというの……？

そこで映像は途切れ、ムサシは我に帰る。
しばらくして、ムサシはダンに頷く。

「分かりました。とにかく、レンさんが良くない方向に行かない様に頑張ってみます」

「ありがとう……」

そう言つとダンは消え、ムサシは地球に立っていた。
そして周囲を見渡し、一言呟く。

「じじはどじ……?」

完全に、迷子になっていた……。

—side ムサシ

と、そんな事があり、今僕はてくてく歩いています。日は大分傾いてきました。

うう、お腹空いた……。

そう思いながら歩いていると、どこかから良い匂いがしてきました。あ、美味しそう……。

匂いに釣られるまま、僕はフラフラそちらに歩いていきました。

「ムサシ!」

「ふえっ?」

そこに着くと、何と機動六課の皆がバーベキューをしてました。

「皆あ！」

僕は思わず皆に向かって走り出しました。刹那、ふとある事が浮かび上がりました。

「……皆、僕の事心配してくれてました……？」

『あつ……』

僕の眩きに、皆が一斉に僕から目を逸らしました。

……ふふつ、良いよ良いよ。皆そうやって僕をほったらかしにしてバーベキューを楽しんでれば良いんだ……。

「ち、違うよムサシ！ 皆心配して、結構探してたんだよ！？」

「スバルさん、無理しなくて良いですよ。目がサバンサバン泳いでますもん。スバルさんはそうやってヴィータ副隊長と焼肉戦争でもしてれば良いんですよ……」

あれ？ 何か目から汗が出てきたよ？ おかしいなあ……。……。

《マスター……》

— side ムサシ end

—— 5分後

スバルとヴィータが自分の狙っていた肉を食べさせてやる事で、ムサシの機嫌は元に戻った。

その際、あゝんして食べさせてもらう側のムサシと、食べさせてやる側のスバルは何の抵抗も無くやっていたのだが、ヴィータは顔を真っ赤にしながらそっぽを向いて食べさせたとか。

そして現在、色々あつて機動六課の面々＋現地協力者のアリサとすずかは『スーパー銭湯』に来ていた。

中に入ると、受付のおばちゃんがあまりの人数に腰を抜かしかけた。

「大人10人の……」

「子供は……エリオ、キャロ、ムサシ、リイン曹長……、ヴィータ副隊長？」

「あたしは大人だ！」

勘定の為、フェイトが大人の人数を数え、スバルが子供の人数を数える。そのスバルのカウントに納得がいかなかったのか、ヴィータがスバルを睨みつける。

「ほら行くぞ。あまり主にご迷惑をかけるな」

「はあゝなあゝせえゝ!!」

そんなヴィータを、シグナムが引き摺っていく。
少し進むと、『男』、『女』と書かれたのれんが下がっていた。

「良かった、ちゃんと男女別だ……」

エリオがそれを見ながら、安堵のため息をつく。
するとキャロが嬉しそうにエリオの肩に手を乗せる。

「エリオ君、ムサシ君、一緒に入ろう!」

「い、いや、僕は「うんいいよ」」ムサシ!？」

エリオの言葉を遮り、ムサシが嬉しそうに手を上げる。
そんなムサシの腕を引っ張り、エリオは隅っこで話をする。

「ムサシ！ 何考えてんのさ！ 一応僕達男なんだし、その……今日はアリサさんやすずかさんだっているんだよ！？」

「だって、ルットは女の子だもん。それにこないだエリオ、スバルさん達と一緒にシャワー浴びてたじゃん」

「ぐさっ！」

ムサシに注意するエリオ。だがムサシは、お説教ルームからの帰りに見た光景を話す。

空色の髪の少女に引き摺られ、シャワールームに消えていく同室者の姿を。それ以来、エリオはシャワールームの前をムサシと一緒に通る様になっていた。

「それに、フェイトさん言ってたよ？ 最近エリオと一緒に入ってくれないって」

「それは……、っていうか、ムサシは入ってたの！？」

「うん。週2回ぐらい」

エリオのノリツツコミに、ムサシは真顔で答える。
その時、エリオは感じた。

天然って、怖いなあ……。

と……。

結局、ムサシとエリオも女湯に入ることになった。

「え？ 俺は？」

一人残されたレンは、寂しそうに巨大な浴槽に浸かった。

――数分後

楽しそうにキャロとジャグジー風呂ではしゃいでいるムサシと、すっかりのぼせ上がってしまったエリオの温度差が激しかった。まあ主にキャロと洗いつこをしたのが原因だが。その時、ムサシが首にかけていたルットが光る。

《ロストログリア反応、および周辺に巨大な生命エネルギー観測。コンディションレベルオレンジを要請》

「っ！ ルット、場所は！？」

《あっち》

「どつち!？」

頓珍漢なやり取りをしながら、ムサシとエリオは湯船から上がる。すぐに二人は着替え、外に出る。

エリオはロストログアの方に向かい、ムサシとレンは生命反応がするという方に走った。

ムサシとレンが現場に着くと、紫色のナメクジの様な不気味な怪獣が佇んでいた。

「うわっ、なにあれ!？」

「キモイな……」

さすがにムサシもレンもドン引きする。すると2人の背後から、スバルと同年ぐらいの少年が歩いてくる。

「そいつはペドレオン。人の恐怖を食らって成長する、『ビースト』の一種。生命体かどうか怪しいから、別に倒しても罪悪感を感じないと思うよ?」

饒舌に話す少年。ムサシは、探る様に少年に質問した。

「あの……、あなたは？」

「僕？ 僕は諸……レット。東烈斗だよ」

レットはそう答え、ペドレオンを見上げる。

「さ。さっさと倒しちゃおう？」

そう言って、白い短剣を取り出す。言われるがままムサシはコスモブラックを、レンは『ウルトラゼロアイ』を取り出す。

「行くよ、ネクサス！」

「コスモオオオオオオオオオオス！」

「デュワッ！」

各々の構えで変身アイテムを輝かせ、ムサシはコスモス、レンはテクターギア・ゼロ、レットは銀色の巨人、『ウルトラマンネクサス』になった。

『シエア!』

ネクサスは力強く構え、一気に走り出す。ペドレオンの右側面に蹴りを叩き込み、バランスが崩れたところを両腕についた刃で触手を切り落とす。

続けてゼロが走り出し、ペドレオンの腹部を蹴り飛ばす。

そしてコロナモードになったコスモスが、胴体にプロミネンスボールを叩き込む。

が、ペドレオンはそれすらも吸収してしまう。

『なっ!?!』

『嘘でしょ!?!』

2人が驚く刹那、青白い光線がペドレオンを打ち抜く。ネクサスの必殺技、『クロスレイシュトローム』であった。

浄化されるペドレオンを見ながら、3人は人間体に戻った。

戻ってすぐ、レットはレンとムサシを交互に見る。

「えっと、ある人からの伝言があるんだけど、良い?」

意味深な発言をした後、咳払いを一つしてレットは語る。

「諦めないのがウルトラマンなんじゃない。諦めなければ皆がウルトラマンなんだ。諦めない心さえあれば、誰だってウルトラマンなんだ」

ムサシにとっては心強く、レンにとっては挑発的な発言を残すレット。

そのままレットは2人に背を向け、暗闇の中に消えていった。

次の朝、転送ポートが消えるのを遠くから見守るレット。
そして空を見上げ、ポツリと呟く。

「アレで良かったんでしょ？ 父さん……。ウルトラセブン」

To be continued

第6話 機動六課よ地球へ！（後書き）

次回予告

ティアナ

「証明するんだ……。ランスターの弾丸は、無力なんかじゃないって！」

レン

「俺は親父を超えてる！」

ルーテシア

「……邪魔」

ムサシ

「君は……？」

マホロバ

「退いてよ……」

次回、ウルトラマンコスモス！

【過ちの連鎖】

その日、少女達は過ちを犯す……。

次回以降3話は序盤の山場となります。結構サクサク進みますが。

第7話 過ちの連鎖

――ヘリ内

先日の地球出張から数日。機動六課のフォワード陣とはやてを加えた隊長陣は、再びヴァイスの操縦するヘリに乗っていた。

『ホテル・アグスタ』という建物の警備をする為である。この日はオークションが行われるらしく、ロストロギア関連の闇取引が行われる可能性もある。

そこでこの機動六課の出番、という訳である。既に昨夜からシグナムとヴィータが現地入りしており、フォワード陣はそれに合流して警備に当たる。

ムサシはルットを握り、先日の事を思い返す。

『あいつを、ゼロを頼む……』

『諦めないのがウルトラマンなんじゃない。諦めなければ皆がウルトラマンなんだ。諦めない心さえあれば、誰だってウルトラマンなんだ』

ゼロことレンの父親と名乗る男性、『モロボシ・ダン』。そして謎の少年『東烈斗』。

全くの初対面である彼等に、なぜか積極的に声をかけられる。あれ以来、レンとはあまり口を聞いていない。

果たして彼は何を考えているのか、なぜ自分にその様な役目が回ってきたのか。今のムサシには見当もつかなかった。

「……ま、いつか分かるよね……？」

《そう思います。今はお気になさらなくてもよろしいかと》

誰にも聞こえない様にムサシが小さく呟くと、その言葉にルットが答える。ムサシはルットに微笑み、窓から外を眺めた。
すると隣に座っていたキャロが、小さく手を挙げる。

「あの、シャマル先生……。ずっと気になってたんですけど、そのケースっていったい……？」

ムサシもその言葉に、窓からシャマルの足元に視線を変える。
そこには、謎の黒いケースが3つほど佇んでいた。ムサシとキャロが揃って首を傾げると、シャマルがそれを見て微笑む。

「これ？ ふふつ。隊長さん達の、お仕事着」

「「はあ……？」」

ムサシとキャロはそう呟き、互いに顔を見合わせ再び首を傾げ合った。エリオはそれを見ながら苦笑いを浮かべている。

そして鼻歌を歌うスバルの横で、ティアナとレンは緊張した面持ちで座っていた。

（ここで証明するんだ……。特別な才能は無くたって、凡人だつてやれるんだって事を……！）

（俺の力は……、俺は既に親父を超えてる！俺はもう、あの力だつて使いこなせるんだ……！）

ティアナとレンは互いのデバイスを見つめ、似た様な事を心の中で考えていた。

特にレンの瞳の奥には、欲望にも似た炎が燃えている様だった。それを見ていたなのは、なにか思うものがあつた様だ。

そうこうしてる内に、ヘリはホテル・アグスタに到着した。

——ホテル・アグスタ 地下駐車場

「お疲れ様です！」

ムサシは無愛想な局員に会釈し、エリオ、キャロ、青い大型のオカミ『ザフィーラ』と共に、地下駐車場の警備に当たっていた。いかにも闇取引が行われそうな雰囲気の場合、キャロの両サイドにエリオとムサシが。正面にザフィーラが来るように歩いている。

「どうルト。何か反応ある？」

《現時点では何も検知されません。コンディションレベルブルーです》

「そっか」

ルトに周囲に危険物が無い事を確認し、ムサシは笑顔になる。鼻歌を歌いだすムサシを見ながら、キャロはこそつとエリオに耳打ちする。

「ねえエリオ君。ムサシ君ってもしかして、ウルトラ……」

「へっ!？」

いきなり真剣な面持ちで聞いてくるキャラに、エリオは思わず素っ頓狂な声を上げる。

確かに龍召喚等の特殊能力を持ち合わせているキャラだが、まさかムサシの正体まで見抜いているとは……。実質変身は見られていたのだが、名前など詳しい事は一切明かされていない。知っているのはエリオとフェイトのみである。

エリオはごくりと生唾を飲み込む。

「……マンモスのんきさん？」

「……はっ？」

続けてキャラが発した言葉に、エリオは思わず固まってしまった。そんなエリオに合わせ、キャラも立ち止まる。

「だから、ウルトラマンモスのんきさん？」

「えっと……、どういう意味？」

「あれ？ これってアルザスだけの言い方なのかな……？ あのね、ムサシ君みたいなぱや〜んとしてて、優しいけど何考えてるか分からない人はそう言うんだって！」

「へえ〜……。結構限定されてるね……」

立ち止まった事で落ち着いたのか、エリオは冷静なツツコミを返す。

すると遠くの方で、ムサシが手を振りながら叫んだ。

「おい！ 2人とも早くう〜！！」

「あ、ごめ〜ん！ すぐ行く〜！ 行こつ、エリオ君！」

「へっ？ あ、うん……」

そう言って駆け出すキャロに、エリオは思わず脱力しながら追いかけた。

いったいなんだったのだろうか……。

——ホテル・アグスタ 周辺

レンはティアナと周辺を見回り、異常が無い事を確認する。

「……レン、覚悟は出来てる？」

「ああ。俺達の力……、今日ここで証明する！」

レンはそう答え、拳を強く握り締める。

スバルと合流すると、目の前に無数の召喚魔法陣が出現する。

3人は目つきを変えて、中から出現したガジェットと対峙した。

——ホテル・アグスタ 地下駐車場

ザフィーラはシャマルからの連絡を受け、シグナムとヴィータの
応援に向かった。

ムサシ達も地上の上がろうとする最中、ムサシは背後に何かを感じて立ち止まる。

「ムサシ君？」

「ムサシ、どうかした？」

キャロとエリオも立ち止まり、ムサシに尋ねる。

「……ごめんエリオ、キャラちゃん……。先に行つて。僕もすぐに追いつく……っ！」

「あ、ムサシ！」

言うが早いか、ムサシは駐車場の奥へと走り出す。

エリオとキャラは暗闇の中に消えていくムサシを見ながら、互いに顔を見合わせる。

「どうしよう、エリオ君……」

「……行こう。ムサシは追いつくって言ったんだ。だったら、僕達は上で待ってよう？」

「うん！」

そう言つて互いに頷き合い、地上に向かって走り出した。
大切なチームメイトを信じて。

しばらく走っていたムサシは、目の前で倒れている複数の局員。
そしてその中心に立っている、平らな剣を握った少年を発見する。

ムサシはブループラネットをセットアップさせ、少年に向かって
叫ぶ。

「管理局機動六課ライトニング分隊所属、ムサシ・ハラオウンです
！ 詳しい事情を聞かせて下さい！」

「……管理局……」

少年はムサシに気付き、ゆっくりと近付いてくる。
はっと気がつくと、ムサシに息が掛かるほど近くに少年が近付い
ていた。ただの一瞬で。

「本当の絶望って分かる？」

「……えっ？」

「生まれてすぐ父さんはいなくなり、母さんは目を覚まさない。妹
と二人で良く分からない変なマッドサイエンティストに協力させら
れ、唯一つの目的の為にろくに休息も食料も得られず、ただただ危
険な所に飛び込んでいく。誰も僕らに味方してなんかくれない。皆
が敵。痛くて辛い思いをしても、誰も助けてなんかくれない。そん
な気持ち、君に分かる？」

ムサシの近くに寄った少年は、淡々と語る。

その内容の一つ一つに、ムサシは身を震わせる。しばらくして、
少年はムサシから離れる。ムサシは、自分が大量に脂汗をかいてい

るのに気がつく。

するとおもむろに、少年はムサシに剣を振るってきた。ムサシは
ルットでそれを受け止め、大きく距離を取る。

「君は……？」

「……どうしたの？」

ムサシが少年を睨むと、奥から紫の髪の少女がやって来る。
ムサシはそれに気付き、構えを緩める。

「大丈夫だよルーテシア。すぐに終わらせるから」

「……そっか」

ルーテシアと呼ばれた少女は、兄に頷きムサシを見る。
何かを感じたのか一瞬眉を吊り上げるが、すぐに背を向けて去っ
ていった。

すると少年は黒い道具を取り出す。

「……退いて」

そついうが早いか、少年は黒い道具、『ブラックスパークレンス』
を開く。

一瞬青白い電撃が迸り、少年は全身黒い巨人、『ティガダーク』に変身した。

「君も、ウルトラマンなの……?」

「ウルトラマン? なにそれ?」

ティガダークはじりじりとムサシに迫ってくる。ムサシは仕方なしにコスモブラックを取り出し、発光させる。

「コスモース!」

青い戦士、『ウルトラマンコスモス・ルナモード』に変身し、ティガダークと対峙する。

『ここじゃ被害が大きい。外に出よう』

ティガダークはそう言い、2人のウルトラマンは駐車場の外に出た。

——ホテル・アグスタ 周辺

フォワード5人がガジェットを殲滅する近くで、ティガダークとコスモスの戦いが繰り広げられていた。

『チエアッ!』

コスモスはティガダークの拳を捌ききれず、胴体に食らって吹き飛ばされる。大地に倒れこむより早く、ティガダークがコスモスの背中を蹴り飛ばす。前のめりに倒れる後頭部に、重たい踵落としを叩き込む。

コスモスはあっけなく地に伏せ、カラータイマーを点滅させる。

『あ……う……』

呻き声を漏らしながら立ち上がるコスモス。

その正面で、ティガダークは腕をL字に組む。黒い光線、『ダークゼペリオン光線』が、コスモスの体に直撃する。

食らいきったコスモスは再び倒れ、光を放ってムサシの姿に戻ってしまう。

ティガダークは背を向け、小さく呟く。

『もう……、君は関わらない方が良い……』

そう言って、ティガダークは森の奥深くへと消えた。

一方フォワード陣は、姿の消えたコスモスにエリオとキャロが焦りを感じていた。

「エリオ君、ムサシ君は……？」

「分からない……。けど、今の僕等はガジェットに集中しなきゃ！」

「うん……」

ムサシを心配しながらライトニング組が戦う中、スターズ組は荒っぽい戦い方をしていた。

ティアナがありつたけの魔力弾を乱射し、レンとスバルがそれを弾いて敵に命中させる。一発も逃さず強力な弾丸を命中させられるが、それ以上に危険が伴った。

するとそこに、ヴィータが高速で戻ってくる。運の悪い事に、レンが目の前に来た弾丸を弾いたときだった。

「バカヤロー！ 誰がんな無茶な戦い方しろつつつた！」

「けどガジェットは全機落としてる！ 問題ねえだろ！」

「っざっけんなタコ！ 怪我でもしたらどうする気だ！？ 非殺傷設定でもあの速度じゃどうなるか分かんねーぞ！」

「俺がんなもん食らうとも思ってた……っ！？」

そう言いかけたレンを、ヴィータが殴り飛ばす。

ヴィータは瞳孔の開いた両眼でレンを睨む。その間で、スバルがおろおろしている。

「……もう良い。後はあたしとライトニングでやる。てめえらはすっこんでろ」

言うのが早いか、ヴィータは周辺のカジエツトを殲滅しに行ってしまった。

残ったレンとティアナ、スバルは、その場で俯いていた。

エリオとキャロを連れてガジェットを殲滅するヴィータ。そしてふとムサシがない事に気付く。

「おいエリオ！　ムサシの奴はどこ行つた？」

「それが、途中で僕等から離れた後連絡が取れなくなって……」

「はあ！？　まったくいつもこいつも……」

エリオの説明に、ヴィータは乱暴に頭を掻きながら念話を飛ばす。

（おいムサシ！　おめーどこで何やってる！　さっさと戻って……ムサシ？）

念話を飛ばす最中、ムサシからの応答が無いのに気づくヴィータ。周辺にガジェットがないのを確認し、エリオ達に向き直る。

「悪い、あたしはムサシを探しに行ってくる。何かあったらすぐ呼べよー！」

「「はい！」」

そう言つと、ヴィータは森の奥へ駆け出した。

森の奥深く、周辺の木々が砕けた広場で、ムサシが血だらけになって倒れていた。緑の草木が、真紅に染まっていく。

それを発見したヴィータは、慌ててムサシに駆け寄る。

「ムサシ！ おいムサシ！ しっかりしろ！ おいつー！」

ヴィータの知るムサシからは想像もできない様な傷だった。

誰よりも争いを嫌い、模擬戦にすら抵抗のあったムサシ。最も騎士や戦士に向かず、甘いと感じていた。

だがそれでも、他の人とはずば抜けた優しさがあった。それこそ、自分達の最後の主であるはやてを超えるほどの優しさだ。

そんなムサシが、誰も知らない所で傷つき倒れている。その事に、ヴィータは動揺を隠せなかった。

「何でこんな……。ん？」

するとムサシの足元に、コスモブラックが転がっていた。

ヴィータはそれを拾い上げ、ムサシとコスモブラックを交互に見つめる。

「……まさか、な……」

そう呟くと、ムサシとヴィータを囲む様にして球体型のガジェットが出現する。

立ち上がる最中、横目でムサシを見る。

「まあ何でも良い。今のおめーはあたしが守ってやる。安心しとけ、ムサシ」

そう呟くと、自身の相棒、『鉄の伯爵グラーフアイゼン』を肩に担ぐヴィータ。

「鉄槌の騎士の名に賭けてな！」

第7話 過ちの連鎖（後書き）

次回予告

ティアナ

「うあああ！ ファントムプレイ……」

レン

「このままじゃ意味ねーんだよ！」

ヴィータ

「てめえ！」

なのは

「少し、頭冷やそうか……」

ムサシ

「……いい加減にしろ」

次回、ウルトラマンコスモス！

【強さの先に】

その時、青年は何を思う……

第8話 強さの先に

——機動六課・医務室

白いベッドで眠っているムサシの横で、ヴィータが真剣な表情でその寝顔を見つめていた。

そしてポケットからコスモブラックを取り出し、ムサシと見比べる。

ナイトデスクに置かれているルットに、ふとある事を尋ねる。

「……ルット、おめーは何か知ってんのか？ 主の事……」

《申し訳ありません。個人的意見ですが、主が皆様に自分からお話しするまで、私が説明するのはいかなものかと……》

「ん……。まあもつともだな」

無邪気な寝顔と、それに似使わない包帯の量。ヴィータはコスモブラックをルットの横に置き、再び寝顔を見る。

口の端から垂れる涎を見て、思わず吹き出してしまう。

「……ま、んな訳ねえよな」

そう呟き、すべすべとした頬を突く。意外な柔らかさが癖になっ

たのか、ニンマリしながら突き続ける。

「可愛い寝顔しやがって……」

「珍しいわね」

「おわぁっ!?!」

ヴィータが少しだけ頬を染めながら呟くと、突然背後から聞きなれた声がした。驚きながら振り返ると、下唇に指を当ててニヤニヤしているシャルルが屈んでいた。

「シャ、シャルル!?!」

「意外ね……。ヴィータちゃんがはやてちゃんやなのはちゃん以外の子に優しくするなんて……。ねえ?」

「なっ、何が言いてえんだよ!」

突然の登場にビックリしたのか、ヴィータは顔を真っ赤にしながらシャルルを見上げる。

ベッドの端に座ったシャルルは、ニヤニヤしながらヴィータを見つめ続ける。それに耐えられなかったのか、ヴィータは顔を赤らめたまま怒鳴る。

それを聞いたシャルルは、ますます顔をニヤニヤさせる。

「あら？ 言ってもいいのかしら？ じゃあ……。ヴィータちゃん、あなたもしかしてムサシ君の事……」

「わあー！ たったあ！ やっぱり言わなくて良い！ 絶対にだ！ なっ！？」

シャルが続けた言葉に、ぎゃーぎゃー騒ぎながら止めようとす
るヴィータ。

しばらくそんなやり取りをしていると、ふと別の声がした。

「あの……、もう少し静かにしてくれませんか？」

上体を起こしたムサシが、苦笑いしながら2人を見ていた。

「「あ、すみません……」」

それを聞いた2人は、揃って後頭部を掻きながら謝った。

——何だこの2人……。

そう思ってしまったのは、ルットだけの秘密である。

ウルトラマンコスモスStrikers
第8話 強さの先に

——同時刻

西の空に明けの明星が輝き始めた頃、レンとティアナは互いにデバイスを構えて向かい合っていた。

「やるわよ、レン」

「ああ。……たくあのガキ……、偉そつにゴタゴタ言いやがって……」

今だ左の頬に痛みを感じながら、レンはゼロスラッガーを握る力

を強める。

ティアナも二丁のクロスミラージユを握り、2人はどちらからとも無く激しくぶつかり合う。

ティアナが放った無数の魔力弾をレンが打ち落とし、そのまま突進する。ギリリと煌く銀色の刃をすれすれで回避し、至近距離で魔力弾を放つ。レンはそれをもう片方のゼロスラッガーで受け止め、一度後退する。

そんな2人の練習を見ながら、ヴァイスは一つため息をついた。

「なあにやってんだかな、あいつら……」

—— 医務室

すっかり目が覚めてしまったムサシは、シャマルの診断結果を聞いている。なぜかその横にヴィータもちよこんと座っている。

「んで、どうなんだよシャマル？ こいつの怪我の具合は……？」

「そつね……」

カルテを捲りながら、シャルマルは少し考える。そして一つため息を漏らし、ムサシの方を向く。

「はつきり言うわね。ムサシ君、あなたウルトラ……」

「っ！」

「へっ？」

真剣な面持ちでシャルマルが呟いた言葉に、ヴィータもピクリと反応する。対する本人は、素っ頓狂な声を上げる。

「……マンモス健康体？」

「……」

そして続けられた言葉に、ムサシとヴィータが硬直する。待つこと5秒。2人は再び口を開く。

「「はっ？」」

声を揃えて一文字言う。
それを見たシャルマルは、何の気もなく続ける。

「だから、ウルトラマンモス健康体。いたって健康よ。……ま、傷口がちゃんと塞がるのは1週間以上先でしょうけどね」

いたって真面目な口調で診断結果を伝えるシャマル。
それを聞いたムサシは、ポカーンとしながら口を空けていた。すると医務室のドアがノックされる。

「どうぞ」

シャマルがカルテを片付けながらそう言うと、ドアの奥からエリオとキャラコが入ってきた。

「エリオ！ キャロちゃん！」

「ムサシ！」

「ムサシ君！ もう大丈夫なの！？」

入ってくるや否や、エリオとキャラコは心配そうな表情でムサシに詰め寄る。

対するムサシは、2人に笑顔を向けて腕を振る。

「これぐらい全然平気だよ……っ！」

ほんの一瞬辛そうな表情をしたのを、エリオは見逃さなかった。

「ほら、まだ無理しちゃダメだよ……」

「いや、これぐらいなんて事……」

心配するエリオをよそに、辛さを誤魔化しながら立ち上がるムサシ。それを見たヴィータは、一つため息をついてムサシに言い放つ。

「ムサシ、おめーはまだ休め。副隊長命令だ」

そう言われ、押し黙ってしまうムサシ。ふらつくムサシを支えながら、ヴィータがベッドに寝かす。

それを見ながら、キャロが不思議そうに呟く。

「ムサシ君とヴィータ副隊長、いつの間にそんな仲良くなったんですか？」

「っ！ は、はぁ！？ な、なんでこいつとあたしがななな、仲良しなんだよ！？」

「いや、だれがどう見ても……」

「それに、普通はライトニングなんだからシグナム副隊長かフェイトさんがする事じゃないんですか？」

顔を真っ赤にしながら怒鳴るヴィータ。エリオは少し圧倒されながらも素直に呟き、キャラは今だ不思議そうにさらに質問する。

ムサシが横になったのを確認したヴィータは、少し考えた後、耳まで真っ赤にしたまま口を開く。

「あ、あいつらはあのバカデカイおっぱいが邪魔でこういう作業にはむかねーんだよ！ だからだ！」

それを聞いてずっとこけそうになったエリオ。だがキャラがそれを聞いて自分の体を見下ろす姿を見て、何とも言えないやるせない気持ちになったとか……。

——後日・演習場

エリオ、キャラ、ヴィータの3人は、擬似再現したビルの上から模擬戦の様子を見ていた。

スバル、ティアナ、レン対なのはの3on1の模擬戦である。試

合開始からしばらくして、慌ててフェイトが駆け寄ってくる。

「模擬戦、もう始まっちゃった？」

「うんにゃ、今丁度だ」

ヴィータの横に立つフェイトにヴィータはそう説明する。

フェイトが言うには、本来はこの模擬戦は自分が担当する予定だったらしい。さらに寝る間も惜しんでフォワード陣の様子を確認するほど、なのはは熱心にやっていたのだ。

「なのはさん、凄く丁寧に私達の事見ててくれるんですね」

とはキャロの弁。

模擬戦も大詰めになってきた、というその時、急な軌道を描きながらスバルがウイングロードでなのはに突進する。それに合わせてレンも時間差で特攻する。さらになのはの真上にあるウイングロードを駆け上がり、ティアナがクロスミラーージュに橙色の魔力刃を出現させて振り下ろす。

「……レイジングハート……。モードリリース……」

その言葉が聞こえたとき、4人は既に土煙に包まれて見えなかった。

それが晴れて見えてきたのは、怯えきった表情のスバルとティアナ。悔しそうな表情のレン。そして表情は見えないが、素手でスバルの拳とティアナの刃を受け止め、唯一つの魔力弾でレンの攻撃を封じているなのはの姿だった。

「……皆、どうしちゃったのかな……？ 模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ……？ こんな危ない動きで、怪我でもしたらどうするのか……？」

ねえ、私の教導……、そんなに間違ってたかな……？」

ゆっくりとなのはの口から発せられた言葉に、スバルは自分のしていた事が分かったのかはと目を見開く。

だが次の瞬間、ティアナはなのはの手から離れる。

「あたしはっ！ もう……、何も失いたくないから！」

泣き叫ぶティアナは、クロスミラーシュの銃口をなのはに向ける。それを見上げたなのは、指をティアナに向ける。

「少し、頭冷やそうか……」

そう呟くと、その手に魔力が集まる。

そう叫ぶと同時に、ウルトラゼロブレスレットから、ウルトラゼロアイが飛び出し、レンの両眼に装着される。
テクターギア・ゼロになったレンは、バインドをちぎってなのはに突進する。

「レンさん!？」

「レンも……ウルトラマン?」

エリオとフェイトが、驚きの声を上げる。
そうしてる間にも、ゼロは鋭い拳をなのはに放つ。

『うあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ!』

雄叫びと共に、拳が直撃する鈍い音が響く。

《横槍失礼いたします》

ゼロの放った拳は、満月を模した円形の盾に阻まれていた。
ブループラネットの登場に、誰もが驚く。そしてウインググロード
の奥から、ゆつくりと1人の少年が歩いてくる。

ムサシ・ハラオウンだ。

「……いい加減にしろよ」

そう言い放つムサシは、皆が知っているムサシとは一変していた。
その前髪に隠れた瞳から、一粒の涙が零れる。

それは怒りによるものなのか、悲しみによるもののかは、誰に
も分からない。

「今ここであなた達が争って、それがいったい何になるって言うん
ですか？ ちゃんと話して、言葉で伝え合えば済む話じゃないんで
すか……？ こんなの……意味無いですよ……」

ムサシのその言葉に、なのはははっとなってバリアジャケットを解除する。

だがゼロは、その言葉にも耳を貸さない。

『綺麗事ばっか抜かしてんじゃねえ！ てめーに俺の何が分かる！ 自分のせいで大事な人を失った気持ちが、てめえにわかんのか！』

そう叫ぶゼロは、なぜか泣いている様に見えた。
その言葉に、ムサシは静かに口を開く。

「分かりませんよ……。っていうか分かりたくも無い。だって、あなたは間違ってるから……」

『んだとっ！』

ムサシの言葉に、ゼロは怒りで拳を震わせる。

「あなたは自分のせいで母親が死んでしまったと思い込んでいるだけ。あなたは悪くなんか無い。それにあなたがそうして意味も無く拳を振るう事を、あなたの母親は望んじやいない」

ムサシは淡々と、ゼロに臆する事も無く言葉を続ける。
他の前線メンバーが見守る中、緊迫した空気が周囲を支配する。

『……てめえに……、てめえにお袋の何が分かるんだよっ！』

「……」

『俺はっ！ 俺は……、このままじゃ意味ねえんだよ！ この力を証明して……、俺はウルトラマンを超える！』

そう叫ぶと、ゼロは足元を強く叩き、どこかに姿を消した。

ムサシはゆっくりと歩き、ルットを回収する。そして空に巨大なミッド式魔法陣を展開させ、詠唱を始める。

「……降り注げ。傷を癒す天使の涙……。フルムーン……。シャワー」

魔法陣から光の雨が降り注ぎ、ティアナやスバル、なのはの傷を癒していく。スバルを縛っていたバインドも錆びた様に砕け、ウィングロードも腐敗していく。

それは癒しの雨でもあり、腐敗の雨でもあった。フルムーンシャワーは、その時のムサシの心に大きく左右されるようだ。

ムサシはルットをペンダントに戻し、一つ呟く。

「……どうして……」

そのままムサシは倒れ込み、意識を失った。

その頃、レンはどこかの裏路地を歩いていた。

「俺は……、俺は……！」

その時、何者かが背後から声をかけてきた。

『少年よ……、力が欲しいのかい？』

レンは振り返り、その姿を見るや睨みつける。が、影の話にのつたのか、その影に着いて行った……。

第8話 強さの先に（後書き）

次回予告

レン

「俺は、もっと強くなる……！」

ムサシ

「何でこんな事をしたっ！」

キャロ

「ゼロが……、レンさんが街を破壊してる!？」

ゲン

「ゼロ……」

ムサシ

「お前だけは……、絶対に許さない！」

次回、ウルトラマンコスモス！

【君にできるなにか】

強さの赤、優しさの青。青年は、甲冑に優しさを隠す……。

第9話 君にできるなにか（前書き）

挿入歌

『DREAM FIGHTER』

第9話 君にできるなにか

……暗い。

ここは、どこだ……？

『ゼロ……っ！』

誰だ……？ 俺を呼ぶのは……。

『ゼロっ……』

この声……、どこかで聞いた事あるけど……っ！？
まさか……！

『ゼロ！』

お袋……？ お袋なのか！？
あ、居た！ 待ってるお袋！ 今行くからなっ！

『ゼロっ！ 危ない！』

えっ？

その言葉で、俺はようやく身の危険を悟った。右から、猛スピードで突進してくる黒い戦士……。

そいつの爪が……！

目の前に突進して来た筈の黒い戦士はいなくて、目の前にはお袋がいて……。

お袋の腹が……、腹から黒い手が出て……。

そこから光が漏れて……。お袋は、目から光を失って……。

『ちっ！ 邪魔しやがって……』

……てめえナニモンだ……。

何でお袋を！

『はっ！ そこに居たのが悪いんだろゴミめ！』

貴っ様……！

『フン！ 俺様の名はウルトラマンベリアルだ。良く覚えておくんだな』

そう言い残し、奴は消えた。
ウルトラマン……。許さない……。

絶対に……！

その日から、俺はウルトラマンが嫌いになった。

俺は絶対にウルトラマンとは名乗らない。ウルトラマンになんかなりたくない！

だから俺は、手を伸ばした。あの光……、プラズマスパークに。

だが、俺の手は真紅の別の腕に掴まれた。その男は俺を突き飛ばし、偉そうにこう言いやがった。

『この光に近付くな！ お前には、まだ早すぎる！』

言うが早いか、俺は故郷を追放された。

訳分からん磁気嵐の吹き荒れる惑星で、同じ様に真紅の体をした戦士と無理やり戦わされた。

こんな不恰好なギア着けさせられてな。

だがあるとき、俺はその惑星を抜け出す事に成功した。ひたすら宇宙を飛び回った拳句、この星にたどり着いた。

俺はそこで人間の姿を借り、人間として暮らしてきた。

何でモロボシなんて名乗ろうと思ったのか。今でも分からない。ただ、なぜか安心感を覚えていた……。

そして俺は魔道師……騎士見習いとして生活し、訓練校でスバル達と出会った。

その後は普通に暮らしていた……。この部隊に来るまではない！

いつの日からか平和だったこの地にも怪獣が現れ始め、拳句ウルトラマンまで現れやがった！

なににせよ、俺は証明しなくちゃならない……。俺自身の強さ……。俺は、ウルトラマンを超越してるって事を！

『それが、あなたの戦う理由ですか？』

『ああそつだよ！ その為なら、どんな犠牲を払っても構わない！』

俺は目の前で立っている青い巨人、『ウルトラマンコスモス』に向かって、そう叫んだ。

『……やっぱり、あなたは間違ってます』

『言ってる！ 俺は俺のやり方で強さを証明する。邪魔するなら……お前も消す！』

『僕は消されません。あなた如きに負けるほど、僕は弱くないので』

ウルトラマンコスモスStrikers

第9話 君にできるなにか

――数分前

機動六課前線メンバーは、緊急アラートを聞いてモニタールームに集まっていた。

そのモニターに、一つの映像が映される。

「これは……っ！」

ムサシがそう呟く。

モニターには、クラナガンの街に現れたテクターギア・ゼロが映っていた。

その映像をしばらく見た後、ムサシははやてに言う。

「僕が行きます」

『てめえ……。舐めた事言ってくれんじゃねえか!』

俺はコスモスに殴りかかりそうになるが、すぐに止める。

『ちっ！ またかよ……』

またクラナガンに怪獣が無数に現れる。
そして街を破壊し始める。

『ったく！ お前は手を出すな！ いいな!?!』

『出しませんよ。だって……』

俺は怪獣達をぶっ飛ばしながら、コスモスの言葉を聞く。

『あなたは……、街を破壊してるんですから……』

『はっ?』

何言ってるんだこいつ?

街を破壊してるのは怪獣だ。俺はコスモスの目の前で、怪獣を殴り飛ばす。

『ほら。これのどこが街なんだよっ！』

そう言いながら振り返ると、コスモスは一步詰め寄ってくる。

『……良く見る』

すると奴は拳を握り、テクターギアの仮面を殴る。
目のプロテクターに輝が入り、視界が悪くなる。

『なにすんだてめー！』

『良く見ろって、言いましたよね？』

言ってる意味が分からず、俺は周囲を見渡す。

『……なんだよこれ……？』

俺の周囲には、廃墟の様なクラナガンの街が広がっていた。怪獣
なんて一体も居ない。

居るのは俺とコスモスだけだった。

『なんだこれ！ 誰がこんな事を！？』

『分からないんですか？ あなたですよ。これを行ったのは……』

コスモスの言葉に、俺ははつとなる。

あの手ごたえ……。視界の悪いプロテクター……。

街を破壊したのは……俺？

『何でこんな事をした……っ！』

『俺は……』

『あなたには言っていない！』

『あん？』

そう叫ぶと、コスモスは真上を向いた。

『お前だろ……、メフィラス星人っ！』

真上にある、俺が乗せられた宇宙船に向かって、コスモスは叫んだ。

コスモスが宇宙船に向かって叫んでいるとき、地上では1人の僧侶がそれを眺めていた。

「ゼロ……」

すると宇宙船から黒い異星人が表れ、青白い甲冑を身に纏う。
『アーマードメフィラス星人』であった。

『ほう……。私の幻覚操作を見破るとは、中々の力ですね……』

『貴様だけは……！ 絶対に許さない！』

コスモスは腕を振り上げ、コロナモードへと姿を変える。
ゼロはその横で、呆然と立ち尽くしている。

コスモスはメフィラスに突進し、その顔面を殴り付ける。何度も何度も。

腹部を蹴り飛ばし、メフィラスが後ろに倒れる。

『はあ……はあ……！』

『ぬう……っ！ ならば！』

メフィラスは左手から電撃をゼロに向かって発射する。

『っ！ 危ない！』

コスモスはそれに気付き、ゼロを庇う。
そして電撃を食らい、その身が焼かれる。

『ゼアアアアアアアアアアア！』

目の前で崩れ落ちる巨人を見て、ゼロの脳裏にある最悪の記憶と重なる。

その場に倒れ込み、コスモスはムサシの姿に戻る。傷が癒えていないのか、ムサシはピクリとも動かない。
それを見たゼロは、震える足でムサシに近付く。

『ムサシ……？』

恐る恐る呟くが、ムサシは反応を示さない。
ゼロが拳を握り締めると、テクターギアにあるチューブが引っ込み、接続が弱くなる。

『ごめんな、ムサシ……。痛えのに無理して俺の目え覚まさせてくれて……。ありがとな……。』

そう言つと、ゼロはバリアでムサシの体を包み込む。

『俺、戦うよ……。ウルトラマンとして……。』

ゼロはゆっくり立ち上がり、拳を震わせる。

『ぬっ……。貴様、何者だっ！』

何かを感じたのか、メフィラスがそう叫ぶ。

するとテクターギアが弾け飛び、ゼロの上半身に青い体、そして銀色の顔が出現する。

そして振り返り、ゼロは橙色の両眼でメフィラスを睨む。

『ゼロっ！　ウルトラマンゼロ！　セブンの息子だっ！』

本当のゼロ、『ウルトラマンゼロ』はそう叫び、メフィラスと対峙した。

『おのれ……。いだよ、グロマイト！』

的確に急所を捉え、グロマイトの強固な装甲が陥没し、彼方に吹き飛ぶ。

それを追う様にレオは走り出し、発火させた脚を水平に蹴り入れる。

『ダアリアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！』

レオの必殺技、『レオキック』が炸裂し、グロマイトは爆発を起こした。

そしてゼロは両手に頭部の刃、『ゼロスラッガー』を握り、メフィラスの剣に対抗する。

片方のゼロスラッガーで剣を受け止め、もう片方で切りつける。そして一度距離を取り、額の緑色に輝くビームランプから光線を放つ。

『デアッ！』

『エメリウムスラッシュ』が、メフィラスの剣を切断する。

追い討ちをかける様に、ゼロは左腕を水平に伸ばし、両腕を「」字に組む。

『ダアアアアアア！』

銀色の光線、『ワイドゼロショット』が、メフィラスのアーマーを砕く。

黒い本体がむき出しになったメフィラスに、止めと言わんばかりにゼロスラッガーを2本、カラータイマーの横に装着する。

『食らえっ！』

エネルギーを溜め、拳を握って腕を下ろす。

^ロデエエエエエエエエエエエエエエエエ
アアアアアア！！！
□

青白い光線、『ゼロツインシュート』が炸裂し、メフィラス星人は断末魔を上げて爆発した。

宇宙船は逃げようとするが、それより早くレオとゼロが前後に並ぶ。

そして互いに腕を水平に伸ばし、ゼロの頭の上で両手を重ね合わせる。

「ダアアアアアアアアアアアアアアアア
リヤアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアア！！」

赤と緑の光線が合わさり、『レオゼロダブルフラッシュ』とな

って宇宙船を破壊する。

2人は構えを解き、レオはマントを羽織る。

『レオ……、俺……』

『……何も言っな。お前はもう、立派なウルトラマンだ』

レオはそう言ってゼロの肩に手を置き、空へと飛び立っていった。

『……サンキュ。レオ……』

——機動六課

レンが気を失ったムサシを背負い、機動六課にやって来た。

医務室にムサシを寝かせた後、レンは何も言わず部隊長室に向かった。

そしてはやての前に立ったレンは、無言で頭を下げる。

「勝手な事をした上、教官に怪我までさせそうになって……、申し訳ありませんでした！」

そう言つて長い時間頭を下げるレン。

そして不意に頭を上げ、一つの封筒を渡す。

「これは……？」

封筒には、『辞任届』と書かれていた。

そしてはやては、じつとレンの瞳を見つめる。

するとため息を一つつき、奥に声をかける。

「なのはちゃん、入ってええよ」

すると部隊長室のドアが開き、なのはが入ってくる。

レンはバツの悪そうな顔をし、視線を落とす。

レンに近づいたなのはは、最初にこう言った。

「ごめんね……」

「えっ……？」

意外すぎる言葉に、レンは顔を上げる。

「私、レン君の良い所、やりたい事……、ちゃんと引き出してあげられなかった……。だからレン君、ちょっと我慢できなくなっちゃったんだよね？ 私の教導地味だから……」

「違っ……、俺は……」

なぜか自分を庇おうとするのはに、レンは心に何かが込み上げてくるのを感じる。

「これからはちゃんと出してあげるから……。もう少しだけ、一緒に頑張ろう？ ね……？」

そこまでののが言つと、レンは堪えられなくなったのか声を上げた。

「うあ……うああああああああ……っ！」

涙を零すレンを、なのははそっと抱きしめる。

頭を撫でられ、レンはなのはに亡き母に抱いていた優しさを感じる。それがまた、彼の涙腺を崩す。

子供をあやす様なのはを見ながら、はやては辞任届を破く。

「ちゅーこっちや。これはもう必要あらへんな」

笑顔で言ったはやての言葉は、レンの泣く声にかき消された。

第9話 君にできるなにか（後書き）

次回予告

なのは

「高町なのは9歳！ ごく普通の魔法少女なの」

スバル

「繰り返す。私は何度でも繰り返す……！」

エリオ

「ラブ。ラス最高！」

キャロ

「我が名は魔界騎士、華狼……！」

ムサシ

「私は、いたい……？」

ルット

《今世界を救えるのは、私達デバイスだけって事ですね……》

次回、ウルトラマンコスモス！

【アナタハダアレ？】

はて、ここはどこ？

キャラクター紹介（前書き）

マホロバの詳細と、レンのイラストは後日……。

キャラクター紹介

名前 ムサシ・ハラオウン

年齢 10歳（実際は不明）

術式 ミッド式

魔力色 青

魔力ランク Bランク

魔道師ランク 陸戦Bランク

デバイス ブループラネット（待機状態：ペンダント デバイス状態：円形の盾）

主な使用魔法

- ・ムーンライトメロディ（第4話、第5話使用）
- ・ゴールデンライトバリア（第4話使用）
- ・フルムーンシャワー（第8話使用）
- ・怪獣召喚（第2話、第4話使用）
モンスロード
- ・ソニックムーヴ（本編未使用）
- ・サンダーレイジ（本編未使用）
- ・風を使った魔法（第4話使用）

備考

本編主人公。外見年齢10歳の少年。
記憶を失っていた所をフェイトに保護され、ハラオウンの性を名乗

るようになる。名前である『ムサシ』は、彼が覚えている最も『強く』、最も『優しい』人間の名だと言う。

その実態はブラックホールに吸い込まれミッドチルダに飛ばされた、『ウルトラマンコスモス』そのものである。

非常に優しく、極端に争いを嫌う。模擬戦すら嫌い、その思考はブループラネットの形状にも影響している。

が、優しく天然が入っているにも拘らず、時折腹黒い発言が目立つ。記憶を失っているからか、春野ムサシと似た様な性格になっている。保護施設で出会ったエリオとは、現在でも親友同士。

現在なれるのは、ルナモードとコロナモードのみである。

・ 絵

> i 3 4 0 9 9 — 2 7 7 1 <

名前 レン・モロボシ

年齢 17歳

術式 近代ベルカ式

魔力色 緑

魔力ランク Aランク

魔道師ランク 陸戦Aランク

デバイス ゼロスラッガー

使用魔法

不明

備考

ウルトラマンゼロ。

当初は極端に『ウルトラマン』を嫌い、テクターギアも装着したままだった。

だがムサシと出会い徐々に変わり、現在では自分から『ウルトラマンゼロ』を名乗る様になる。

過去に母親をベリアルに殺された事が原因。母親の詳細は不明。

性格はかなり荒っぽく、また自分の主張を譲らない頑固者。

その反面自分を庇ってくれたムサシやなのはにはかなり優しくなっている。

本編では出てないが、かなりのおバカ。

第10話 アナタハダアレ？（前書き）

今回は過剰なキャラ崩壊が含まれます。苦手な方は飛んで下さい。

第10話 アナタハダアレ？

「私、高町なのは9歳！ 極々普通の小学3年生だったけど、ある日突然魔法少女になっちゃったの！ 魔法の杖、レイジングハートと一緒に！ 星に変わってお仕置きなの！」

「シャッス〜！」

「あなたは、ティアナ・ランスターのままでいればいい……」

「お前達倒すけど良いよね？ 答えは聞かないけどっ！」

「やっぱねえ……、二次元は裏切らない！」

「だがどうする？ 俺はそのポーカーとやらを知らないんだが……？」

「アナタハダアレ？ いや真面目に」

「ご覧頂けたでしょうか？」

私の目の前で起こっているこの光景。

上から順に、なのはさん、フェイトさん、スバルさん、ティアナさん、エリオさん、キャラさん、そして私、の声です。

なにやらなのはさんは高い声でレイジングハートを振り回し、フェイトさんはミジュ。のぬいぐるみを持ち、スバルさんは真剣な表情で静かに言い、ティアナさんは帽子を被ってクロスミラージュを構え、エリオさんは某携帯ゲーム機を片手に握り、キャラさんは白

いロングコートを羽織って剣を握っています。

もう意味が分かりません。

あ、ちなみに私は私です。ブループラネットことルットでございます。体はマスターですがね。

見た目はムサシ、頭脳はルット！ その名は、名探偵コスモ！

……いえ、何でもありません。

さて、なぜこのようなカオス極まりない状況に陥ってしまったのか。事はほんの数分前に遡ります。

……はあ、戻りたくない……。

ウルトラマンコスモスStrikers
第10話 アナタハダアレ？

――数分前

機動六課に朝がやってきた。

いつも通りの、何の変哲も無い朝だった。そう、あの時まで……。

「アレは……？」

そう呟いたキャラの視線の先には、一つ目のひよろつとした怪物が水面に立っていた。

『にゃ〜』

「「ネコ……？」」

エリオとムサシの声が重なる。

さらにもう2匹現れた。だが特に危害を加える様子も無く、むしろ大人しくて可愛い怪物だと思っていたらしい。

そうして隊社の外に出た機動六課前線メンバー。その瞬間、事件は起きた。

『『『んにゃあああああああああああああああああああ

「……！」

ネコ怪獣、『タマ』、『ミケ』、『クロ』達がそう叫ぶ。すると奴等の体から青い電撃が放たれ、六課の隊社に直撃する。タマ達は水中に姿を消したが、被害は甚大だった……。

——side ルット

なにやら先程の電撃で、外に出ていたマスター達は気を失ってしまいました。

大丈夫でしょうか……？

「ん……っ！」

《マスター！ 大丈夫ですか？》

「……ここは？」

私の言葉にも答えず、マスターは辺りを見渡す。そして自分の体を見て、ぎょっとして立ち上がる。

「なっ！？ 何だこの体は！？ 私は確か、ムサシと共に遊星ジュランに向かつて……、帰りに謎のブラックホールに吸い込まれて……？ ダメだ、そこから先がわからない……」

《マスター、何を仰っているのですか？》

「？ 誰だ？ さっきから私を呼ぶのは……？」

急に頭を抑えて理解不能な言葉を連発するマスター。

気になった私が声をかけると、私の存在を感知していない様子でした。なぜでしょう？

まさか、悪い女にたぶらかされて……！

……な、訳ありませんね。マスターに限って。しかもあの短時間ですからね。

《マスター、こちらです。あなたの首に掛かったペンダントです》

「ペンダント？」

ようやくマスターは私の方を向いて下さいました。

あれ？ 何だかいつもよりお顔が凜々しい気が……？ いや、きつといつもがぼやんとしすぎているだけですな。

「なぜ、ペンダントが喋って……？」

どうやら先程の糞ネコ共のせいで、マスターの記憶に何らかの影響があったようですね。

《マスター、一先ず落ち着いて下さい。今からあなたの事、それからこの世界の事についてお話しますから》

・ ・ ・ ・

《で、マスターは先程の糞ネコ共の攻撃で一時的に記憶を失っている状態、という事です》

「なるほど……。ありがとう。大体の事は把握できた」

《ご理解が早くて助かります》

どうやら記憶の無いマスターは賢いようですね。そういえば、マスターは元々記憶喪失でいらっしやったんですね。それでしたら今の人格は、記憶を失う前……、つまりマスター本来の人格という事でしょうか……？

……なぜでしょう？ 聞くべき事な筈なのに、聞いちゃいけない気がします……。

まあ、今はまだいいですかね。とりあえずは皆さんの様子を……。

「うん……？」

あ、皆さん目を覚ましましたね。これで少しは……、

「平凡な小学3年生だった筈の私、高町なのはに訪れた小さな出会い」

「シャツス〜！」

「繰り返す、私は何度でも繰り返す……」

「ねえねえ、おねーちゃんは！？」

「ラブ。ラス最高！」

「夢を奪った貴様の陰我、俺が断ち切る！」

「《は？》」

なのはさん、フェイトさん、スバルさん、ティアナさん、エリオさん、キャラさんの順に変な事を言い始めました。

特になのはさん、痛いです。フェイトさんも理解不能ですし、スバルさんもギャップあります。後ティアナさん、あなた何かに憑依されてますよね？ エリオさんも……、きつと、きつとヴァイス陸曹のせいですよ……？

まあ一番は……、キャラさんでしょうか。ギャップとかそういう

レベルじゃありませんからね。今にもホラー特撮が始まりそうですね。

「な、中々個性的な仲間恵まれていたようだね……」

口元を引き攣らせながらそう仰るマスター。

しかしこのままだとマスターもろくに動けませんし……。仕方ありません。

《マスター！ お体借ります！》

「へっ？ 何を《ダイブ・イン！》あばるばすっ！？」

……ふむ、上手く行きましたね。

ノリでダイブ・インと叫びましたが、実際私はただのペンダントのままで。ですがマスターの意識を一時的にスリープさせ、こちらから脳に直接信号を送る事でマスターの五感を借り、こちらからマスターの筋肉を動かせる様になっています。様は、私がマスターになったのと同じ事です。

・ ・ ・ ・

と、いう訳で今に至ります。

しかし困りましたね。とりあえず、はやてさんの所に行きましようかね。

嫌な予感しかしませんが……。

「守るに値する輝きを秘めた……、無限の存在……！　それが人だ！」

「キヤロさんちょっと黙ってて下さい！」

——機動六課・隊社

急がねばと思い全力で走っていると、シグナムさんに遭遇しました。良かった、この方ならまだ……、

「こあら！　そんな勢い出しちゃスピード違反だぞ？」

と思っていた時期が私にもありました。

なにやら少女マンガの様な顔をしたシグナムさんが、少しもじもじして近付いてきました。

なにこの違和感……。

「そんな子には……、ラブの違反キッス……」

「っ!？」

そう言っていきなり私……、もといマスターの左頬にキスしてきました。そして顔を赤らめ、どこかに去っていきました。

なんだっ たんでしょうか……？

シグナム副隊長のこともですが、今私が感じている不快感も……。

左頬を必死に擦りながら走っていると、今度はヴィータさんに出会いました。

……この人もマスターに強い好意を抱いている方ですからね……。難しいです……。

「あ……! ム、ムサシ……君？」

「へっ？」

あれ? マスターの事を覚えてる……? という事は記憶があるのでしょうか……?

「あ、あのねっ！……えっと……、私、その……」

いつもと違い、妙にもじもじしながら頬を赤らめるヴィータさん。髪も解いているので、はたから見れば全くの別人です。

「ご、ごめんなさいっ！　やっぱり何でもありません！」

そう言ってそそくさと走ってどこかに行ってしまうヴィータさん。……どちらにせよ素直じゃないんですね。

ついに部隊長室の前まで着ましたよ。ようやく。一度大きく深呼吸し、何があっても逃げない様自分の頬を叩きます。

あ！　これマスターのお顔だった！

しまった……、私は何て愚かな事を……。

ま、黙ってればバレませんね。

そしてドアが開き……

「部隊長大変です！　六課の皆さんが……？」

窓の向こうを向いて座っていたはやてさんが振り返り、にこやかに微笑む。

「あら？ これはこれはご機嫌麗しゅう。そんなに慌ててどうかされましたか？」

「すみません、間違えました」

そう言って一度部隊長室から出ました。
違う。きつと見間違いだ。

はやてさんがあんな素敵な笑顔で優雅に紅茶を啜りながら標準語で話す訳ありません。

いつものはやてさんはもところ……、いやらしい笑みで同人誌片手に関西弁を連呼する様な人な筈！

どうやら夜天の主でもあの糞ネコ共には抗えなかったようですね……。

とりあえず、皆さんを外に放置してはまずいですね。一度戻りましょうか。

再び廊下を歩いていると、今度はアウトフレームのリンさんがやって来ました。

なにやらモデル歩きをしています……。リンさん、あなたの体型でそれをするのは空しいだけですよ……。

「ああゝら、こんな所で何をしてるのボ・ウ・ヤ？」

色っぽい声を出しながら妖艶に微笑んでくるリインさん。
なんでしょう、この違和感……。

「うふふ……」

そう笑い、首筋から顎にかけてを指先で優しく撫でてくるリインさん。

くすぐったいので止めて下さい。

「連れないわね……。それじゃ……」

「っ！？」

一瞬不貞腐れた後、背伸びをして右頬にキスをするリインさん。
私がポカーンとしてる隙に、どこかに歩き去ってしまいました。

……マスター、守護騎士の皆さんにもてますね。

外に出ると、都合良くあの糞ネコ共が出現しました。
ですが今の私では戦えませんか……。っていうかレンさんは？

『おい！』

すると、内側から声がしました。どうやらマスターがお目覚めのようです。

「マスター。あいつらぶつ潰してきて下さい。いやもう全力で」

『わ、分かった……』

ありがとうございます。

そしてマスターの意識を開放し、私はいつも通りペンダントに戻りました。そしてマスターは私を安全な場所に降ろし、コスモプラックを無言で発光させました。

ああ、凛々しいマスターもまた素敵……。

——side ルット end

『デアッ!』

そう雄たけびを上げて現れたコスモス。だが、見た目はルナモードともコロナモードとも違っていた。

赤と青が均等に配され、カラータイマーの淵や胸に金色が施されている。

『ウルトラマンコスモス・エクリプスモード』であった。本来なら、『春野ムサシ』と同化していないとなれない筈のモードなのだが……。

『ディイイアッ!』

コスモスが叫ぶと同時に、水しぶきを上げてミケが吹き飛ぶ。先程までミケが立っていた場所に、拳を振りぬいたコスモスが立っていた。

すると上空から、勢い良くゼロが現れる。

『姫様のお呼びに預かり、勇者ゼロ! ただいま見つ参っ!』

『邪魔』

『はい』

コスモスの一言で、ゼロはそそくさとどこかに退散する。何しに来たんだあいつ。

「はあ、何があつたかよ分からんわあ」

《見ますか？ 映像記録》

一応皆さんの分録画してありますし。
すると皆さんは一斉に互いの顔を見合い、そして声を重ねてこう
言いました。

『いいや』

《そうですか》

絶対に覚えてますね、これは。

「ねえルット、僕何があつたか覚えてないんだけど？」

《マスターにはまだ早すぎます》

「ええ！？ なにさそれえ！」

色々思い出して欲しくない事もありますからね。シグナムさんや
リンさんも覚えているようですし。

それに……、やっぱりマスターは子供っぽい方が良いですね！

|
s
i
d
e

ル
ッ
ト

e
n
d

第10話 アナタハダアレ？（後書き）

次回予告

ヒルカワ

「どうも。週刊管理局の、ヒルカワです」

ムサシ

「？」

ヒルカワ

「確かモンディアル家のお子さんですね？ ですがエリオ・モンディアル君は既に死亡したとされていますが？」

エリオ

「それは……」

ムサシ

「あなただけは……！」

レン

「それ以上言つてると……、殺すぞ？」

次回、ウルトラマンコスモス！

【優しさの後ろに】

最悪の人間に、優しさの少年はどう出る……？

春野ムサシとコスモス。この二人の絆もコスモスのテーマだと思うんですね。

次回と次々回は、一応基本コンセプトでもありますが【絆】や【友情】をテーマとして書いていきます。

今回はエリオとちょっぴり成長したレンを軸にしたお話です。

第11話 優しさの後ろに

——ミッドチルダ・クラナガン

[illegible]

「止まれ止まれ止まれええええええええええええええええ！」

イボの多い四足の赤い怪獣が猛スピードで突進する。その正面でゼロが姿勢を低くして構え、その後ろではコスモスが両腕を広げ光の虹を作っている。

「ギヤアアアアアイツ！」

「ふっ！」

その怪獣『ボルギルス』は止まらず、その勢いでゼロを吹き飛ばす。

左手に集めた光を右手で押し出す様に構えていたコスモスだが……

...

「はあああああ……んん……つてええ!？」

「ギユウウウオオオオイッ！」

フルムーンレクトを放つ直前、ボルギルスが前足を上げてコスモスにのしかかる。そのままコスモスは後ろに倒れ、その上でボルギルスが暴れる。

地上で見ていたフォワード陣は、その状況を見て啞然とした。

「えつと……？」

「何が起きてるの……？」

「さあ……？」

「何かあの怪獣、楽しんでるみたい……」

スバルとティアナ、エリオが目を瞬かせていると、キャロがポツリと呟く。

確かに街を破壊したりする様子は無く、先程からただコスモスを狙っている様に見えた。

そんなコスモスの上で暴れるボルギルスの尻尾を、ゼロが掴んで振り回す。

『いつまでそうしてる気がてめーはあああああああああああつしょーい！』

散々振り回した拳句、彼方にボルギルスを投げ飛ばす。刹那、ゼ

ロスラッガーとエメリウムスラッシュを放つ。

『デアッ！』

ボルギルスの着地点を円形に切り、ボルギルスが着地すると同時に大地が陥没する。

『今だムサシ！』

『ありがとうございます！』

コスモスは立ち上がり、再び左手に集まった光を右手で押し出す。淡い光がボルギルスを包み込み、ジタバタと暴れていたボルギルスが一瞬で大人しくなる。コスモスは自身とボルギルスの足元に魔法陣を出現させ、その中にボルギルスが吸い込まれていく。ゼロとコスモスは顔を見合わせ、互いに人間体に戻る。

「レン！ ムサシ！ おっつかれ〜！」

「おっ」

「お疲れました〜……」

元気良く迎えてくれたスバルに2人はハイタッチを交わし、ムサ

シはフラフラしていた所をエリオに支えられる。
するとキャラが、先程の様子を見て気になった事を伝える。

「ねえ、あの怪獣……。何か、ムサシ君にじゃれ付いてるみたいだったよ?」

「僕に?」

そんな事を話していると、物陰からメモ帳を持った男性が近付いてきた。

「その話、詳しく聞かせてもらえませんか?」

「「えっ?」」

突然声をかけられ、ムサシとキャラが同時に聞き返す。
舌なめずりをしながら近付いてくる男性に違和感を感じたティアナとレンは、ムサシ達を庇う様に出た。

「あなたは?」

「おっと失礼。わたくし……」

ティアナの鋭い質問に、男性はおどけた様に名刺を取り出してテ

イアナに渡す。

「週刊管理局、記者のダイル・ヒルカワです」

そう言う男性の目は、嫌らしくギラギラと光っていた。

ウルトラマンコスモスStrikers
第11話 優しさの後ろに

――機動六課

客室にて、座っているフォワード陣の前に脚を組んでヒルカワが座っている。表向きは期待の新人にインタビューという事になっているが、実際はどのような事が分からない。

念の為部屋の外にはフェイトとシグナムが立っている。

緊張してもじもじしているキャラを、落ち着かせる様にムサシが背中をさする。なぜかヒルカワがこの2人をメインにしたいと言いつ出したからだ。

「それじゃあまず始めに、お二人のお名前を」

「ムサシ・ハラオウンです」

「きゃ、キャラ・ル・ルシエです……」

ムサシは笑顔で、キャラはぎこちなく答える。だがヒルカワはメモを取る様子も無く、しきりにカバンを気にしている。

「ハラオウン……と言いますと、フェイト・T・ハラオウンさんの息子さんで？」

「あゝ、えーっと……まあ、そんなところですかね……？」

ヒルカワの質問に、ムサシは首を捻って考える。

「その所、もう少し詳しく」

「すみませんが、それ以上は個人情報ですので」

少し顔を近づけてきたヒルカワに、抑える様にティアナが前に出る。

するとヒルカワは顔を上げ、ティアナに視線を向ける。

「あなたは？」

「ティアナ・ランスターです」

ヒルカワの質問に、ティアナは睨みながら答える。するとヒルカワはメモ帳を捲り、どこかのページでそれを止める。

「ランスター……。ああ、ティダ・ランスターの妹さんで？」

「はい……」

「凡人と言われたお兄さんの死について、一言お願いします」

そのヒルカワの言葉に、ティアナの目が一瞬見開かれる。見えないう角度で拳を震わせるティアナを見て、スバルが心配そうにその顔を見上げる。

レンがティアナの肩に手を置き、座らせる。自身の方を向いたヒ

ルカワの持っていたメモ帳を弾き飛ばす。

「あんた、何が目的だ？」

「？ 何がでしょう？」

「とぼけんじゃねえ。俺達に質問したい事が明確にあったからあん時声かけてきたんだろ。こっちだって暇じゃねえんだ。用があんならさっさと見え」

レンの脅す様な発言に一瞬怯むヒルカワ。そしてカバンを一度見やり、再びムサシとキャロの方を向く。

「それでは……。キャロさん、あなたは巨人と怪獣の戦闘後、ムサシさんに何と言いました？」

「え、えっと……。『ムサシ君にじゃれ付いてるみたい、と言いましたよね？』あ、はい……」

怯えるキャロに、ヒルカワは押す様に続ける。その言葉に、ムサシ達はヒルカワの意図している事が分かった。

「おかしいですね……。じゃれ付かれていたのはあの青い巨人の筈。ムサシさんがじゃれ付かれていた訳ではないのに、なぜその様な発言を？」

「あつ！　そ、それは……その……」

味を占めたという表情のヒルカワに、キャロが怯えて縮こまってい
いく。

それを聞き、反射的にエリオが立ち上がる。

「聞き間違いです！」

そう言ったエリオに、ヒルカワのギラギラとした銀色の両眼が向
けられる。

「あなたは？」

「エリオ・モンディアルです」

「エリオ・モンディアル……？　確かモンディアル家のお子さんで
すよね？　ですがエリオ・モンディアル君は既に死亡したとされて
いますか？」

「それは……」

ヒルカワから発せられた言葉に、その場に居たフォワード陣が硬
直する。

一斉に向けられた視線に、エリオはただ俯く。ヒルカワはカバンを一度見やり、ニヤリと笑う。それを見たレンが掴みかかろうとするが、ムサシが低い声を発する。

「……あなたに、何が分かる……？」

ほんの一瞬、ヒルカワの表情が歪む。

「エリオの事……。あなたは何も分からないでしょう？ だったら黙ってて下さいよ……」

目を前髪で隠すムサシの姿は、以前のキレたムサシを連想させた。だがヒルカワは再びカバンを見やり、挑発的に繰り返す。

「ですが、なぜ死んだ筈のモンディアル家のお子さんがここに居るのか。誰もが気になってますよ？」

「っ！ てめえ！」

その言葉に、弾けた様にレンが飛び出す。だが何かが聞こえたスバルが、その音の発生源を見つけたスバルがレンを止める。

「待ってレン！ この人カメラ回してる……！」

「なっ！？」

掴みかかっていたレンがカバンを見ると、小さな穴からレンズの様な物が覗いていた。

すぐに唇を噛みながらヒルカワを睨むムサシとティアナ。だがレンは構わず、ヒルカワの左頬を殴り付ける。

「レン！」

叫びながらスバルとティアナがレンの両腕を抑える。

だがレンはそれに構わず、怒りに瞳孔の開いた目でヒルカワを鋭く睨む。

「人の過去を嘲笑って、何が楽しいんだ！ ああ！？」

怒鳴り散らすレンの声を聞き、慌ててフェイトとシグナムが入ってくる。

そして倒れているヒルカワと、スバルとティアナに抑えつけられているレン、そしてムサシとキャロに心配そうに見つめられているエリオを見て眉を顰める。

「……………何があつたの？」

「これはハラOWN執務官。ぜひ、プレシア女史との関係について
 お願いします」

「っ！」

[illegible]

ヒルカワの発言にフェイトが一瞬目を見開く。

再びヒルカワに殴りかかるうとするレン。あたふたするキャ口とムサシ。

ただ1人冷静に状況を見ていた人が、皆を沈める一言を発する。

「黙れ！」

そのシグナムの声に、その場が凍り付く。
シグナムは一つ息を吐き、ヒルカワを睨む。

「もう取材もどきは終わりだ。さっさと出て行け」

「これはシグナムさん。守護騎士のこ……」

「聞こえなかったか？ 出て行けと言ったのだが。それとも、力付
くで追い出して欲しいのか？」

騎士の目つきになったシグナムに睨まれ、ヒルカワは頬を撫でな

がら荷物を纏めて出て行つた。

沈黙した空気の中、ムサシが小さく口を開く。

「皆さん……大丈夫、ですか……？」

主にエリオ、ティアナ、フェイトを気遣う為にそう言った。その言葉に、スバルが空気を変える為に答える。

「うん！ 明るく明るくっ！」

「……ムサシは良いよね。僕みたいな辛い思いしてないんだからさ……」

スバルが言った後、エリオが低く呟く。

「エリオ……？」

「気持ちが分かるのかって、簡単に言ってくれるよね……。自分も分からないくせに……」

「そんなっ！ 僕は……！」

「もういいよ！」

エリオの言葉に、不思議そうにするムサシ。

そしてムサシの発言が気に入らなかったエリオは、そう言い残して出て行った。ムサシは手を伸ばしたが、その手は空を切った。

沈黙が周囲を支配する中、キャロがエリオを追いかけ様と一歩踏み出す。するとその肩をレンが掴む。

「俺が行く」

そう言い残し、レンは出て行った。

悔しそうに唇を噛み締めるムサシ。そんなムサシの肩にシグナムが手を置き、目で訴えた。

それに従い、ムサシはとことことシグナムの後に続いて出て行った。

――機動六課・裏庭

ベンチに座って息を整えるエリオ。そのエリオの横に、レンが座ってオレンジジュースを渡す。

「ほら」

「……いりません」

だがエリオは首を振り、レンの持っているジュースを拒む。
レンは一つ息を吐き、自分の分のオレンジジュースを飲む。

「人間って、機動六課の皆みたいに良い奴ばかりじゃないんだな……」

「……人間は基本、皆汚いんです。六課の皆さんが例外過ぎるだけで」

宇宙人であるレンと、人間不信に陥っていたエリオは、互いに人間の汚点を次々と上げていく。
だがふと、レンが呟く。

「でもよ、この考えて……いつからか無くなったよな」

「……はい」

レンの言葉に、エリオは小さく頷く。

「それって……あのウルトラマンモスのんき野郎のおかげだよな……」

「ムサシ……」

レンが言ったあだ名の本名を、エリオは呟く。

「お前、あいつには自分の気持ちが、辛い思いが分からないつつたよな？　けどおかしくね？　あいつ、自分の過去とか素性とか、全部無くしてんだろ？」

「あつ……」

レンの言葉に、エリオははっとなって顔を上げる。

そういえば、幼馴染の少年は記憶喪失だったな、と……。

「そ。んなもん忘れさせちゃうくらい、あいつは俺達に笑顔を向けてくれるんだ。その優しさの後ろに、自分の辛い事とか全部隠して……」

ホント無駄にかつけれよなあ、と続けるレン。

それを聞きながら、エリオはただ下を向いて目尻に涙を溜めていた。それを見ながら、レンはエリオにジューズを渡す。

「ほらよ。男がそんな事で泣いてんじゃねーよ！」

ジュースを受け取るエリオにニカツと笑い、レンはすっかり暗くなった夜空を見上げた。

優しく照らす満月に、心優しい少年を重ねながら。

――機動六課・屋上

シグナムに着いてきたムサシは、立ち止まったシグナムに合わせて足を止める。

「……お前のデバイスは盾だったな？」

「はい……」

突然のシグナムの質問に、ムサシは数回瞬きをしながら答える。
するとシグナムは茶色い制服の上着を脱ぎ捨て、レヴァンティンを構える。

「構えろ」

「はいっ!？」

鋭い目つきで睨まれながらも、ムサシは慌てて聞き返す。

「……心無き力は邪にしかすぎん。だが、力無き心もまた無力にすぎない。それをお前に教えてやる。肉体的にな」

半分あんたの趣味やろと言いたくなつたムサシだが、自分も茶色い上着を脱ぎ捨てる。

そして左腕にルットをデバイス化させ、右手を開いて前に突き出す様に構えた。

「お願いします……」

「ああ」

夜風が優しく頬を撫でる中、烈火の將と月光の盾はぶつかった。

――数時間後

ムサシはあちこち抑えながら、自身の部屋に向かっていた。

「あいたたた……。シグナム副隊長、途中から加減するの忘れたよねえ……」

《大丈夫ですか、マスター？》

「際どいかな……。ああ、早く寝よ」

ルットとそう会話しながら歩いていると、丁度部屋に戻ってくるエリオと遭遇した。

「「あつ……」」

目が合ってそう呟く2人だが、すぐに気まずくなって目を逸らす。逸らして数分、エリオの方が口を開いた。

「……ゴメン」

ムサシの方からは表情が上手く見えないが、ムサシはその言葉だけで、エリオの意図している事が分かった。

「……うん」

ムサシの返事にエリオは顔を上げ、互いに照れ臭そうに微笑む。
そして部屋に入り、ベッドに潜り込んだ途端、2人は心地良い寝顔で眠ったとか……。

――後日

ヒルカワの撮っていた映像は全てはやてとフェイトが消去し、ヒルカワはマスコミから姿を消した。
その日の事件以降、フォワード陣の……特に男性陣のチームワークが良くなったとか。

「ムサシ！ 突っ込むからフォローお願い！」

「任せといてエリオ！」

そう声を掛け合って高速で突進する赤と青の閃光。

今日も世界はおおむね平和です。

第11話 優しさの後ろに（後書き）

次回予告

ムサシ

「あなたは？」

メカザム

『拙者の名はメカザム！』

スバル・エリオ

「「カッコイイー！」」

シグナム

「腕が鳴る……」

メカザム

『ありがとう……？』

ムサシ

「誰かに何かをされて嬉しかった時にそう言っんです！」

次回、ウルトラマンコスモス！

【ムサシとメカザム】

少年は、ロボットとも心を通わせる……。

第12話 ムサシとメカザム

——ミッドチルダ・クラナガン

突如出現したガジェットの群れを迎え撃つ為、機動六課のフォワード陣が出動していた。

各々の役割を果たす為、一瞬動きが止まる。その瞬間、球体型のガジェットが光線を放つ。その攻撃は真つ直ぐキャロとティアナに向かつていく。

だが、その光線は標的に届く前にかき消された。

《sonic move・速度80パーセント。過去最高記録です、マスター》

「ありがとルット」

左腕に盾を装着した少年、ムサシが盾とそう言葉を交わす。そして後ろの橙色の髪の少女ティアナと、桃色の髪の少女キャロが同時に魔法を放つ。

「クロスファイアアアアア……シユウウウウウウウウツト！」

「フリード！ ブラストフレア！」

橙色の魔力弾と、白い龍フリードリヒが放った火球が合わさり、球体型のガジェットの横に居た縦長のガジェットを粉碎する。その硝煙に紛れ、赤毛の少年エリオが槍を大地に突き刺す。

「サンダー……レイジイイイイッ！」

槍、ストラダを中心に電撃が迸り、周囲のガジェット、そして球体型のガジェットの腕を破壊する。

そのまま空色の道を走って上から短髪の少女が突進する。

「ううおおおおおおおおおおおおおおお
！！」

鋭い咆哮と共に拳を放ち、ガジェットの周りに纏われた薄いバリアを破る。から空きになった本体に、茶髪の青年が小さな刀を両手に握って突進する。

「スラッガーっ！ ブレEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE
イクッ！」

両方の刃でガジェットを切り裂き、巨大なガジェットが轟音を立てて爆発する。

フォワード陣は一箇所に集まり、互いに笑顔でハイタッチを交わ

す。

だが、そうして油断している6人に向かって光弾が放たれる。

「っ！ 危ない！」

それに気付いたムサシが、反射的にブループラネットでその光弾を受け止める。だが光弾に押し負け、大きく吹き飛ばされてしまう。

「くあっ！」

「ムサシ！」

ムサシが吹き飛んだ直後、エリオが光弾の放たれた方向を睨む。硝煙の中から、破壊を免れた球体型のガジェットが現れる。咄嗟にレンとスバルが突っ込むが、ガジェットは高速でそれを回避しムサシに突進する。

「ムサシ君！」

《マスター！》

キャロとルットが叫ぶ。

ムサシは直後に来る衝撃に供え、顔を覆って目を瞑る。

『不意打ちとは卑怯な……』

その声に顔を上げると、まるで日本の武士を少しメカの様にした戦士が立っていた。同時に、ムサシの正面まで来ていたガジェットが爆発する。

咄然とするフォワード陣6人。戦士は剣を装着していない手を、ムサシに差し伸べる。

『大丈夫か、少年』

「あ、はい。ありがとうございます……」

礼を言いながらムサシはその手を借りて立ち上がる。ムサシは戦士を見上げ、自己紹介をする。

「僕、ムサシ・ハラウンって言います。よろしければ、お名前を……」

『宇宙剣豪……メカザム』

戦士、メカザムはそう名乗り、ムサシを見下ろす。
そんなメカザムの姿を見ながら、スバルとエリオは目をキラキラと輝かせて言った。

「カッコイイー!!」

ムサシも憧れの眼差しでメカザムを見上げていると、不意にメカザムが倒れ込む。

「え？ あの、メカザムさん!？」

ムサシの呼びかけにも応えず、ずっしりとムサシの腕に支えられるメカザム。

レンとスバルで支え、メカザムを機動六課まで連れて行く事にした。

——機動六課・デバイスルーム

ベッドの様な物に寝かされたメカザムが、何かの機会を通って検査されている。

モニターをいじくるシャーリーとリインをそわそわと見ながら、ムサシは尋ねる。

「シャーリーさん、メカザムさん大丈夫ですか？」

「うん……。現状何が良くて何が悪いかわからないっていうのが本音だけど……。けど、全ての機能は正常に稼動してるわ。すぐに目をさますでしょう」

「良かった〜……」

モニターとにらめっこしながらのシャーリーの言葉に、ムサシはほっと胸を撫で下ろす。

ガラス越しにメカザムを見ながら、ムサシはシャーリーに頭を下げる。

「シャーリーさん、メカザムさんの事お願いします」

「はいはい！ お姉さんに任せといて！」

「ちょっと！ リインにもちゃんとお願ひして欲しいですよぉ」

ムサシの言葉を聞いて笑顔になるシャーリーと、自分には何も言われていない事に少しご立腹な様子のリイン。

ぶんすかという擬音が聞こえてきそうなリインを見て、ムサシは慌てて頭を下げる。

「も、もちろんリイン曹長も頼りにしてますヨ！？」

「えっへへ」……とでも言うと思ったですか？」

慌てているのが見え見えのムサシの様子に、リインがノリツッコミを入れる。

あはは」と笑って誤魔化しながら、ムサシは即座にデバイスルームを後にした。

――次の朝

エリオに物理的に叩き起こされたムサシは、眠たい瞼を擦りながらも訓練服に着替えて演習場に出た。ナイトキャップを被ったままなのは内緒である。

「お、おまたせしましゅたっ！」

「ムサシ、帽子帽子」

目を瞑って涎を垂らしたままのムサシに、エリオがこっそり耳打ちする。

なのはは時計を見ながら、ムサシに苦笑いする。

「遅刻ギリギリだね。ホントなら少し厳しめに注意したいところなんだけど……」

涎を拭きながら帽子を取るムサシは、なのはの言葉に首を傾げる。これで既に6回目なので、そろそろ怒られると思っていたのだが……。

なのはがフォワード陣の後ろを見ると、2人の武士が歩いてきた。

「悪いが、今日のお前達は見学だ」

楽しそうにそう言って歩くシグナム。その後ろを、メカザムが歩く。

「メカザムさん！」

『む、あの時の少年か……。すまない、ご足労おかけした……』

「そんな！ 僕の方こそ、ありがとうございます！」

礼を言って頭を下げるムサシ。

そんなムサシに、メカザムはふと動きを止める。

『以前もその様な事を言っていたが……。ありが、とう……。とは？』

「え？ えっと……。誰かに何かをされて嬉しかった時にそう言うんです！」

『そうか……』

ムサシの説明に、頷きながら頭に手を翳すメカザム。機械的な音が鳴り、すぐに鳴り止む。

演習場に出たシグナムの反対側に立ち、右手の剣と左手にもう一本の刀を握る。

「二刀流か……。面白い！」

シグナムは歴戦の勇士を感じさせるメカザムに、ゾクゾクとした感覚が走る。

そして審判を勤めるのはを見た後、その横で見学しているフォワード陣を見る。その視線に気付いたなのは、振り向いて皆に声をかける。

「皆も、見てるだけじゃなくてしっかり何か盗んでね」

「……………はいっ！」「……………」

笑顔で言うなのは、フォワード陣も元気良く返す。
そして2人の武士は、お互いの刀を構える。

「烈火の将シグナムと、我が魂レヴァンティン……」

『宇宙の剣豪メカザムと、愛刀星斬丸……』

互いに名前と二つ名、そして刀の名前を名乗る。そして木の葉が地をかする音を聞いた瞬間、互いにはじけた様に動き出す。

「『参るっ！』」

・
・

・ ・
数分後、互いに満足したのか刀をしまう。
笑顔で握手した後、その場にムサシが駆け寄る。

「ルット〜!」

《了解》

シグナムの上に青い魔法陣が現れ、それがシグナムの体を上から下へ降りる。魔法陣が通った所から、傷が治っていく。

「ふう。相変わらずお前の魔法は心地良いな。シャマルを超えてるかもしれない」

「いやあゝ、それほどでも」

傷の癒えたシグナムに褒めながら撫でられ、ムサシは嬉しそうに微笑む。

そしてメカザムの方を振り向く。

「メカザムさんも!」

『いや、拙者はい』

そう言うと、メカザムは左の後頭部に触れる。すると傷付いた体が徐々に修復され、数秒も経たない内に完全に修復される。振り向いてどこかに去っていくメカザム。

「あの、メカザムさん？」

『定期的に帰ってこいと言われているのでな。少しばかり戻らせてもらっ』

そう言い残してデバイスルームに去っていくメカザム。
フォワード陣も隊社に戻り、デスクワークに勤しんでいた。

——その夜

演習場のベンチに座って夜空を見上げるムサシ。
コスモブラックを取り出して眺めていると、後ろから声をかけられた。

「なにしてるの？」

「スバルさん」

風呂上りの様な格好のスバルが、ムサシの横に座る。

「メカザムさんって……その……ロボットじゃないですか……。どこまで仲良くなれるのかなあって……」

人間でウルトラマンである自分と、検査の結果でも明かされた純粹なロボットであるメカザムとの間に微かな壁を感じていたムサシ。その言葉を聞いて、スバルは夜空に右手を翳す。

「大丈夫だよ……。少なくとも、ムサシなら……。ロボットでも、機械でも……。心がある相手となら、きっと分かり合えるよ」

そう言い聞かせるスバルは、どこか寂しげな表情をしていた。それを見上げたムサシは、心配そうにスバルを見る。

「あの、スバルさん……？」

自分が寂しそうな表情をしている事に気付いたスバルは、心配そうに顔を覗き込んでくるムサシの頭を、誤魔化す様に抱き締める。

「あははっ！ ゴメンゴメン！ とにかく、子供がそんな事気にしちゃダメ！ 分かった？」

「むごっ！？ わ、分かりますた……。と、とにかく話して下さい……」

「ん、ダメ！ ムサシ抱いてると落ち着くんだもん」

スバルの年齢の割りに発達した胸に顔を押し付けられ、少し息苦しそうに訴えるムサシ。

放してもらおうとするが、ムサシの抱き心地がツボに嵌ったスバルは気にする事無くさらに強くムサシを抱き締める。

そしてその手付きが怪しいものになんて変わった事に危機感を覚える。

「もがっ……っ！ す、スバルさん！ くすぐったいですよっ！
っていうかどこ触って……むごっ！」

「はあ、これもう最っ高……。かっわいいっ」

その後ムサシは、スバルの気の済むまで抱かれていた。

ちなみにスバルは、数分して駆けつけたフェイトにこっぴどく怒られましたとさ。どっとはらい。

——同じ頃

外で筋トレをしていたレンの下に、メカザムがやって来る。

「何の用だ？」

レンは人指し指での腕立て伏せを終え、メカザムの方を見る。

『……お主に、頼みたい事がある』

「あん？」

重々しく放たれたメカザムの言葉に、レンは聞き返す。
するとメカザムは星斬丸をレンに渡す。

『もし拙者に何かあったらその時は……拙者を殺してくれ』

突然のメカザムの頼み。それを聞いたレンは、鼻で笑って星斬丸を取って大地に突き刺す。

「何言ってんだお前は……」

そう言っ てメカザムに背を向け、隊社に去っていくレン。
その背中を見ながら、メカザムは声をかける。

『あの少年には……黙っていて欲しい』

それを聞き立ち止まるレン。だが振り返らずメカザムの言葉に答える。

「なんでだ？」

『あの少年は弱い……。甘すぎる。故に事実を知ってしまったとき……破損する可能性がある』

「はっ！ お前の目は節穴か。ムサシは弱くなんかねえ。むしろ誰よりも強え。お前も勝てないぐらいにな」

『……なぜだ？』

「あいつはいつも、誰かを守る為に戦っている。仲間だけじゃなく、相手も守りたいって思ってる。お前にはそれがあるのか？」

レンの言葉に、メカザムは押し黙る。
返事が無いのを理解したレンは、そのまま隊社に戻っていった。

――一週間後

メカザム本人も機動六課に慣れてきた頃、出勤命令を受けてフォード陣とメカザムは出動した。

クラナガンで暴走するガジェットと、その奥に赤いゴーヤの様な体の中心に目が付いたロボットが暴れていた。

「あれは……！ ラグストーン！」

ロボットの姿を見たムサシが叫ぶ。街を破壊するロボットを睨みながら、レンが前に出る。

「俺が行く！」

そう言ってウルトラゼロアイを取り出し、両目に装着する。

「デュワッ！」

レンの体が光に包まれ、次の瞬間ラグストーンの目の前に巨人となつて現れる。

そして残り6人がガジェットに向かっていこうとすると、ラグストーンから電撃が放たれる。それはメカザムに直撃し、後頭部のスITCHが破壊される。

『ぐあああああああああああああああああ！！』

「メカザムさんっ！」

悶えるメカザムに近寄るが、すぐに電撃が止む。

一瞬動きを止めたメカザムは、青い瞳を赤く発光させてムサシを見る。

『拙者ハ、皇帝ノ復活装置……』

「メカザム……さん？」

雰囲気ガラリと変わったメカザムに、ムサシはおずおずと声をかける。

メカザムは右手に剣を装着し、足元に星斬丸を突き刺す。そして剣をムサシに向け、ゆっくりと近付いていく。

『邪魔者ハ……排除スル』

「メカザムさん！」

迫ってくるメカザムに、声を荒げて叫ぶムサシ。
その瞬間、メカザムはムサシに剣を振り下ろす。

「っ！」

《set up!》

咄嗟にルットがセットアップし、浮遊して剣を受け止める。メカザムを弾き返し、ムサシの左腕に付いてバリアジャケットを生成する。

『ムサシ！ そいつを倒せ！』

ラグストーンを吹き飛ばしたゼロが、ムサシにそう声をかける。

「なっ！ 何言ってるんですか！」

『そいつは……、メカザムは！ お前に一番心を開いてる。お前が

やらなきゃ いけねーんだ!』

ゼロの声が聞こえたスバル達は、メカザムをムサシに任せガジェットの殲滅に向かう。

ムサシは膝を震わせながらメカザムを見る。

『排除……排除……』

機械的に繰り返しながら、ゆっくりと迫ってくるメカザム。それを見て、ムサシはゼロを見上げる。

「でっ、できませんよ! メカザムさんだって……僕達の仲間なんです……」

『甘ったれてんじゃねえ!』

ムサシの言葉に、ゼロが怒鳴り散らす。その声にビルが震える。それを聞いてムサシは唇を噛み締め、コスモブラックを手元で発光させる。

一瞬で青い光に包まれ、メカザムと同じ大きさのコスモスに変身する。そして腕を広げ、左手の光を右手で押し出す。

『ンンッ!』

フルムーンレクトが、メカザムの体を包み込む。その光に一瞬メカザムは動きを止めるが、再び動き出す。

『排除ッ！』

メカザムは突進してくる。コスモスは再び右手を押し出し、フルムーンレクトを放つ。

『バカ！ ロボットにフルムーンレクトは聞かねえだろっ！』

コスモスの行動に、ゼロがラグストーンを蹴り飛ばしながら叫ぶ。それでもムサシは、フルムーンレクトを止め様としない。

『メカザムさんにも、心がある！ きつと、きつと通じ合える！』

「ムサシ……」

その言葉を聞きながら、スバルが心配そうに呟く。
だがメカザムは無常にも、コスモスに剣を振り下ろす。

『ジュアッ……』

左肩から火花を散らし、コスモスが膝を突く。

『メカザム……さん……』

なおも呼びかけ続けるコスモスの右脇腹を斬り付ける。傷口から光が漏れていく。

『あなたも……仲間なんです……だから……！』

『……排除オオオオオオオオ！』

そう叫んで剣を突き刺そうとしてくるメカザム。コスモスは両手でそれを受け止める。抑えてる手、斬られた部分から光が漏れていく。その一部が、メカザムの破損した部分に入り込む。

『っ！』

その瞬間、メカザムの脳裏にいくつかの記憶が蘇る。

——メカザムさん！

『拙者ハ……、皇帝ノ復活装置……』

——仲間を助けるのは当然の事だ！

『拙者ハ……』

——これが……という、事なのだ……。――

『皇帝ノ……』

——我はザムシャー……。――

『メカザムさん！』

コスモスの呼びかけに、メカザムの動きが止まる。

だがその瞬間、ラグストーンが光弾をコスモス目掛けて放つ。メカザムの動きが止まった事に啞然としているコスモスはそれに気付かない。

『っ！　くっ！』

途端にメカザムがコスモスを覆う様に立ち、その光弾を背中に食らう。

『ぐうつ……』

『メ、メカザムさん！』

両目を点滅させ苦しむメカザム。メカザムに手を伸ばすが、その手はメカザムに掴まれる。そしてメカザムはコスモスの肩に手を乗せる。

『これが……、守るという、事なのだ……』

『えっ……？』

『……頼む』

メカザムはそうコスモスに頼み込む。

その奥で、ゼロがツインシユートを放ちラグストーンを破壊する。ゼロはレンに戻り、スバル達もガジェットを殲滅し2人を見る。

メカザムはコスモスから数歩離れ、両腕を広げる。

コスモスはしばらく両手の拳を握り締め、ゆっくりと立ち上がる。右腕を振り上げ、コロナモードにスタイルチェンジする。

『メカザムさん……』

『ああ……』

コスモスは拳を強く握り締め、空に向かって吼える。

『うあああああああああああああああああああああ
あ！……』

全身に炎を纏い、メカザムの両肩を掴む。

『ムサシ……』

『コズミック……』

『ありがとう……』

『ダイナマイトおおおおおおおおおおおおお！……』

コスモスが力を入れると、メカザムが爆発を起こして消滅する。
硝煙の中、膝を突いて涙を流すムサシがポツリと残されていた。
ムサシは星斬丸を引き抜き、その刀身に自身の顔を映す。

「メカザムさん……。さよなら……」

――次の朝

ムサシを除いた5人が、演習場に集まっていた。

「ムサシ君、来ませんね……」

「あんな事があつた直後だからね……。無理も無いかも」

キャロの呟きに、なのはが補足する。

重い空気が流れる。すると隊社の方から声が聞こえてくる。

「すみませ〜ん！ 遅れましたっ！」

ムサシが叫びながらフォワード陣の方へ駆け寄る。

そしてエリオの横に立ち、膝に手を当てて息を整える。

「ムサシ、大丈夫なの？」

「うん。ちょっと作業してたけど……」

第12話 ムサシとメカザム（後書き）

さてさて、2話連続でちょっと重い話でしたが、いかがでしたでしょうか。

次回は機動六課のある休日編をやるうと思ってますが、1話に纏めようかなと考えています。

まだ未定なので、今回は予告無しです。

それでは、次回もよろしくお願い致します。

どうでもいいですが、まど マギは映画化決定だそうですね。
しかも3本予定……。

第13話 ライトニングの休日（前書き）

結局2話構成になりました。

第13話 ライトニングの休日

——機動六課・演習場

「皆、お疲れ様！」

「…………おっ疲れ様……でしたあ……」

笑顔でそう言うなのはの前で、ぐったりとした様子のフォワード陣が疲れた声で返す。

6人で反省点等を話していると、ふとなのはが呟いた。

「でね、実は何気に今日の模擬戦が、第2段階クリアの見極めテストだったんだけど……」

「…………えっ！？」

「……にやんですとっ！？」

さらに続けたなのはの言葉に、スバル、ティアナ、エリオ、キヤロが素っ頓狂な声を上げる。その後にムサシとレンが馬鹿っぽく叫ぶ。

するとなのはがフェイトの方を見る。

「どうでした？」

「合格っ！」

「「はやつ！」」

なのはが尋ねると、フェイトが間髪入れず笑顔で答える。それに素早くツツコミを入れるスバルとティアナ。

するとフォワード陣の背後で、アイゼンを肩に担いだヴィータが厳しく漏らす。

「ま、こんだけみつちりやって、問題あるようなら大変だってこつた」

「「あ、あはは……」」

「「デスヨネ……」」

ぐったりとしているフォワード陣を見下ろしながら言ったヴィータの言葉に、エリオとキャロが乾いた笑いを漏らす。その後が続いてムサシとレンが口元を引き攣らせながらそう言った。

そんなフォワード陣を見ながら、再びなのはが優しく微笑む。

「私も皆良い線いってると思うし、じゃあ、これにて2段階終了！」

「良かったあ……」

なのはの言葉を聞いた後、ムサシがほつと胸を撫で下ろす。

というのも、彼のポジションはF^{フルガード}Gという完全なる防御担当なのである。主にキャラの周囲を旋回し、彼女に接近する外敵の攻撃を全て防ぐ事が仕事である。だが最近ではキャラもフリードの扱いに慣れてきたのか、攻めに回る事が多くなってきた。そして前線に出してしまうと防ぐ対象が多いという事と、そもそも全員が回避にも慣れてきた事もあって、やる事が無くなってきたのだ。

ルットの第2形態は少し攻撃的なデザインになっているらしいので、ムサシは早く第2段階に行きたかった様だ。

「デバイスリミッターも1段解除するから……後でシャーリーのところにやってきてね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練するからな」

フェイトが言うのに続いて、ヴィータがぶっきらぼうに言った。
そのヴィータの言葉を聞いて、ムサシがある事に気付く。

「明日……?」

それを聞いて、ヴィータがニヤリと笑みを浮かべる。

「今日は私たちも、隊舎で待機する予定だし」

「皆、入隊日からずっと訓練漬けだったしね……」

なのは、フェイトと続ける。

何を意図しているのかが薄々分かってきたフォワード陣は、まさかという顔で次の言葉を待っている。

「ま、そんなわけで……」

「今日は皆、一日お休みです！」

「……いやったあああああああああああああああああああああああ
あああ！」「」「」「」

ヴィータがじらし、なのはが笑顔でそう告げる。

それを聞いたフォワード陣は、先程の疲れた様子はどこへやら。勢い良く立ち上がった空に向かってそう叫んだ。

こうして、機動六課フォワード陣の休日が始まったのだった。

ウルトラマンコスモスStrikers
第13話 ライトニングの休日

——同・隊社

私服を着たエリオとムサシは、フェイトに周辺のチェックを受けている。

「ん……。あ、エリオはまだこの辺が跳ねてるね……。ムサシも、襟が曲がってる……。あ、ささくれまである……」

「あ、あの、フェイトさん……」

「エリオはともかく、僕はもう子供じゃないんですから……」

「そう言ってる内はまだ子供」

フェイトは少し遠目に2人を見た後、くしを取り出してエリオの髪を撫でる。そしてムサシの服を正し、指にあった小さなさくれを爪きりで切る。

そんな過保護な姉兼母に見た目の乱れを直され、幼い少年2人は少し恥かしそうにする。

ムサシはエリオを出汁にして反論するが、あっけなく碎かれる。その後も小遣いを渡そうとしてきたりするフェイトに戸惑っていると、慌ててキャラが駆けてきた。

「すみません、お待たせしました」

そう言ってフェイトの横に並ぶキャラ。出会ったときの民族衣装とは違い、ピンクの上着に白いワンピースの可愛いコーディネートになっている。ちなみにエリオとムサシはそれぞれ赤と青のシャツに、白いパーカーを羽織るというもはやペアルックとなっていた。

「どうですか？」

「うん、可愛いよキャラ」

「うんうん！ すっごく似合ってるよ！」

クルツと3人の前で回るキャラ。それを見たフェイトとムサシが、手を叩きながらキャラを褒める。エリオにいたっては、キャラを見たまま顔を赤くして硬直している。

そんなエリオを見て、キャロも薄っすらと頬を染めながら言った。

「エリオ君も似合ってるよ?」

「へっ!? あ、うん……。ありがと、キャロ……」

恥かしくなったのか頬を掻くエリオに、ムサシがこっそり耳打ちする。

「ほら、エリオも何か言わなきゃ」

「わ、分かってるよ……」

ムサシに指摘されて、キャロを下から上に眺めるエリオ。

「キャロもか、可愛いよ……」

「うん! ありがと、エリオ君」

そう微笑ましいやり取りをするエリオとキャロ。そしてムサシは、再びエリオに耳打ちする。

「もう少し気の利いた言葉は無かったの……?」

「う、うるさいなあ！」

――機動六課・隊社前

エリオ、ムサシ、キャロの3人は、フェイトとなのはに見送られていた。

「あんまり危ない所に行っちゃダメだよ？ 車にも気をつけてね？ あ、定期的に連絡するのも忘れないでね。それから……」

「にやはは……。フェイトちゃん、心配すぎ。ムサシはともかく、エリオもキャロもしっかりしてるんだから」

「なのはさん、それどういう意味ですか？」

今田に3人を心配するフェイト。そんなフェイトに、なのはが苦笑いしながら正論を言う。だがそのなのはの言葉が引っ掛かったムサシが指摘するが、なのはは華麗に流した。

「じゃあ3人とも、気をつけてね？」

「「はいつ！」」

「は……い……」

少し屈んで言ったなのは言葉に、エリオとキャロが元気良く返す。ムサシも不貞腐れながら返す。そして3人は、仲良く並んで歩き出した。

——駅前

レールウェイの駅に着いたムサシ達は、ストラーダに転送されたメイドインシャーリーのプランを3人で見ていた。

「えつと……まずはレールウェイでサードアヴェニューまで移動。市街地を散歩……」

「ウィンドウショッピングや、会話等を楽しみ、食事はなるべく雰囲気良く、会話の弾みそうな場所……」

「そしてその後は映画……できればラブロマンスを見て、最後は海に沈む夕日を見る……。ついでに、西の空に明けの明星が輝く頃に

は帰ってくる様に……か」

エリオ、キャラ、ムサシの順でストラダに転送されたデートプランを読み上げる。そして、固まる。

意味を理解していないエリオとキャラはただ首を傾げるだけ。そしてムサシは、妙な居心地の悪さを感じていた。

というのも、これは確実にデートプランだ。本来なら男1：女1で行くべきなのかも知れないが、残念ながら現状は男2：女1である。

そしてエリオとキャラはチームメイトであるムサシから見ても良いカップル……というか良いコンビである。今の見た目的にはエリオとムサシがカップルなんじゃないかと思われてしまいそうだが。

「……と、とりあえず、電車乗ろっか」

「うんっ！」

ムサシがそう言った後、エリオとキャラが元気良く返す。

その後ろから、なにやら三角形の黄色いメガネを通して3人を見る影が一つ。レン・モロボシその人である。

黄色いジャケットにジーンズを履いた派手な格好のレンが、ウルトラゼロアイを通して3人を観察していた。

「……対象移動。これより尾行を続行する」

「何してんのよあんたは」

「あばんっ！」

ブツブツ呟いていると、後ろからいかにもツンデレっぽい少女がレンの後頭部を殴る。

レンが振り返ると、私服のティアナとスバルが変なものを見る目でレンを見ていた。

「レン、何してるの……？」

「なっ！ お前等、何で俺の変装が分かった！？」

「どこが変装よ……」

スバルの質問に、レンが驚きながら返す。ティアナの呆れたツツコミが入り、レンは慌てて3人を探す。

だが既にムサシ達はおらず、レンはその場に両手を付いて落ち込んだ。

「しまった……。この俺がミスをするなんて……」。

ちくしょあ……。ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

なぜか拳を握り締め、人目も気にせず泣き叫ぶレン。

「……もういいわ行きましょう」

「だね……」

ティアナとスバルは冷たくレンを一瞥し、その場から去っていった。

しばらく膝を突いていたレンは、何事も無かったかのように立ち上がって膝を叩き、ウルトラゼロアイをしまってテクテク歩いていた。

いったい彼は何がしたかったのだろうか……。

——レールウェイ・車内

エリオの隣にキャロ、エリオの正面にムサシと、その横にカバンという布陣で3人は座っていた。

「初めて遊園地に連れて行ってもらったときは、凄く楽しくて、楽しすぎて……。だけど、日がくれて楽しい時間が終わっていつちゃうのが悲しくて。それでちょっと泣いちゃって……」

「うん、なんだかよく分かる……。前日は楽しくて眠れなくて……。」

遊び終わった日は、ずっと寂しくて……」

「エリオ、ずっと駄々こねてたもんね」

キャロが始めてフェイトとその使い魔アルフに連れて行ってもらった遊園地の事を思い出し、エリオも同様にムサシと行ったときの事を思い出す。ムサシも同調するが、またもエリオの古傷を暴く。それにエリオが憤慨する、というやり取りをしていると、キャロがふと呟く。

「フェイトさん、自分も辛い思いしてた筈なのに……。いつも私達の事考えててくれるんだよね……」

「うん……。もう寂しい思いはさせないよって……」

少ししんみりした様子で、辛い過去のあるキャロとエリオが呟く。そんな2人の言葉を聞きながら、ムサシは窓の外を眺めながら呟く。

「辛さのを思い出しちゃう記憶と、記憶を思い出せない辛さ……。どっちの方が辛いのかな……」

その言葉に、エリオとキャロがはっとなってムサシの方を見る。全く感情の籠っていない、何を考えているとも分からないムサシの横顔に、罪悪感が積もっていく。

「ごめん、ムサシ……」

「私達、その……」

目を伏せて謝る2人を、ムサシは驚きながら見る。そして小さく笑みを漏らし、こっそり目元を拭って2人に言う。

「いや、そうじゃなくて……。その辛いのも、全部全部優しく包んでくれるフェイトさんって、凄いなあって……」

ムサシの明るい声を聞き、2人は顔を上げる。そしてしばらく楽しく談笑し、サードアベニューまで笑いが耐えなかった。

——サードアベニュー

第一目的地に到着したムサシ達。するとルットに、スバルからの通信が入る。

『やつほー!』

『そっちはどんな感じ?』

大量のアイスの山を頬張りながらスバルが元気良く腕を上げる。
その後のティアナの言葉に、エリオが返す。

「えっと、予定通り公園で散歩して、これからデパートを見て回って……っな感じです!」

「その後、食事して映画見て、夕方には海岸線の夕焼けを眺める!」

「西の空に明けの明星が輝く頃には帰る、ってプランです!」

『「はあ?」』

エリオの説明に、キャラが補足する。そしてムサシが帰るまでの事続けて説明する。

そんな3人に、ティアナとスバルが素っ頓狂な声を上げる。崩れそうになったアイスの山を、慌てて頬張るスバル。

「ちゃんと順番にクリアしていきます!」

『クリアって……。あの子達はまあ……』

『まあ、健全だあ……』

『だな……』

エリオが明るく答える。ティアナとスバルは苦笑いしながらも、変なプランではなかった事に内心安心する。まあ十分変なプランなのだが。そして2人の後ろに一瞬レンが湧いてきたとき、通信は切られた。

そうして仲良く3人で歩いていると、不意にムサシが足を止める。

「ムサシ君？」

「何か……聞えない？」

「……ホントだ。ゴリッていうか……ガリッていうか……」

キャラが振り向きながら聞くと、ムサシは目を瞑って返す。エリオも耳を澄まし、同様に聞き取れた音を口で表現する。

そんな2人に首を傾げながらも、キャラは2人の次の行動を待つ。

「ルット！」

《その角を右です、マスター》

ルットに案内され、3人はその場所に走る。

ビルとビルの間に行くと、ボロボロの布を身に纏った金髪の幼い

少女が倒れていた。その脚には鎖が繋がれ、その先にはさもロスト
ロギアが入ってそうなケースがあった。

「なっ!?!」

ムサシが慌てて駆け寄り、回復魔法をかける。

「キャラ、レリックお願い! エリオ、皆に連絡して!」

「「分かった!」」

ムサシの言葉に、エリオとキャラがすぐさま反応して動き出す。
エリオは機動六課の全員に通信を繋ぎ、慌てつつも冷静に言った。

「こちら、ライティング3! 緊急事態につき、現場状況を報告し
ます!」

青いゲート、『トウウィンクルウェイ』を通って、レオとアスト
ラが怪獣墓場に降り立つ。

『遅かったか……』

そこには、瞳とカラータイマーから輝きを失った『ウルトラマン』
。同じく両眼と、額のビームランプから輝きを失った『ウルトラセ
ブン』が無残に横たわっていた。

レオは悔しそうに拳を握り、犯人であろう男の名を呟く。

『ベリアル……』

背を向けて再びレオとアストラが飛び立とうとすると、不意に背
後から声がした。

『レオ……兄さん……！』

その声に、レオとアストラが振り向く。するとそこには、カラー
タイマーを微かに点滅させる赤と銀の戦士、『ウルトラマンメビウ
ス』がゆっくりと立ち上がっていた。

『メビウス……』

『僕も……一緒に、行きます……!』

傷付きながらも同行しようとするメビウス。だがレオはそれに首を振る。

『ダメだ。お前はここで、隊長……兄さん達を見ていてやってくれ』
『けどっ!』

レオがメビウスを静止し、それにメビウスが反論する。
すると怪獣墓場の上空に、虹色の光のウィルスが出現する。

『カオスヘッダー!?!』

アストラが驚くのも束の間、カオスヘッダーはウルトラマンとセブンに憑依していく。

そして2人の体が銀と黒に変わり、禍々しい赤いラインが入る。
眼も赤くなり、『カオスロイドU』、『カオスロイドS』として立ち上がる。

レオとアストラが身構えるが、カオスロイド達は気にせずどこかに飛び去っていく。

『待て!』

それをレオとアストラが慌てて追いかける。メビウスも追いかける様としたが、全身に激痛が走りその場に膝を突く。

『クソッ……！』

悔しそうに地面を叩くメビウス。するとメビウスの背後に、別のカオスロイドが出現する。

『っ！ タロウ兄さん……？』

同じく銀と黒に赤いライン、赤い眼の禍々しい姿となった『ウルトラマンタロウ』、『カオスロイドT』が現れた。

その手には、ウルトラの星の三大秘宝と言われる『ウルトラキー』と、『ウルトラベル』が握られていた。

その二つを体内に吸収するカオスロイドT。メビウスはゆっくりと左腕の『メビウスブレス』に右手を翳し、光の剣、『メビュームブレード』を出現させる。

『タロウ兄さんは……僕が助ける！』

メビウスの菱形のカラータイマーが早鐘を打つ中、メビウスは変わり果てた師匠に向かって構えた。

第13話 ライトニングの休日（後書き）

次回予告

レン

「行くぜ！」

ルーテシア

「……お願い、サタンビートル、インセクタス」

マホロバ

「また君……？」

ムサシ

「君を光で……僕が君の光になる！」

メビウス

『僕じゃ、ダメなのか……』

次回、ウルトラマンコスモス！

【光を胸に】

少年達は再びぶつかり合い、赤と銀の戦士は立ち上がる……！

第14話 光を胸に（前書き）

結局メビウス回にwww

第14話 光を胸に

エリオが全体に通信を出してから数分。
近くをブラブラしていたレン、ティアナ、スバルが合流した。

「ケースの封印処理は？」

「キャラがしてくれました。ガジェットが見つける心配はないと思います。……それから、これ……」

ティアナの質問に、エリオが答える。その横ではムサシが少女を膝に乗せ、隣でキャラが心配そうに見つめている。

エリオは答えた後、ケースと繋がっている鎖を見せる。

「ケースはもう一個あった……？」

「今、ロングアーチに調べて貰ってます」

「おいおい、んなのんきな事言ってる場合なのか……？」

ティアナの呟きに、エリオが頷きながら返す。レンは訝しげにケースを見てそう漏らす。

スバルはムサシとキャラの方に近寄り、少女の様態を見る。

「隊長たちとシャル先生、リン曹長がこっちに向かってくれるそうだし……。とりあえず、現状を確保しつつ、周辺警戒ね」

「だな」

ティアナとレンが互いの顔を見合い、そう結論を出す。ムサシとキヤロが少女を見つつ、他の4人は周辺を警戒していた。

・ ・ ・ ・

それから数分後、ヘリからなのは、フェイト、シャルが降りてくる。

ムサシとキヤロは少女をシャルに預け、ティアナ達に知らせる。

「ケースと女の子は、このままヘリで搬送するから……。皆はこっちで現場調査、お願いね！」

「……………はいっ！」「……………」

なのはの言葉に、フォワード陣6人が元気良く答える。

なのは達が戻っていくのを見送った後、ムサシ達は互いに顔を見合わせてデバイスを構える。

「皆、少ない休みは満喫した？」

「お仕事モードに切り替えて、ちゃちゃっと終わらせちゃおう！」

「「はいつ！！」」

「怪獣が出ない事を祈るばかりだな……」

「ですね……」

ティアナが全員に尋ねた後、スバルが元氣付ける様にそう言った。
エリオとキヤロがそれに明るく返し、レンはムサシと顔を見合
わせてウルトラマン同士の会話をする。

そして全員が顔を見合わせ、叫ぶと同時にデバイスを掲げる。

「「「「「「セツト・アップ！！」」」」」」

眩しい光を放ち、6人はその身にバリアジャケットを纏った。

ウルトラマンコスモスStrikers
第14話 光を胸に

――地下水道

フワード陣は走りながら、ギンガ・ナカジマ、はやてと通信を
繋いでいた。

そんな中、エリオが呟く。

「ギンガさんって……スバルさんのお姉さんですよネ？」

「そう！ 私のシューティングアーツの先生で、歳も階級も二つ上
！」

「へえ〜」

エリオの質問に、スバルが嬉しそうに答える。エリオの隣で走り
ながら、ムサシが感心した様に声を上げる。
するとデバイス越しにギンガの声が聞こえる。

『私が呼ばれた事故現場にあったのは、ガジェットの残骸と壊れた生体ポッドなんです。ちょうど5、6歳の子供が入るくらいの……』

ギンガの説明に、ムサシの表情が変わる。

生体ポット、5、6歳の子供が入る大きさ……。間違いない。あの少女の事だろう。

意味を理解したムサシは、走りながら拳を握り締めた。

『近くに何か……。重いものを引きずって歩いたような跡があつて……。それを辿っていこうとした最中、連絡を受けた次第です』

合流にいたるまでの経緯を説明するギンガ。続けてギンガがポットの事を語る。

『それから、この生体ポッド……。少し前の事件で、よく似たものを見た覚えがあるんです……』

『私も、な』

ギンガの言葉に、はやてが同意する声が聞こえた。
フォワード陣は黙って走り、次の言葉を待つ。

『人造魔道師計画の……、素材培養機……』

「なっ!？」

ギンガが続けて言った言葉に、ムサシが驚きに声を漏らす。その声は、反響してどんどん小さくなっていく。

そして、再びギンガが話し始める。

『これはあくまで推測ですが……。あの子は人造魔道師の素材として、作り出された子供ではないか、と……』

ギンガの言葉を聞いて、その場が思い沈黙に支配される。

特にスバルとエリオが表情を暗くする。

そんな中、キャラが一つ質問をする。

「あの、人造魔道師って？」

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に、投薬とか機械部品の埋め込みで、後天的に強力な魔力や能力を持たせる……。それが、人造魔道師」

キャラの質問に、スバルが無表情で饒舌に喋る。

それを聞き、エリオの表情がますます暗くなる。それを見たムサシは、そっとエリオの肩に手を置く。

「倫理的な問題はもちろん、今の技術じゃどうしたって色んな無理が生じる。コストも合わない……」

「だから、よっぽどどうかしてる連中でもない限り、手え出したりしねえ技術のはずなんだけどな……」

ティアナとレンが、続けて補足する。

すると、正面から無数のガジェットが出現する。

フォワード陣は沈黙もそこまでにし、目の前のガジェットを殲滅する事に集中する。

[illegible]

ムサシが左腕からルットを外し、ブーメランの様にして投げる。ルットは大きな孤を描き、ガジェットを全滅させてムサシの左腕に戻る。

そうしてガジェットを殲滅していると、地下水道の壁が破壊され

その奥から、紫の長い髪に白いリボンを付けた女性が現れた。

「ギン姉え！」

「ギンガ・ナカジマ、合流しました！」

そしてギンガは近くに居たムサシに微笑んだ後、全員を見渡して言った。

「一緒にケースを探しましょう。ここまでのガジェットは、ほとんど、叩いてきたと思うから！」

「うん！」

ギンガの言葉に、スバルが元気良く返す。
そうして、フォワード陣にギンガを加えた7人は再び走り出した。

・ ・ ・ ・

少し広い場所に出て、レリックを探す。
するとしばらくして、キャロが嬉しそうに声を出す。

「あつた！ ありましたよ！」

全員がそこに駆け寄る。だがその瞬間、黒い何かが迫ってきた。

「キャロ！」

ムサシが叫ぶと同時に、ルットを構えてキャロの前に立つ。ムサシは黒い何かの攻撃を食らい、大きく吹き飛ばされる。

「くあっ！」

「ムサシ君！」

キャロの意識がムサシに向いた途端、黒い何かはキャロの手からレリックを奪う。

黒い何かはその場から離れ、紫の髪の少女に近づく。

「あ、君！」

その少女、ルーテシア・アルピーノを見て、ムサシが声を上げる。
ルーテシアもムサシに気付く。

「……あ、あの時の……」

どうやら彼女も覚えているようだ。そんな中、ルーテシアの横に1人の少年が平らな剣を持って現れた。ホテル・アグスタで奪ったものである。

「また君……？」

「君は……！」

ムサシを見て、少年はため息をつく。ムサシはコスモブラックを取り出し、少年もブラックスパークレンスを取り出す。互いにどちらからとも無く、道具を開いて発光させる。

「コスモオオオオオオオオオオオス！」

「……」

互いに人間大のコスモス、ティガダークに変身し、ぶつかり合う。すると紫の髪の少女が、召喚魔法陣を足元と地上に展開させる。

「お願い……、インセクタス、サタンビートル」

その瞬間、地上に2体の昆虫系怪獣が現れて暴れ始める。レンがウルトラゼロアイを取り出すが、コスモスが止める。コスモスはティガダークから離れ、召喚魔法陣を展開する。

『我が下に来よ、心優しき怪獣達……。リドリアス！ ゴルメデ！』

すると地上にリドリ阿斯とゴルメデが出現する。
リドリ阿斯はサタンビートルに、ゴルメデがインセクタスに突進した。

——怪獣墓場

カラータイマーが激しく唸る中、メビウスのメビュームブレードと、カオスロイドTのウルトラキーが激しくぶつかり合う。
が、途中でメビウスが押し負け、メビュームブレードが折れる。
カオスロイドTがメビウスの腹部を蹴り飛ばし、メビウスは大地を転がる。

『くっ……、そっ……！』

カラータイマーがさらに早鐘を打ち、メビウスの全身に激痛が走る。立ち上がろうと脚に力を込めるが、すぐに倒れてしまう。

『僕じゃ……、ダメなのか……？』

諦めかけるメビウスに、カオスロイドTがウルトラキーを向けてきた。

それを最後に、メビウスの意識は途切れた。

沈む意識の中、メビウスの脳裏に地球での出来事が走馬灯の様に過ぎってくる。

ウルトラの父に選ばれ、ディノゾールを倒してGUYSに入り、俺達の翼を描き、ボガール、ツルギことヒカリと出会い、絆を深め、その身にファイヤーシンボルを描き……。

数々の思い出が、メビウスの心いつぱいに広がっていく。

『……ごめんなさい、皆さん……。僕は……』

悔しそうにメビウスことヒビノ・ミライが呟く、その目尻から、一粒の雫が漏れる。

——……イ！

そんな中、ミライの耳に聞きなれた声がする。

——…ミライ！

ミライはその声を聞き、はっとなって声を上げる。

——ミライい！

『この声…まさか！』

その瞬間、メビウスの意識が引き戻される。

——怪獣墓場

ウルトラキーの引き金を引こうとするカオスロイドTの足元に、青白い光線が当たる。それに怯み、カオスロイドはウルトラキーを手放す。

メビウスは顔を挙げ、光線が来た方を向く。その目には、見慣れた飛行体が映った。

『あれは…、ガンフェニックス！？』

その中から、先程の声がした。

『ミライイイイイイイイイイイイイイイイイ
！！』

『この声……！ リュウさん！！』

ガンフェニックスから声を聞き、メビウスは嬉しそうに叫ぶ。
メビウスの前を通るガンフェニックス。その中には、かつての仲間達が乗っていた。

『皆さん、どうしてここに！？』

メビウスの言葉に、再びガンフェニックスから声がした。

『アミーゴ！ 仲間のピンチに來ない奴がいるか！』

『ジョージさん……』

ジョージの言葉に、メビウスが感動した様に呟く。

『ミライ君の声、ちゃーんと聞えたよ!』

『マリナさん……』

続けて言ったマリナの言葉に、再びメビウスが嬉しそうに呟く。

『今まで僕達は、ミライ君に助けられてきた……』

『だから今度は、私達がミライ君を助ける番!』

『テッペイさん……コノミさん……』

テッペイ、コノミの言葉に、メビウスは嬉しそうに目元を拭う。

『ついでに、こいつも一緒だ!』

リュウの右腕には、青いブレスレットが付いている。大事な戦友、ウルトラマンヒカリの『ナイトブレス』だった。ガンフェニックスは着地し、メビウスに叫ぶ。

『行くぜミライ!』

『はい!』

メビウスはメビウスブレスのサークルを回し、リュウはナイトブレスから剣を抜いて再び入れる。
そして全員が腕を掲げて叫ぶ。

「「「「「メビウウウウウウウウウウウウウウウウウウス!!」」」」」

その瞬間、巨大なメビウスの輪が出現し、メビウスの姿が変わる。赤と青を基調とした、フェニックスの様なデザイン。『ウルトラマンメビウス・フェニックスブレイブ』に変身した。

そしてメビウスは、カオスロイドの攻撃を弾きながら突進する。そして体内に手をつ込み、中のウルトラベルに光を込める。

『兄さん、今助けます!』

メビウスとヒカリ、そしてGUY'Sの皆の光が強くなり、カオスロイドを包み込む。

やがて光が晴れ、力尽きた様にウルトラマンタロウが倒れる。

『兄さん……』

メビウスはそっとタロウを寝かせ、変身を解いた。

ミライはGUY'Sの面々と顔を見合わせ、涙ぐむ。だがすぐに目つきを変え、宇宙を見上げる。

「すみません皆さん、僕は行かなきゃいけないんです……。それでその戦いに、皆さんを巻き込むわけにはいかないんです……」

どこか寂しそうに俯くミライ。その肩に、リュウの手が置かれる。

「ミライ……。行けよ。行ってお前の強さを、ウルトラマンメビウスの強さを！ 兄弟達に見せつけてやって来い！」

「リュウさん……」

そう言うリュウに、ミライは顔を上げる。そしてジョージ、マリナ、テッペイ、コノミの笑顔を見る。

そして最後にリュウを見ると、リュウは表情を変えて姿勢を正す。

「ミライ！ GUY'S、sally go！」

ミライも表情を変え、姿勢を正す。

「G I G !」

そしてミライは背を向け、メビウスブレスのサークルを回して掲げる。

「メビウウウウウウウウウウウウウウウウウウウス!!」

ミライはウルトラマンメビウスに戻り、少しだけリュウ達を見て飛び立っていった。

その背中を見ながら、リュウは呟く。

「いつの間にか、でかくなりやがって……」

第14話 光を胸に（後書き）

次回予告

コスモス

『くっ……っ』

ティガダーク

『弱い……っ』

レン

「あぶねえ！」

ティアナ

「あれって……？」

レン

「スフィア……？」

次回、ウルトラマンコスモス！

【決着の空】

その空に、悪しき雲が現れる……！

第15話 決着の空

——地下水道

コスモスは左腕にルットを装着し、ティガダークが振るう剣『ヤミナギノツルギ』による斬劇を防ぐ。

ブループラネットとヤミナギノツルギが押し合う。焦りを感じたティガダークは、鋭く脇腹を蹴り飛ばす。

『ぐっ……！』

コスモスは右脇腹を抑え、呻き声を漏らして壁に激突する。

めり込んだ壁から頭を振って抜け出し、乳白色に光る両眼でティガダークを見る。

（相手はガンガン攻めてくる……。こっちの守りが追いつかないくらい速く……。だったらこっちも、守ってばかりじゃダメだ！）

守りを捨て攻めに転じる事を決意したコスモス。右腕を真上に伸ばし、ゆっくり振り下ろす事で、『コロナモード』へとスタイルチェンジする。

コロナモードになったコスモスは、左腕に付けた円形の盾、『ブループラネット』に指示を出す。

『ルット！ フォルムツヴァイ！』

《よろしいのですか？ マスター》

『今はこれしかない……。コロナモード、スタンバイ！』

《……了解。フォルム？、コロナモード、起動します》

ブループラネットが輝いた瞬間、コスモスの乳白色の目が淡い赤色に変わる。そして盾型だったルットが輝き、柄に太陽を模ったエンブレムの付いた剣に変化する。

『ブループラネット・コロナモード』を右手に握ったコスモスはだらりと腕を下げて力を抜く。

ティガダークが構えた次の瞬間、コスモスはティガダークの眼前に迫っていた。

『っ！』

ティガダークが反応する間もなく、ブループラネットの刃先が消える。刹那、橙色の光と共にティガダークのプロテクターから火花が散り、極太の柱に激突する。

『くっ……』

「捕らえよ、凍てつく足枷！ フリーレンフェッセルン！」

リインも魔法陣を右手に展開し、ルーテシアとマホロバ、そして
「ユニオンデバース」赤い融合騎『アギト』を氷の中に封じ込める。

「ふう……」

「す……」

一息つくヴィータに、スバルが思わずそう漏らす。5人がかりで
ようやくまともにやり合えていたガリユを、ただの一撃でぶっ飛
ばしてしまったのだから。

そしてその視界に、キャロの膝の上で荒い呼吸をするムサシを見
る。

何か言おうとして口を開いた瞬間、足元が揺れる。

「なに！？」

「どうやら上でだけえ事でもやってんじゃねえか？ だつたら俺の
出番だぜ！」

どこか楽しそうにレンが吼える。ヴィータやリインが静止する間
も無く、レンはウルトラゼロアイを取り出して両目に装着する。

「デュワッ！」

その掛け声と共に、レンの体が光に包まれる。

次の瞬間、レンはウルトラマンゼロとなって地上に飛んでいった。

「うつそお！？」

驚くギンガを無視し、ヴィータが指示を出す。

「ったくあいつは……。まあいい！ スバルとギンガが先に行け！
次にエリオとティアナとキャロ、最後があたしとリインだ！ それから……」

指示の最後、ヴィータは息も絶え絶えになっているムサシに肩を貸して立たせる。

「こいつだ」

そしてスバルとギンガがウイングロードで先に地上へ出る。続けてエリオ達が上がり、ヴィータはムサシを担いだまま飛行する。辛そうな横顔を見ながら、心の中で思った。

（こいつはまた……どうしてこう自分を大事にしねえかな……）

その顔は寂しそうでもあったが、何より自愛に満ちていた。

ウルトラマンコスモスサーガ
第15話 決着の空

——宇宙空間

G U Y Sの仲間達と別れたメビウスは、右腕にナイトブレスを着しミッドチルダへ向け飛んでいた。

そんな中、背後からやってくる無数の白い球体を見る。

『こいつらは……スフィア!?!』

メビウスは驚きつつも、メビウスブレスからカッター状の光線、
『メビュームスラッシュ』を連射して応戦する。

だがスフィア達はそれを回避し、緑色の光弾でメビウスを攻撃する。

『ぐあっ!』

全方位から攻撃を食らい、メビウスが苦痛に呻く。
すると赤い閃光が二つ迸り、スフィアを一掃する。

『『イヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!』』

見ると、レオとアストラが同時にキックを放ちスフィアを粉碎していた。

『レオ兄さん、アストラ兄さん! どうして……!?!』

『俺達も先に行きたかったんだがな。このザコ共が邪魔で……っ
!』

レオが説明する中、背後から迫ってきたスフィアを手刀で両断する。

そしてメビウスに向き直る。

『だが、お前が来たからには話は早い。メビウス、スフィアは俺達が片付けておく。お前は先に行け』

『……分かりました！』

レオの言葉に、メビウスはしっかりと頷く。その目は、レオの知っている涙に濡れたものではなく、歴戦の戦士の目つきであった。レオとアストラはメビウスに頷き、レオは左腕に付けたブレスレットをメビウスに渡す。

『これは……？』

『ウルトラマントだ。それなら時空を超えられる』

『……ありがとうございます、兄さん！』

メビウスはまさに王の様なそのマントを身に纏い、レオ達に背中を向けて飛び立った。

その背中を見送った後、レオとアストラは無数に出現するスフィアと向き直る。

『さて……行くぞ、アストラ!』

「うん、レオ兄さん！」

アストラが前、レオが後ろに立ち、両腕を水平に伸ばす。そしてアストラの頭の上で互いの手の平を合わせる。

『デヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ア！』

赤い光線、『ウルトラダブルフラッシュ』が炸裂し、スフィアが次々に粉碎されていった。

——クラナガン

地上に出たゼロはリドリアス、ゴルメデと協力し、サタンビートル、インセクタス、ノコギリンと戦闘を繰り返していた。

一方その下では、ムサシを担いだままのヴィータが拘束したルーデシアとアギト、マホロバに幾つかの質問をしていた。

そんな中、一瞬眉を上げたルーテシアが何かを呟く。

「……逮捕は、良いけど……」

「あん？」

「大事なヘリは……放っておいて良いの……？」

「っ！」

その言葉に、全員が一斉にヘリの方を向く。今はまだなにも起こっていない。だが何かあると踏んだムサシは、ふら付きながら前に出る。

「行かなきゃ……っ！」

だが一歩踏み出したとき、彼の体に激痛が走り、その場に倒れる。それを寸前でヴィータが支える。

「無理すんな。おめーはまだ戦える状態じゃねえ……」

額に脂汗を滲ませながらも前に進もうとするムサシに、ルーテシアは今までに感じた事の無い気持ちを覚える。だが慌てて瞬きをし、次の言葉を口にした。

「あなたはまた……守れないかもね……」

「なっ……！」

次の瞬間、ヘリに向かって強烈な光線が飛んでいく。一番近いのはゼロ。だが、戦闘中の彼は今動く事ができない。

直撃する。

誰もがそう思った、その時だった。

「……あれ？」

光線を放った主、『ディエチ』が不思議そうに呟く。

「どうしたのぉ？ ディエチちゃん？」

メガネをかけた、先程ルーテシアに助言した主、『クアットロ』が尋ねる。

「あのヘリ……まだ飛んでる」

「えっ……？」

確かに、硝煙の置くからヘリの先頭が見えた。
そのヘリとディエチ達がいるビルの中に、赤と銀の戦士が浮いていた。

『ま、間に合ったあゝ……』

『お前……メビウス！』

ゼロがその戦士を見てそう叫ぶ。メビウスはマントをプレスに戻し、上空に現れたスフィアと対峙する。

『あいつら……スフィアだと！？』

そちらに気を取られている隙に、ルーテシア達とレリックの入ったケースが奪われてしまう。

サタンビートル達も魔法陣に戻っていき、スフィア達も去っていった。一気に戦場が静まる。

「……っ！ げぼっ、げぼっ……」

それを破ったのはムサシだった。ムサシは苦しそうにして蹲り、咳き込み始める。そのままムサシは意識を失った。その手には、大

量の血が着いていた……。

第15話 決着の空（後書き）

次回予告

ミライ

「ヒビノ・ミライです！」

エリオ

「なんかムサシと似てる……」

ヴィータ

「あいつは……」

キャロ

「どうですか……？」

？

「ふえっ？」

次回、ウルトラマンコスモス！

【空の下で】

機動六課に、新たな仲間が！

第16話 空の下で

——機動六課・医務室

白いベッドの上で眠るムサシ。その横にある椅子に、ヴィータとキャロ、そしてルットを握ったエリオが座っている。

「ヴィータ副隊長、ムサシ君の状態って……」

「……シャマルが言うには、体力を大きく消費してるだけだって……。すぐに目を覚ますつつてたけど……」

キャロの言葉に、ヴィータがムサシを見ながら答える。

ムサシに視線を戻すキャロの横で、エリオがルットに尋ねる。

「ねえルット、あのコロナモードってなんなの？」

《あれは……。簡単に言ってしまうえば、力が優しさを食らい尽すんです……》

エリオの質問に、ルットがどこか切なそうな調子で答える。
その言葉に、キャロとヴィータが一齐にルットの方を向く。

《……以前、私がマスターの体を一時的に借りた事があるんです。その応用で、マスターが視界に捕らえた敵を徹底的に叩き潰す、というプログラムなのですが……。それがマスターの体に影響を与えてしまったようです……》

「なんだってそんなもん……」

ルットの説明に、ヴィータが眉を顰める。淡く輝いていた光を一旦消し、しばらく沈黙が流れる。
やがて、ルットの体が再び輝く。

《私の、独断です。こんな風に言うのも気が引けますが、マスターは優しすぎます。甘いというのが相応しいくらい。だから……、もしもの時に自分の身を守れた方が良いかと思ひまして……》

「だからってなあ……！」

ルットの言葉に、ヴィータが食って掛かる。瞳の瞳孔が開いたヴィータを、キャラコが必死で抑える。
だがそんなヴィータに、ルットは変わらない調子でエリオに握られている。

「こいつは……、ムサシは優しいから、甘いからムサシなんだろ！
てめえ相棒の癖にんな事もわかんねーのか！」

《……相棒だからです。一緒に戦うと言いましても、私をどう扱う

かはマスター次第。私は……、マスタートムサシが大好きです。その方に……、傷付いて欲しくなんかありません。私も、できる限り一緒に戦わせていただきたいんです……」

叫ぶヴィータに、ルットはとても人間らしい口調で答える。その言葉は、デバイスであるブループラネットとしてもものには聞こえなかった。ムサシの事が大好きな1人の少女、ルットとしての言葉にも聞き取れた。

再び沈黙が流れる。それを破ったのは……、

「ありがとう、ルット」

《マスター……》

いつの間にか状態を起こしたムサシが、ルットに向かってそう言っ
て笑顔を見せた。

「僕は元々、ルットの事デバイスだと思ってないよ？ 大切な友達だと思っ
て接してたんだけど……」

《……ありがとうございます……》

涙でも流していそうな口調でルットが呟き、エリオの手から離れてムサシの首に掛かる。

そしてムサシは、隣にいるヴィータの頭を撫でる。

「ヴィータ副隊長も、ありがとうございます。いつも助けていただいて、心配してもらって……」

「なっ……、あ、あたしはその……、お、お前等の上司だから！
当然の事をしたまでだ……」

頭に乗せられた暖かい手と、目の前にある柔らかな笑顔から発せられた言葉に、ヴィータは耳まで真っ赤にしながらボソボソ答える。
数分後、シャマルにからかわれたりしながらも、ムサシは無事退院した。

部隊長室に向かったヴィータと別れ、ムサシはエリオ、キャロと共に歩いていった。

するとロビーの方から何か物音が聞えた。

「はあああああああああああああ！？」

「今の……」

「レンさんの声だね……」

聞えてきた絶叫から、ムサシとエリオが声の主を予想する。

そしてロビーに入ると、口をあんぐりと空けたレンが、茶髪の青年を指差して震えていた。茶髪の青年は、黄色い隊員服の様な物を着ていた。

「メメメ、メビウスっ！ お前今なんつった！？」

「ん？ 僕も今日からここでお世話になるよって言ったんだよ？」

メビウスと呼ばれた青年は、真顔で首を傾げながらレンにそう返す。

「まあ、心強いっちゃーそうだが……。親父の件もあるしな……」

「あ、レオ兄さんがウルトラサイン送ったんだっけ……」

ロビーに思い沈黙が流れる。入るタイミングを逃したムサシ達がおどしていると、それに気付いたメビウスが笑顔を向ける。

「君達？ ゼロがいつも言ってる大事なチームメイトっていうのは？」

「お、おいメビウスっ！」

メビウスがムサシ達の方に近付いていくと、いきなりそんな事を言い出した。内容が内容なので、慌てて止めに来るレン。

「んー、でもレンさんって僕達よりスバルさんとティアさんとか、なのはさんとかの方が仲良しですよね？」

「ムサシっ！ てめえ余計な事言ってんじゃないやねえよ！」

ムサシがメビウスにそう返すと、レンがムサシの頭を掴んでその指に力を込める。

ムサシとレンがギャーギャー騒いでいる間に、エリオとキャロが自己紹介をする。

「あ、僕、エリオ・モンディアルって言います！」

「私、キャロ・ル・ルシエです！　こっちはフリードリヒ」

『きゅく〜！』

エリオとキャロが互いの名前を言い、キャロは肩に乗せたフリードを紹介する。

メビウスはそれに微笑み、左腕に綺麗なブレスレットを召喚する。

「ウルトラマンメビウス。この姿のときの名は、ヒビノ・ミライです！」

さらっとウルトラマンである事を紹介するミライ。というのも、彼は地球に居たときに、ウルトラマンメビウスⅡヒビノ・ミライを1人の仲間として受け入れて貰っていた。その経験から、彼はその正体を隠す事はしなくなったのだ。

「いだけだだだあ！　レンさん痛いです！　……あ、ムサシ・ハラウンです！　ウルトラマンコスモスでもありまいだだだだ！」

「その減らず口、俺が叩き潰す！」

ムサシも涙目になりながら自己紹介するが、再びレンが何か叫びながらムサシの頭を拳でぐりぐりする。

するとエリオの前に、ブルークリアのモニターが出現する。それを見て、ミライの目が輝く。

「うわぁ！ なにこれっ！？ 凄いね〜！ この世界ではこういう仕組みが発達してるんだね〜！ へえ〜」

『えっと……、エリオ、今大丈夫？』

「なのはさん……。た、多分大丈夫です……」

『じゃあすぐ来て！ もう全力で！ マッハ5で！』

「あ、なのはさ……切れちゃった……」

どこか慌てている様子だったなのは。ムサシもレンから開放され、5人はなのはの部屋に向かって歩き出した。

その際、おのぼりさんの様に周囲のものを見ては興奮していた。そんな立場は先輩の姿に、レンは呆れたように頭を抱えていた。

——なのは・フェイト共同部屋

スバル、ティアナと合流し、部屋に入ったムサシ達。

すると甲高い泣く様な声と、困った様子のなのはの声が聞こえた。

良く見ると、レリックを引き摺っていた少女がなのはの脚にしがみついて離そうとしない。なのはの助けを求める視線に気付いたムサシは、顎に手を当てて策を考える。

「あ、そうだ」

するとムサシは右手に魔法陣を召喚する。

「なに今の！？ カッコイイね！」

「あゝ、メビウス、お前フェイトが呼んでたからそっち行って来い。早急に」

魔法陣にテンションが上がったミライを、レンが引き摺る様にしてフェイトの方に引っ張っていった。

ムサシの手にある魔法陣から、小さなリドリアスが召喚される。

「ルット、お願い」

《了解しました》

ルットがリドリアスに淡い光を放ち、リドリアスは金髪の少女の前で浮遊する。

「ふえっ？」

『こんにちは！ ボクリドリアスって言うんだ！ 君は？』

「……ヴィヴィオ」

リドリアスを見て泣き止んだ少女に、リドリアスが人間の言葉で話しかける。先ほどルットがかけた魔法の影響だ。

リドリアスに注意が向いたヴィヴィオに、ムサシが目の高さまで屈む。

「僕はムサシって言うんだ。リドリアスのお友達」

「ムサシ〜？」

「そ。でね、ヴィヴィオ。なのはさん、今からと〜っても大事なお仕事があるんだ。でもね？ ヴィヴィオが良い子で待っていてくれれば、なのはさんがヴィヴィオのママになってくれるって！」

「……………はっ！？」

「あっ……………」

「ママ……?」

ムサシが軽く自己紹介し、ヴィヴィオになのはがどうしても離れなきやいけない理由を説明する。その説明の中、勢いでとんでもない発言をしてしまう。

後ろから来た素っ頓狂な声に、ムサシは自分の行いに冷や汗を流す。

だがヴィヴィオはそれを信じ、期待の眼差しでなのはを見上げる。

「ママ……?」

「あ、あのねヴィヴィオ、今は、その……」

「……良いよ、ママでも」

ムサシが慌てる中、なのはは笑顔でヴィヴィオの頭を撫でる。

「でも、ヴィヴィオが良い子で待っててくれたらね?」

「うん! ヴィヴィオ良い子にしてる!」

すっかり機嫌を良くしたヴィヴィオが、なのはの脚を離す。

なのはは再び笑顔を見せて立ち上がり、ムサシが小声でなのはに謝る。

「すみません、あんな事言っちゃって……」

「別に良いよ。あ、でも……」

謝るムサシに気にしてない様子を見せるのは。だが少し悪戯な笑みを浮かべ、ヴィヴィオの方を見る。

「ヴィヴィオが1人でお留守番してる間、ムサシと一緒に居てくれるからね！」

「へっ!？」

なのはがヴィヴィオの前までムサシを差し出す。

ヴィヴィオは目を輝かせ、甘える様にムサシに抱き付いた。ムサシが困惑している隙に一同は部屋から出て行った。

残されたムサシは、今だに自分を放そうとしないヴィヴィオの頭を撫でる。かつてエリオにしたように、フルムーンレクトを応用した気分を落ち着かせる光だ。

「色々あって疲れちゃったよね。お昼寝しよっか？」

「ふわぁ〜……。うん、おひるね〜」

眠たそうに欠伸したヴィヴィオを抱っこし、部屋にある大きめのベッドに寝かせて毛布をかける。

《マスターもお休みになられてはいかがでしょう？ 体力を消耗してる様に見えますが……》

「うん、ありがとルット。それじゃあお言葉に甘え様かな……」

ルットの言葉に、同意し、ムサシはルットをナイトデスクに置いて毛布の中に潜る。

するとヴィヴィオがムサシに手を伸ばす。ムサシもその手を握り返し、そっと目を閉じた。

――その夜

帰ってきたなのははフェイトと合流し、部屋に向かって小走りになっていた。

「フェイトちゃん、ミライ君はどうだった？」

「うん、なんか……ムサシの10年後を見た感じがしたよ……」

「にゃはは……。でもムサシ、ちゃんとヴィヴィオの面倒見れてるかな……？」

「大丈夫だと思うよ。昔から色んな人……とか動物に懐かれてたし」

そう言葉を交わしながら、なのはは部屋のドアを開ける。

部屋の電気はついているが、ムサシもヴィヴィオもそこにはいなかった。

不思議に思ったのはとフェイトが探していると、ベッドの上でその姿を見つける。そして互いに微笑む。

「先にご飯食べてこようか」

「そうだね」

可愛らしい寝顔で抱きついているヴィヴィオと、そのヴィヴィオを優しく包んで寝ているムサシを起こさない様に。こっそり部屋から出て行った。

余談だが、朝起きてなのは、フェイトに挟まれていたムサシは、どこからかその情報入手したレンやヴァイス等に殺されかけたそうなの……。

第16話 空の下で（後書き）

次回予告

スバル

「いづくぞおおおおおおおおおおお！！」

ミライ

「スバル、熱血バカ……っ」と

ティアナ

「ったくアンタは……」

ミライ

「ティアナ、クールな女ライダー……っ」と

レン

「できれば褒美はなのはの膝枕がいいが……ま、んなこたあいいぜ！」

ミライ

「レン、情熱のストライカー……っ」と

エリオ

「あれは、凶暴怪獣アーストロン！ 長い角と口から吐く青白い光線が武器の怪獣……」

ミライ

「エリオ、怪獣博士……っ」と

キャラ

「ちょっと怖いです……」

ミライ

「キャラ、ウサギちゃん……っ」と

ムサシ

「思春期にチョコを食べ過ぎると、ニキビが治りにくくなるんですよ！」

ミライ

「ムサシ、不思議ちゃん……っ」と

次回、ウルトラマンコスモス！

【ミライの機動六課観察日記】

青年の目に映る機動六課の面々とは……！？

今回はミライ視点の総集編の様なものになりそうです。

【激闘の覇者】のような。

第17話 ミライの機動六課観察日記（前書き）

挿入歌

『Touch the Fire』

名前だけです。がオリキャラが登場です。

第17話 ミライの機動六課観察日記

——機動六課

その日、ミライは机に向かって日記を書いていた。

【僕、ヒビノ・ミライが機動六課に来てから一週間。

大分色んな人達の事が分かってきました。

今日はシグナムさんと剣の勝負をしました。強かったです。一応僕もウルトラ戦士としてのプライドがあるので、ギリギリの所で勝てました。

明日はヴィータちゃんと模擬戦をする予定です】

そこまで書いた所でミライは手を止め、日記を読み返す。

「結構、色々あったねえ……」

そう呟き、過去の日記を読み始めた……。

ウルトラマンコスモスサーガ
第17話 ミライの機動六課観察日記

――。月×日

【今日は部隊長のはやてちゃんに、この世界と魔法文化について教えてもらいました】

・ ・ ・ ・

「とまあこんなとこや。何か質問ある？」

「ふむふむ……。ううん、何となく分かったよ！　ありがとうはやてちゃん！」

ミライがメモを取りながらはやてに笑顔で返す。

あまりにもキラキラしたその瞳に、はやても若干恥かしそうに頬を掻く。

「魔法って凄いんだね！　まるで魔法みたいだよ！」

「いや、魔法やから」

ミライの矛盾してる発言に、はやてが鋭くツツコミを入れる。それでも尚目を輝かせるミライに、はやては軽く頭を抱えた。

「なんやろ……、可愛いんやけど、こっ……。天然って怖いわぁ」
「……」

そんなはやてのボヤキは、ミライの耳には届かなかった。

【はやてちゃんは、とっても面白い人でした！】

――。月　日

【今日はせんぎきよーどーかんという役職の、高町なのはちゃんに

機動六課を案内してもらいました。なぜかゼロ……、レンに凄い睨まれたんですけど、なんでだろう……？】

・ ・ ・ ・

「で、最後にここがミライ君のお部屋！」

「へえ〜……。うわっ！ 広〜い！」

なのはが部屋のロックを解除し、ミライは部屋に入る。そのホテルの一室であるかのような広さと綺麗さに、ミライは目を輝かせる。

「ミライ君は一応民間協力者だからね。お客さんでもあるし……」

「ありがとう！ なのはちゃん！」

キラキラとした目でなのはを見つめ、その両手を握る。
そんなミライに若干戸惑ったなのはだが、すぐに笑みを返した。

【なのはちゃんは、とっても優しい人でした！】

――。月□日

【今日は、じくーかんりきよくしつむかんという役職のフェイト・T・ハラオウンちゃんに、ミッドチルダの首都、クラナガンを案内してもらいました。なぜかすれ違う人達から色んな声が聞こえたけど、なんでだろう……？】

・ ・ ・ ・

「さて……。ミライ、お腹空かない？」

「あゝ、結構空いてきたかも……」

「じゃ、ちよつとご飯食べよっか」

腹に手を当てるミライに、フェイトは優しく微笑んでレストランまで案内する。

中々雰囲気の良い店に入り、窓際に2人は座った。
ミライはカレー、フェイトはパスタを注文し、互いに日本独特の食前の挨拶をして両手を合わせた後、それぞれの注文した飯を口に

した。

「「いただきます!」」

ミライはカレーを一口口に入れる。途端に頬に手を当て、嬉しそうに勢い良くカレーを頬張る。

そんなミライにくすりと微笑み、ふとフェイトはミライの手を止める。

「ほっぺ付いてるよ?」

「へっ?」

フェイトに指摘され、あちこちに舌を伸ばすミライ。だが届かず、必死に舌を伸ばすミライにフェイトは小動物的な可愛らしさと愛しさを感じる。そしてミライの頬に手を伸ばし、指でミライの頬に付いたカレーを取って口に入れる。

「ほら、取れた……っ!」

自分でやった事に今更恥かしくなったのか、フェイトはそのまま顔を真っ赤にした。

「ありがとう、フェイトちゃん！」

そう笑顔で礼を言うミライに、フェイトはただ頬を熱くするしかなかった。

【フェイトちゃんは、とっても綺麗で優しい人でした！】

――。月 日

【今日からしばらく、フォワードの皆の訓練を見学します。今日はスバル・ナカジマちゃんが目立った活躍をしました】

・ ・ ・ ・

ティアナの弾幕を掻い潜り、キャロに突進するスバル。その後ろで、ムサシが慌てて補助魔法でサポートする。

「ス、スバルさん！ そんなに勢い良く突っ込んだら補助が間に合いませんよお！」

「大丈夫！ まずは何事も気力と根性！ うおおおおおおお
おおおおおお！！！」

ムサシの静止も聞かず、スピードを上げて突進するスバル。
そんなスバルを見ながら、ミライは日記に何かをメモした。

【スバル、熱血バカ】

――。月●日

【今日は、ティアナ・ランスターちゃんの訓練を見ててふと思いました】

・
・
・
・

周囲に出現した無数のターゲット。
ランダムに光ったターゲットを正確に撃つ、というシンプルかつ
難易度の高い射撃練習だ。

手をだらりと下げ、軽く振って力を抜くティアナ。そして張り詰
めた空気の中、ターゲットが一つ光る。刹那、ティアナはクロスミ
ラーージュでそれを正確に撃った。

「クロスミラーージュ、どう？」

《0・35秒です、マスター》

「まずまずってとこね……」

クロスミラーージュの評価に頷き、再び練習を開始したティアナ。
それを見たミライは、ふと思い出す。

（ティアナってバイクにも乗るんだっけ。ホントにマリナさんに似
てるなあ……。フォワード陣のお姉さんって感じだし）

そしてミライは、どこかからか日記を取り出し一言書き加えた。

【ティアナ、クールな女性ライダー】

――。月 日

【今日はゼロ……、レン・モロボシとお話してきました】

・ ・ ・ ・

今日もキツイ訓練を終えたフォワード6人。疲れて隊社に戻っていく6人に、ミライが差し入れとしてカレーを用意した。

「はい！ たまには外で食べるのも良いんじゃない？」

良い匂いを出すカレーに、スバル、エリオが勢い良く文字通り食いつく。

「いただきますっ！」

言うが早いか、2人は他の4人も待たずにカレーを頼張る。

「つたくあんた達は……」

「まあまあティアさん」

「私達も食べましょう?」

呆れて頭を抱えるティアナ。そのティアナに笑顔を見せ、カレーの下へと導くムサシとキャロ。

レンも加わり、6人はベンチに仲良く座ってカレーを食べていた。するとそこに、ヴィヴィオを連れしたのはとフェイトが歩いてきた。

「あ、ムサシ〜!」

ヴィヴィオはムサシを見つけると、なのはとフェイトから離れてムサシの方に駆け寄る。それに若干ショックを受けた2人だったが、それはヴィヴィオが転んだ事でかき消される。

「いたい……」

ヴィヴィオが涙目になるや否や、光速でムサシがヴィヴィオを起こす。

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

「うん……」

今だに涙を浮かべるヴィヴィオ。

ムサシはヴィヴィオを抱っこして自分の座っていた所まで連れて行き、膝の上に乗せてカレーを食べさせる。

「どう？ 美味しい？」

「うん！ おいしー！」

その後笑顔を取り戻したヴィヴィオ。ムサシとの兄妹の様な光景に、ほんわかとした空気が流れる。

そんな中、ミライが思い出した様にレンに言った。

「そうだゼロ！ ここに来る途中に伝言預かってきたんだ」

「あ？ 誰からだ？」

「アルフォリウス」

ミライが発した名前に、レンが硬直する。その際、レンのスピーンに乗っていたカレーをスバルが勝手に頬張ったのは内緒。冷や汗をダラダラと流すレン。フォワード陣は首を傾げ、ムサシ

がミライに聞いた。

「ミライさん。アルフォリウスさんって？」

「ん？ 銀十字軍の遊援部隊で……、ゼロのお姉さん！」

「……レン（さん）のお姉さん！？」「……」

ミライの説明に、フォワード5人が大きく驚く。レンが頭を抱える中、ミライはメモを取り出して読み上げる。

「えーっと、

『愛する弟へ。』

どうせアンタの事だから、勢いだけで突っ込んだり綺麗なお姉さんに変身アイテム取られそうになったり注射が嫌で逃げたりしてるんじゃないの？

皆様にくれぐれも粗相の無い様に。馬鹿なんだから、少しでもボロ出さないでね。あたしが恥かしいんだから。

……お父さんの事、メビウスから聞いたわ。今あたしはそっちに行けない所に居るけど、あたし達の……家族の心はずっと繋がってるからね。

……べ、別にアンタが心配で言ってる訳じゃないんだからね！勘違いしないでよね！

アルフォリウスより『

だつてさ」

ミライがメッセージを読み上げた後、恥かしそうに俯くレン。
内容からして、アルフォリウスはツンデレの様だ。

「姉貴い……。そういやあいつは俺が修行してた頃もこんなんしょ
っちゅう寄越してたな……」

レンは顔を赤らめながらも、どこか嬉しそうに呟く。

「まあでも、綺麗な人はいっぱい居たよなあ。なのは、フェイト、
はやて、シグナム……。後本局のキャミラさんとかもだな」

だがすぐに顔を挙げ、自身の知っている美人の名前を上げていく
レン。

隣でそれを聞いていたスバルとティアナが鉄拳制裁を入れるの
を見て、ミライは何かを日記に書く。

【レン、情熱のストライカー】

――。月 日

【今日はエリオ君、キャラちゃん、ムサシ君と模擬戦を見学しました】

・ ・ ・ ・

「おっひざー♪ おっひざー♪ ムっサシっのおっひざー♪」

謎の歌を歌いながらムサシの膝の上で楽しそうにするヴィヴィオ。その頭を撫でるムサシを挟む様にして、エリオとキャラが座っている。ミライも加えて、5人でレン達の模擬戦を見ていた。すると突然大地が揺れ、巨大な角を生やした紺色の怪獣が出現する。

「あれは、凶暴怪獣アーストロン！ 身長60メートル、体重2万5千トン！ 鋭利な角と、口から吐く青白い光線が特徴の怪獣だ！」

「ちょっと、怖いね……」

なぜか饒舌にアーストロンの解説をするエリオ。そんなエリオと、怯えるキャラを見て、ミライは日記に書き加える。

【エリオ、怪獣博士】

【キャロ、ウサギちゃん】

レンがウルトラゼロアイを取り出すが、ムサシがそれを静止する。

「レンさん！　僕が行きますから大丈夫ですよー！」

ヴィヴィオを膝から降ろし、ムサシが立ち上がってコスモプラックを握る。

「ムサシく？」

「あ、僕ちよつと変身してくるね。……あれ？　でもコスモスは僕自身だから変身とは言わないのかな……？　……えっと、頑張ってくるね！」

ヴィヴィオに説明しようとしたが、その説明に矛盾を感じて試行錯誤するムサシ。

そんなムサシに親近感が湧いたのか、ミライは日記に再び書き加える。

【ムサシ、不思議ちゃん】

そしてムサシはヴィヴィオに背を向け、コスモブラックを掲げる。

「コスモオオオオオオオオオオオオオオオオオス！！」

青い光が迸り、アーストロンの前に青い巨人が立っていた。

『ウルトラマンコスモス・ルナモード』である。

「あれが、コスモス……」

コスモスを見上げ、そう呟くミライ。

コスモスは不死鳥を思わせる構えを取り、アースロンと対峙する。するとその背後に、茶色い三日月の様な角を蓄えた怪獣が現れる。

「古代怪獣ゴモラ！ 身長40メートル、体重2万トン！ その強靱な尻尾と鋭い角、まれに角から超振動波を出してくるから気をつけて！」

「エリオ君、何でそんなに詳しいの？」

再びエリオが解説し、キャロが質問した。

そんな中、コスモスは平手打ちでゴモラを怯ませ、尻尾を掴んでアースロンの方へ投げ飛ばす。

『シェアっ！』

アーストロンごとゴモラが倒れこむが、すぐに2体は立ち上がる。刹那、コスモスは右手から淡い光を放つ。

『はあああああ……ンンッ！』

『フルムーンレクト』が、アーストロンとゴモラを包み込む。やがて2体は大人しくなり、互いに顔を見合わせて首を傾げる。

コスモスがほっと一息ついたのも束の間、空から虹色の光が2体に降り注ぐ。

『カオスヘッダー！』

アーストロンとゴモラが苦しそうに呻く。コスモスは、咄嗟に2体に向かって両手から『ルナエキストラクト』を放つ。

カオスヘッダーは2体から分離したが、集合して1体の怪獣になる。

ゴモラの様な身体つきと頭部。後頭部から伸びたアーストロンの様な角と、2本の尻尾。

『カオスキマイラ・イブリース』となった。

アーストロンとゴモラは、力を失ったのかその場に倒れてしまった。

それを見たコスモスは、怒りに拳を震わせる。その拳を高く突き上げ、ゆっくりと腕を下ろす。

『ジユオッ！』

『ウルトラマンコスモス・コロナモード』になり、カオスキマイラに向かって構える。

そして、右手にブループラネット・コロナモードを握る。

『ルット！ 僕の頭に戦い方を流して！』

《ですが、マスターの体が追い付けるか……》

『大丈夫！ 僕が追いつく、追いついてみせる！ 君が支持して。僕はその通り動く！』

本来なら、マスターの指示にデバイスが動く。だがコスモスは、その逆の事を言った。

それが嬉しかったのか、ルットはしばらく黙って力強く輝く。

《Yes, my master》

コスモスはルットを握り締め、カオスキマイラに突進する。だが、カオスキマイラは強靱な尻尾でコスモスの脇腹を叩く。

『ジェアッ！？』

コスモスは大きく吹き飛ばされ、立ち上がろうとした所に超振動波を食らう。

『ジェアアアアアアアアアアアア！！』

苦痛にコスモスが呻く。

刹那、地上でミライが動く。左腕に出現したメビウスブレスのサークルを回転させ、勢い良く突き出す。

「メビウウウウウウウウウウウウウウウウウウス！！」

無限大を意味するメビウスの輪が現れ、赤と銀の戦士、『ウルトラマンメビウス』がカオスキマイラの角をへし折る。

『大丈夫？ コスモス』

『ミライさん！』

カラータイマーを点滅させるコスモスを起こし、メビウスはカオ

スキマイラを睨む。

『僕があいつの動きを塞ぐ。その隙に……』

『分かりました！』

メビウスがカオスキマイラに向かって突進し、コスモスは姿勢を低くしてルットを構える。

『ハッ！』

カオスキマイラの足元に『メビウムスラッシュ』を連射し、その隙に2本の尻尾を捕らえるメビウス。

『今だ！』

メビウスの掛け声と共に、コスモスが走り出す。カオスキマイラに向かってルットを振り上げる刹那、刃先がぶれて見えなくなる。

『必殺！ 朧月！』

その叫びと同時に、カオスキマイラを両断する。
そしてカオスキマイラが爆発を起こし、コスモスはルットを待機
モードに戻した。

・ ・ ・ ・

コスモスの技で体力を回復したゴモラとアーストロンは、コスモ
スに頭を下げて地上に戻っていった。
コスモスとメビウスはそれぞれムサシとミライの姿に戻り、互い
にハイタッチを交わした。

――。月×日

そしてミライは日記を閉じ、軽く伸びをする。

（何だか、G U Y Sに居た頃みたいで楽しいなあ……）

ミライは胸ポケットに入れた、ファイヤーシンボル入りのメモ
ーディスプレイを取り出す。

「……新しい光……。僕がしっかり守らなきゃ！」

そう自分に言い聞かせ、決意を新たにしたミライだった。

第17話 ミライの機動六課観察日記（後書き）

次回予告

はやて

「ここにカオスヘッダーが来るなんて……！」

なのは

「何で機動六課に……？」

ムサシ

「もつと情報がある場所……まさか！」

レン

「あいつらの狙いは……、無限書庫か！」

ユーノ

「カオスヘッダーは、この物質を嫌ってる……？」

次回、ウルトラマンコスモス！

【カオスの脅威】

無限書庫に、かつて無い危機が迫る……！

幕間 擬人化祭りだわっしょい！（前書き）

何か思っていたものが詰め込めませんでした……。。

幕間 擬人化祭りだわっしょい！

——機動六課

その日、機動六課の隊社に雷が落ちた。

丁度本局に送る前のロストログアがあったからか、六課のあちこちで電流による火傷被害などが相次いだ。

だが一番の被害者は彼、『ムサシ・ハラウン』であろう。

これは、落雷が起きる少し前の彼の行動から始まる、ちょっと奇妙な物語である……。

これから先、君達の心は君達の体を離れ、不思議な空間へと入り込んでいきます……。

ウルトラマンコスモスサーガ
幕間 擬人化祭りだわっしょい！

——ムサシ・エリオの部屋

午後は訓練がオフだった為、ムサシとエリオは小型リドリアスと戯れていた。エリオ的には自主練もしたかったのだが、ストラーダはデバイスルームで調整中なのでそれも叶わなかった。

そんな訳で2人に1匹を加えた一団は、仲良く携帯ゲームをして過ごしていた。

その時だった。

轟音と共に六課の隊社が揺れ、停電になる。

「うえっ!?!」

「な、何が……?」

「あ、戻った……。ああ！ リドリアス、どさくさに紛れて攻撃しないですよ!」

「えへへ♪ 油断してたムサシが悪いんだよう!」

「リドリアス、それは卑怯すぎます」

「んっ？」

ムサシとエリオが驚く。停電はすぐに直ったが、ムサシは自分のゲーム機を見てリドリアスが使っていたキャラが攻撃してきていた事に憤慨する。リドリアスはそれを軽くあしらうが、ルットがそれを冷静に注意する。

だが目の前の光景に、ムサシとエリオが素っ頓狂な声を上げる。

「？ ムサシ、エリオ、どーしたの？」

まずムサシとエリオの間に胡坐を掻いているこの少女。
クリーム色のショートカット。丁度スバルと同じ様な長さだ。口の端から見える八重歯が彼女の元気を象徴する。

さらに赤い薄地のタンクトップと、剥き出しになったへそを挟んでその下にある青い短パン。エリオが隣を見た時に、慌てて顔を真っ赤にして目を逸らした事から、その下に何も来ていない事が分かる。

とにかくこのいかにも活発そうな少女はいったい何者なのか。

「あの……一個聞いていい？ 君……、もしかしてリドリアス？」

「そうだよ！ ムサシ、もしかしてボクの顔忘れちゃったの……？」

ムサシの質問に、途端に涙目になる少女——リドリ阿斯——。
ムサシは機嫌取りをエリオに押し付け、胡坐を掻いている自分の
腿に座る少女を見下ろす。

「マスター、いかがでしたしました？」

そう言つて自分を見上げてくる、水色のサラサラとしたロングヘアの少女。

真つ白い生地に水色の水玉模様が付いたワンピース。彼女の言動と相まって、清楚なお嬢様にも見える。

髪の左側に付いた三日月の髪飾り。それらを踏まえて、ムサシは少女に尋ねた。

「もしかして君は……、ルット？」

「はい。ブループラネットこと、ルット。マスタームサシのデバイスでございます」

ムサシの腿から降り、ぺこりと頭を下げる少女——ルット——。
ムサシは涙目になつたりドリアスに頬擦りされているエリオを見て、互いに頷く。

そして一言、天井に向かって叫んだ。

[illegible]

——機動六課・部隊長室

「と、言う訳なんですけど……」

はやての前で困った顔を見せるムサシ。背中には笑顔のリドリアスが乗り、ムサシの右手をルットが握る。エリオは日頃の仕返し……もとい状況報告の為あちこちを走り回っていた。

「と言う訳え言われてもなあ……」

さすがにどうし様も無いのか、首を傾げるはやて。
だが目の前に居る美少女と美少女にも見えなくも無い少年を、黙って見過ごす様な人間ではない。

「せやなあ……、とりあえずこの服「すみません、急用を思い出しました」あーん、いけずう……！」

どこかからかコスプレ衣装を取り出したはやてに、マッハで背を向けてムサシは走り去った。

――機動六課・ロビー

ロビーまで逃げてきたムサシ達を待ち受けていたのは、いつの間にか集まった機動六課前線メンバーだった。

「あ、ムサシ君だ！」

キヤロの声に、全員が一斉にムサシの方を向く。思わず後退りしたムサシだが、すぐさまフェイトが今にも泣き出しそうな顔で駆け寄ってきた。

「ムムム、ムサシ！？ い、いつの間にそんな女の子達を誑かすような子に！？」

「いや何をどう判断したんですか！？」

「確かに女の子にそういう気持ちを持つちゃうのは分かるけど、最終的には1人に絞らなきゃいけないんだよ？ そんなんじゃ、将来女泣かせになって嫌われちゃうよ？」

「だからまず落ち着いて下さいってば！」

過保護、というより変な方向に思考をフルスロットさせたフェイトを、ムサシは全力で止める。

「ムサシはそんな事しないよー！　だってムサシはボクの事大好きだもん♪」

「確かにその通りです。ですが最後の部分、あなたではなくマスターは私に好意を抱いて下さっています。変な誤解をなさらないように」

「ちよつと2人ともややこしくなるから静かにしてて!？」

リドリアスとルットの問題発言に全力でツッコむムサシ。
そんなムサシのキツイ口調に、リドリアスとルットがしょんぼりと頭を下げる。

「すみません、マスター……」

「うう……、何もそんなに怒らなくていいじゃん……」

反省しているのかムサシに謝るルットと、唇を尖らせて拗ねるリドリアス。ようやく2人が落ち着いたため、ムサシは事情説明を始めた。

・ ・ ・ ・

「そんな訳で、気がついたら2人がこの姿になってたんです」

ムサシの説明に、ほとんどの人が納得したのか頷いている。ただ、ヴィータとなのは手を握っているヴィヴィオは少し不満気な顔をしていた。

そんなヴィータの顔を見て、シグナムが意地悪く尋ねた。

「どうしたヴィータ？　もしかして妬いているのか？」

「なっ！　ん、んなわけねえだろっ！　ば、バカ言ってるんじゃないっ！」

シグナムの問いに顔を真っ赤にして強く反論し、ヴィータはそっぽを向いた。それに合わせ、ヴィヴィオも頬を膨らませてそっぽを向いた。

ムサシはそれに首を傾げる。そうしていると、リドリアスがムサシの袖を引っ張る。

「ムサシ、ボクお腹減ったあ」

「私ものです……。これがクーフクという感覚なのですね……」

空腹を訴えるリドリアスと、自身が感じているものに感動するルツト。

フェイトがキッチンに行こうとしたが、ムサシがそれを静止する。

「今日は皆さんの分も僕が作ります。こんな事でしか恩返しできないと思うので……」

無邪気な笑顔でそう言った後、ムサシはどこからかエプロンと三角巾を取り出して装着し、キッチンに向かい合った。

「リドリアスはお肉好きだから……、でもキャロとかフェイトさんは野菜の方が好きだし……、よし決めた！」

あれこれ試行錯誤した末、ムサシは作る料理を決める。

そして冷蔵庫から材料を取り出し、テンポ良く食材を切り始めた。

・ ・ ・ ・

「ふわぁ〜！ 良い匂いがするよぉ〜！」

「ホントですね……」

リドリアスとルトトは、キッチンから漂ってくる香りに唾を飲み込む。いつの間にかヴィヴィオとリドリアスは仲良くなったのか、2人揃って椅子に座りながら脚をブラブラしている。そんな中、キッチンからムサシが姿を現す。

「お待たせしました〜！」

「……おおお〜！！」「……」

ムサシがテーブルに置いた料理に、リドリアス、ヴィヴィオ、エリオ、スバルが食いつく。

良い湯気を立てる野菜たっぷりのクラムチャウダーと、食欲をそそる生姜焼き、そして純白のご飯の3品だ。

「こんなもんしか作れないけど……。まあ、召し上がって下さい！」

『いただきます！』

ムサシの言葉に、声を合わせて皆が両手を合わせ、日本独特の挨拶をする。

大人組は箸を、子供組はスプーンで料理を口に運ぶ。

「どうかな……?」

「おいし〜」

「ムサシ！ これ美味しいよ！」

ヴィヴィオとリドリアスが、ムサシに笑顔を見せる。
ルットもこくこくと頷き、ムサシはほっと一息を着く。

『ムサシ、ちょっとええか?』

ムサシの近くの端末が開き、画面の奥からはやてが声をかけてきた。

「部隊長、どうしました?」

『例の件、原因分かったで』

「ホントですか!？」

はやての言葉に、嬉しそうに言うムサシ。軽く後ろを向き、リドリアスとルットを見る。

人間の体が入り、とても嬉しそうにしている。それを勝手に

戻ってしまうのは胸が痛んだが、ムサシはこっそりと部隊長室に向かった。

――部隊長室

ムサシが来たのと同時に、はやてはケースに保管されている青く禍々しいロストロギアを見せる。

「これがカオスヘッダーに取り付かれとる……。幸いケースの中から漏れてないんだけど……」

「分かりました。僕がやります」

ケースから外に出ようとするが出れない虹色の光を見て、ムサシはコスモブラックを発光させる。

コスモス・ルナモードになり、右手からルナエキストラクトを放つ。

カオスヘッダーはケースの中で無残に消滅していった。残った青いロストロギアは、二本角の生えた様な道具、『バトルナイザー』に酷似したものに变化した。

「なんですか？ これ」

「ん……。数値が基準を下回ってるから……。ロストログアでは無いんやけど……。ムサシ、いる？」

「貰っていいんですかそんなの？」

「ええよええよ。ミッドを何度も助けてくれとるんやから」

はやての良く分からない説明に首を傾げながらも、ムサシは『バトルナイザー・コスモ』を右手首に装着した。
そして若干重い足取りでロビーへと戻る。

――ロビー

ムサシがこっそり入ると、既に大半の人は居なくなっていた。

残った人物は1人。ヴィヴィオがテーブルに腕を乗せて眠っていた。その横で丸くなっている『リドリ阿斯』と、反対側で鎮座している『ブループラネット』も眠っていた。

ムサシはくすりと笑い、ヴィヴィオに毛布をかけてやる。それにシステムが復旧したのか、ルットが輝く。

《あ、マスター……。私は、何をしていたのでしょうか……。？ 何
だか、人間になってマスターと一緒に居た夢を見た様な……。》

ルットは覚えていないのか、そんな事をムサシに言った。
ムサシは薄く微笑み、ルットを首にかける。

「夢、かもね……」

ムサシはヴィヴィオの隣に座り、毛布の中にリドリ阿斯も入れてやる。

「けど、夢は追いつければいつか叶うし……。それがきつと、キラ
メク未来に繋がっていくんじゃないかな……。？」

そう言って、ムサシはバトルナイザーを撫でた。

幕間 擬人化祭りだわっしょい！（後書き）

一応『幕間』なので本編のストーリーにも影響していたり……。

第18話 カオスの脅威（前書き）

ちよつと短いです。

そしてユーなのファンの方すみません……。

第18話 カオスの脅威

——機動六課・演習場

訓練を終えたムサシは、手の平に召喚魔法陣を展開する。その中から小さなリドリ阿斯、ゴルメデ、ボルギルスが出現する。

「ムサシ、リドリ阿斯達召喚してどうするの？」

「うん、ちょっとね……」

エリオの質問に、右手首に装着した『バトルナイザー・コスモ』を見せるムサシ。

「ミライさんが言うには、これって怪獣を召喚する道具なんだって。でもこれにはまだ怪獣が入ってないから……」

『バトルナイザー』とは本来、全宇宙を支配した『レイブラッド星人』の遺伝子を受け継いだ者達、『レイオニクス』モンスロードが怪獣を召喚する為に使う道具だ。この形は『ネオバトルナイザー』と呼ばれる、バトルナイザーの強化形態と酷似していた。

だがムサシはレイオニクスではない為、バトルナイザーにも怪獣は入っていない。そこでリドリ阿斯達がバトルナイザーに入るかどうか試す、という考えなのだろう。

ムサシはコスモス・ルナモードになり、右手に光を集めて『ルナエキストラクト』を放つ。

淡い光が隊社を包み込み、カオスヘッダーが退散する。

『待てっ！』

「ああ、追い掛けんでええよムサシ」

カオスヘッダーを追い掛けようとするコスモスを、はやてが静止する。

『何で止めるんですか！』

「これ以上の深追いは危険だよ。今はそれより、カオスヘッダーに盗まれたデータをチェックするんが優先や」

『……了解』

はやてに説得され、コスモスはムサシの姿に戻る。

フォワード陣が隊社に戻る間、はやてとリインはカオスヘッダーに盗まれた情報が何か探す。

そんな中、ふとははやての手が止まる。

「はやてちゃん？」

「……これや」

はやてが見つめるモニターの奥には、【N O D A T E】の文字が浮かんでいる。

それが、カオスヘッダーに盗まれた情報だった。

「これって……！」

「カオスヘッダーが持ち出したんは……」

はやては一拍置き、静かにつぶやく。

「ムサシとレン。ウルトラマンに関するデータや」

このとき、まだ誰も知らなかった。

カオスヘッダーが盗み出した情報を誰が管理し、恐ろしい計画が進んでいた事に……。

ウルトラマンコスモスサーガ
第18話 カオスの脅威

——機動六課・隊社

先程のカオスヘッダーの襲来から数分後。六課の前線メンバーは部隊長室に集まっていた。

そこではやては、カオスヘッダーに盗まれた情報を皆に伝えた。

「僕と……、レンさんのデータが……？」

「せや」

ムサシの呟きに、はやてが頷く。レンも口にはしないが怪訝そうな顔をして舌打ちする。

幸い六課の隊員には影響が無かった様だが、カオスヘッダーの方は分からないままだった。

「何でカオスヘッダーはムサシやレン君達の情報？」

「多分あいつらは、ウルトラマンの情報が欲しいんだ。自分達だけでウルトラマンの体を構築出来る様に……」

なのはの言葉に、ミライが補足する。

その言葉に、全員が情報の集まる場所を頭に思い浮かべる。

「もつと情報がある場所って……まさか！」

顎に手を当てていたフェイトが、そう言ってなのはの方を見る。

その視線と言葉に、なのはも同じ場所が思い浮かぶ。

「無限書庫！？」

ミッドチルダ有数の情報が集まる場所、『無限書庫』。当然の事ながら、武装は無に等しいほどしかない。司書長である『ユーノ・

スクライア』曰く、ウルトラマンの情報も幾つか発見されたい。
となれば、カオスヘッダーがそこに出没する可能性が高い。
嫌な空気が流れる中、赤い光と共に警報が鳴り響いた。

——無限書庫

緊急連絡を受け、機動六課の前線メンバーは無限書庫に出動した。
さすがに戦力の大半を出してしまうのは危険を伴う為、シグナムと
ヴィータは六課に残っている。

その代わりといつては何だが、ヴィヴィオがフェイトにくっ付い
ている。どうしてもなのは良く口にしていた男性に会いたかった
らしい。恐らく、父親を求めて……。

「ヴィヴィオ、おいで」

ムサシが不意にヴィヴィオを呼ぶ。ヴィヴィオはフェイトから離
れ、ムサシにくっ付く。

「ムサシ？」

「防御に関してなら、僕の方が自身あるので！」

首を傾げるフェイトに、ムサシはウィンクで返す。フェイトは嬉しそうにムサシの頭を撫で、エリオとキャロもムサシによる。

「うん！ それじゃあライトニングは、ヴィヴィオの護衛に徹底します！」

「了解！！」

フェイトが3人に向かってそう言い、ムサシ達も元氣良く返す。

「僕も残っとくね」

「ミライパパ？」

ミライがそう言うと、ヴィヴィオがパパと言って首を傾げる。一瞬困った顔をしたミライだが、すぐに嬉しそうに頷いた。

「それじゃあスターズは、書庫内に突入します！」

「了解！！」

なのはの言葉を合図に、スターズ4人は書庫内部に突入した。

無数の本棚が延々と続く中、その中心でメガネをかけた男性が浮遊している。その男性に向かって虹色の光が飛ぶ。だが男性は緑色のバリアを展開し、その光を防ぐ。

その横に居る犬の様な耳が生えた橙色の髪の少女が殴りかかるが、虹色の光はするりとそれを回避する。

「ふう……」

「ユーノ！ 大丈夫か！？」

「こっちのセリフだよ、アルフ」

メガネをかけた男性、ユーノは犬耳の少女、アルフにため息混じりに返す。

すると2人の横に、なのは達が近寄る。

「ユーノ君！」

「なのは！」

ユーノとなのはは互いの顔を見て嬉しそうに名前を呼ぶ。アルフも尻尾が嬉しそうに振られている。

そんな光景を、レンは胸の奥が痛むのを感じながら見ていた。

「なのはママ〜!」

「ちょ、ダメだよヴィヴィオ!」

ヴィヴィオがなのはの方に浮遊しながら滑っていく。ムサシは必死に手を伸ばし、ヴィヴィオを止めようとするが届かない。

ヴィヴィオはなのはとユーノの間に立ち、2人の顔を見る。

「パパ〜?」

ユーノを見て、ヴィヴィオはそう言う。一気に顔を真っ赤にするユーノなのは。レンが軽く舌打ちしていると、カオスヘッダーが勢い良く3人に襲い掛かる。

「危ねえ!」

レンは咄嗟にゼロアイを装着し、ウルトラマンゼロの姿になってカオスヘッダーから3人を庇う。

ゼロの体を、カオスヘッダーが包む。

『ぐうあああああああああああああああ!』

「レン君!」

ゼロが苦痛に呻き、なのはが悲痛な叫び声を上げる。

「レンさん！」

ムサシもコスモスになり、ルナエキストラクトを放つ。それを食らってカオスヘッダーはゼロから離れる。そしてカオスヘッダーは満足したのか、無限書庫から出て行った。コスモスとゼロはそれぞれムサシとレンに戻る。

だがレンは、大量に汗を掻いてふら付いている。

「レン君！」

倒れそうになるレンを、なのはが支える。その光景を見ながら、ユーノは屈んでヴィヴィオに耳打ちする。

「君のパパは僕じゃなくて、あっちだよ」

「レンパパ？」

ユーノの言葉に、ヴィヴィオはレンの方を見る。レンは一瞬驚いたが、ユーノの顔を見た後くすぐったそうに頷いた。

スバル、ティアナ、ムサシには居心地の悪い空気が流れる。

「とりあえず、出ましようか……」

「だね……」

ティアナとスバルがそう言い、書庫を離れる。だがムサシは、アルフに近付く。

「アルフ、ウルトラマンに関する資料ってどこ？」

「あっちだけど、なんでだ？」

「うん、ちょっとね……」

ムサシはアルフに案内され、ウルトラマンに関する本を手取る。その本には、『超古代伝説』と書かれていた。

「……これが、ティガ」

ムサシが開いているページには、黒いティガダークの他に、3人の巨人が超古代の街を破壊する絵が描かれていた……。

——スカリエッティラボ内

そのラボの中で、1人の女性が自身と同じ青いスーツに身を包んだ男性を見ている。

「気分はどうかしら？」

「順調です。お姉様」

「そう……」

男性の返事に、女性は嬉しそうに微笑む。
首下に『？』と書かれた女性、『ウーノ』は、首下に『0』と書かれた男性をもう一度見る。

「よろしくね、バン・ヒロト」

「はい、お姉様」

その男性の容姿は、ヒビノ・ミライと酷似していた……。

第18話 カオスの脅威（後書き）

次回予告

ムサシ

「ヴィヴィオ、待っててね」

はやて

「公開意見陣述会やな……」

ミライ

「君は……！」

バン・ヒロト

「ターゲット補足」

レン

「ベリアル！」

ムサシ

「その人は……？」

ベリアル

『こいつの名は……』

春野……、ムサシ』

ムサシ

「えっ……？」

次回、ウルトラマンコスモス！

【もう一人の自分】

少年達は、もう1人の自分と再会する……。。

第19話 もう一人の自分

――機動六課

その日の夜、機動六課の主力メンバーがロビーに集められていた。
『公開意見陳述会』という、管理局にとってはとても重要な会議が開かれる。

フォワード陣とスターズの隊長2人にミライを加えたメンバーが、ナイトシフトで会場に向かう。

「明日14時の開会に備えて、現場の警備はもう始まって。なのは隊長と、ヴィータ副隊長、リイン曹長とフォワード四名はこれから出発。ナイトシフトで警備開始」

「皆、仮眠はちゃんと取った？」

「……はいっ！」「……」

全員の顔を見ながら、はやてがそう説明する。その説明の後、フエイトが6人に優しく尋ねる。

その言葉に、スバル、ティアナ、レン、キャロが元気良く答える。
だが、なぜかエリオとムサシは眠たそうな表情をしていた。

「エリオ、ムサシ、大丈夫？ 何だか眠たそうだけど……もしかし

て眠れなかったの？」

そんな2人の表情を見て、心配そうにフェイトが尋ねた。
それを聞き、慌ててエリオとムサシは首を振る。

「いえ！　そういう訳では……」

「何か、いきなり写真を整理してたらエリオが襲い掛かって来て……」

「なっ！？　ムサシが僕にあの時の……あの写真を見せびらかすからでしょ！」

「見せびらかしてないよ！　ただルットが連写してて数が多かっただけだよ！」

「その連写を指示したのはムサシでしょ！？」

エリオはフェイトに心配をかけまいと首を振るが、ムサシはぶたれてフェイトに事情を説明する。

するとその説明にエリオが食って掛かる。だがムサシは涼しい顔でそれを流し、エリオはさらにムサシに食って掛かる。

ついには頬の引っ張り合いになり、互いに凄い表情になっている。間でキャラがオロオロしているが、残りのナイトシフトメンバーは呆れて首を振っている。

「こら！ 2人とも明日お仕事だつて分かつてるんだからちゃんと寝なきゃだめでしょ？」

そんな2人に、珍しくフェイトがきつめに注意する。それに2人はしょんぼりと俯きながら離れる。

「はい……」

「ごめんなさい……」

少しばかり落ち込んだ様子のエリオとムサシに、フェイトは慌てて弁解する。

「あ！ え、えつとね？ その……元気なのは良い事だけど、次の日のお仕事に影響が出ちゃうとまずいし……でも部屋でまできちつとしてろつて言う訳じゃなくて……」

落ち込んだ2人を少しでも元気付けようとフェイトがあれこれ言ってみるが、口下手な彼女ではあまり2人を元気付けられない。

「んまあ何にせよ、元気なんはええこつちゃ。な？」

それを見かねたはやてが、一歩前に出てエリオとムサシの頭を撫

でる。

嬉恥かしの表情を浮かべるエリオと、くすぐったそうに笑うムサシ。少しばかりキャロとフェイトが頬を膨らませていたのは内緒だろう。

「ともかく、私とフェイト隊長、シグナム副隊長は……、明日の早朝に中央入りする。それまでの間、よろしくな！」

『はいっ！』

はやての言葉に、ナイトシフトメンバーが元気良く返事をする。そして会場に向かう為、屋上のヘリポートに向かった。

――屋上

総勢10人がヘリに搭乗しようとしていると、寮母であるアイナに連れられたヴィヴィオが来ていた。

それを見たのはとムサシが、ヴィヴィオの方に近寄る。

「あれ？ ヴィヴィオ。どうしたの？ ここは危ないよ？」

ヴィヴィオの目の高さまで屈み、なのはが優しくヴィヴィオに聞く。

「ごめんなさいね、なのは隊長。どうしてもママのお見送りをするんだって……」

「ん」。駄目だよ、ヴィヴィオ。アイナさんに我俣言っちゃ……」

「……ごめんなさい……」

アイナの説明に、なのは軽くヴィヴィオを注意する。するとヴィヴィオは、いつもより落ち込んだ調子で謝る。

「なのはさん……。もしかしてヴィヴィオ、なのはさんが夜勤で夜居ないのは初めてだから、怖いんじゃないですか……?」

「うん、私もそう思うよ?」

ムサシが苦笑いしながらなのはにそう言い、フェイトがそれに同意する。

なのははそれに困った様な表情を浮かべ、入れ替わる様にムサシがヴィヴィオの頭を撫でる。

「だ〜いじょぶだよ！　なのはさん、すぐに戻って来るから！」

「…………ムサシも？」

「うん。僕も…………」

ヴィヴィオに元氣付ける様に言った後、ヴィヴィオの言葉に頷くムサシ。

そしてヴィヴィオに聞かれた事で、僅かだが自分がヴィヴィオに信頼されている事を悟るムサシ。

気が付くと、ムサシの胸にヴィヴィオがしがみついていた。

「…………ホントに？」

「…………うん。ホントに。僕もなのはさんも戻って来て、なのはさんがキャラメルミルク作ってくれるから！」

「ム〜サ〜シ〜…………？」

ヴィヴィオの髪をくしゃくしゃと撫でながら、ムサシは優しくそう言った。再びなのはの力を勝手に借りて。

するとムサシの背後から、なのはが良い笑顔で肩を掴んだ。

「あ！　いや、えっと…………その…………」

「大丈夫だよヴィヴィオ。ママもすぐ帰ってくるから。その時は…

…ムサシ、みつちりしごいてア・ゲ・ル♪」

「ええ〜……」

慌てるムサシを無視し、なのははヴィヴィオを安心させる。

そしてムサシに死刑宣告に等しい事を言い、屋上は笑いに包まれた。

その笑いを噛み締める様にしていたヴィヴィオを、ムサシは見逃さなかった。

——公開意見陳述会・会場

時は半日ほど流れ、フォワード陣とヴィータ、リインは周辺の警備をしていた。ミライとなのは中の警備を行っている。

ムサシはエリオ、キャロ、ヴィータと周辺を歩いていたが、エリキャロと離れてヴィータと2人で少し離れた場所を回っていた。

「ここも、特に何もなさそうですね……」

「ああ……」

周辺に警戒しながら呟くムサシに、どこか沈んだ調子でヴィータが返す。

「ヴィータ副隊長？　どうかしましたか？」

「ああいや……。こういうデカイ仕事の時きつーと、おめーが無茶するイメージがあつてな……」

「グサツ！」

ヴィータの顔を覗き込みながらムサシが聞くと、ヴィータは目を細めてムサシを見ながらそう言った。その言葉に、思わずひっくり

返りそうになるムサシ。

唇を尖らせるムサシを見ながら、ヴィータは微かに頬を染めて口を開く。

「なあ、ムサシ……」

「はい……？」

ヴィータに呼ばれ、ムサシは顔を戻して首を傾げる。ヴィータはますます頬を染め、数回口を開閉してようやく開く。

「あ、あたしは……その……」

視線を泳がせながら口をもごもごと動かすヴィータ。ムサシのきよとした表情を見ながら、ヴィータはしっかりと言った。

「お前の……ムサシの事が……」

――数時間後

意見人述会も終わりが近付き、フォワード陣も一箇所に集まっていた。

心なしか、ムサシとヴィータの距離が離れている気がする。そしてどこか互いに顔を背ける様になっている。

「そろそろ終わりね……」

「ああ……」

ティアナの呟きに、レンが返す。

だがその時、大地が揺れる。そしてどこからか、突然無数の怪獣が現れる。

「なっ!?!」

「なんなの、あの量!?!」

それを見上げながら、ヴィータとスバルが驚きの声を漏らす。

レンとムサシは互いに顔を見合わせ、ウルトラゼロアイとコスモブラックを突き出す。

「デュワッ!」

「コスモオオオオオオオオオオオオオオオオオオス！」

青い光と共に、ウルトラマンゼロとウルトラマンコスモスが怪獣達の前に立つ。

『お願い！ リドリアス！ ゴルメデ！ ボルギルス！』

コスモスは3体の怪獣を召喚し、怪獣達に突進していくリドリアス達。コスモスはフォワード陣を庇うように戦っていると、突然空が暗くなり、怪獣達が二手に分かれる。

その間から、黒に赤いラインの入ったウルトラマンがゆっくりと歩いてきた。

『ベリアルっ！』

ゼロがその名を叫び、コスモスも警戒してコロナモードにチェンジする。

『ウルトラマンベリアル』は黒い棒状の道具、『ギガバトルナイザー』を大地に突き刺す。

『フッハッハッハッハッハ！ 久しぶりだなあ、ウルトラマンゼロ！』

『てめえ!』

ベリアルの高笑いに、ゼロが突進しようとする。だがその前に、怪獣達がゼロの動きを止める。

その間に、ベリアルはコスモスの方を向いて1つのカプセルを前に出す。

『貴様は……挨拶代わりだ、これを見る!』

『それは……?』

そのカプセルの中には、1人の青年が捕らわれていた。コスモスは、なぜかその青年に懐かしさを感じる。

『1つの名は………』

春野……、ムサシ』

『……えっ？』

ベリアルという言葉に、コスモスが硬直する。いや、コスモスだけでなくリドリ阿斯、ゴルメデ、ボルギルスも動揺している。

『分からないか？ こいつはお前と同化していた地球人。お前とこいつが遊星ジュランに向かっている所を、俺様がちよいと遊んでやった訳だ』

その時、コスモスの中ですがすべてが繋がった。

自分は親友と宇宙を飛んでいた。そこで自分はワームホールに吸い込まれ、この世界に飛ばされた。

リドリ阿斯、ゴルメデ、ボルギルス。3体ともそのロケットに乗っていた怪獣である。

そしてベリアルが握っている、春野ムサシの入ったカプセル。

『おおおおおおおおおおおおおおおおお！！』

コスモスは光の如き速度で突進し、カプセルをベリアルの手から強奪して空に上がる。そしてカプセルを空け、ムサシをカラータイマーに吸収する。

そんなコスモスの視界に、燃え上がる機動六課の隊社が映る。

『ちっ！ 余計な真似を……！』

コスモスに反撃しようとするベリアルだが、その前にゼロが立ちはだかる。

『ここは俺とリドリ阿斯達に任せろ！ お前はエリキャロと六課に行け！』

『すみません！』

ゼロとそうコンタクトし、コスモスはフリードに乗ったエリオとキャロを追い掛けた。

ミライはなのは、フェイトと別れ、単独で走っていた。
そんなミライの前に、自分と同じ容姿をした青年が立ちはだかる。
それを見たミライの目が、大きく見開かれる。

「そんな……！　あなたは……？」

声が震え、ミライが動揺しているのが分かる。

「ナンバーズ0番……バン・ヒロト」

バン・ヒロト。メビウスがヒビノ・ミライの姿を取る際に元にした人物だ。

彼はウルトラゾーンに仲間を救う為飲み込まれ、行方不明だった。
メビウスは彼を救おうとしたが、手が届かなかった事を今でも悔やんでいる。

そんなヒロトが、今は目の前に居る。しかも敵として。

「ヒロトさん！　僕です！　ウルトラマンメビウスです！」

「ウルトラマンメビウス……目標確認。破壊活動に入る」

ヒロトはミライの言葉を見殺し、左手首から橙色の刃を出現させる。

「IS発動……メビウムブレード」

その刃をミライに向け、ヒロトはゆっくりとミライに歩み寄った。

そんな混戦の様子を、カオスヘッダーが上空から怪しく見つめていた……。

T o b e c o n t i n u e d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5423x/>

ウルトラマンコスモスサーガ

2011年11月24日21時53分発行